

わ け
特集 私が離婚を考える理由
厚生省を囲んだ若者たち
イスラエル体験記

逐次刊行物

平 7 年, 10. - 5 歳

国立婦人教育会館
婦人教育情報センター

読んで、書いてネットワークキング

256



有斐閣

尚書館
(定価は税込み)

東京・神田・神保町2/Tel.03-3265-6811

●図書目録送呈●

エンパワーメントの女性学

村松安子 編
村松泰子

〔有斐閣選書〕
定価 一八五四円

健康・性・教育・家族・法律・政治・経済・労働・社会政策・メディアなどの領域で、男女平等はどう達成されているか。日本と開発途上国をふくむ世界の女性がともに力をつけていくための方策や変革への具体的なステップを考える。

わかりやすい
育児休業法新

女性の
データブック
第2版

労働省婦人局婦人福祉課編

井上穂子・江原由美子編

育児休業期間中に給付金が支給され、社会保険料の本人負担が免除されるなどの改正点を盛り込む。育児休業申出書等の書式例も収録。
〔有斐閣選書〕 定価九二七円

夫婦別姓への招待
新版
いま、民法改
正を目前に

高橋彌江・折井美耶子・二宮周平著

〔有斐閣選書〕 定価一九五七円

初版以後の夫婦別姓制度や非嫡出子相続差別の撤廃等を内容とした民法改正要綱草案の発表をうけて、全面的に内容を見直した。

男女同一賃金
賃金差別をなく
すためには……

中島通子・山田省三・中下裕子著

〔有斐閣選書〕 定価一八五四円

男女雇用機会均等法が施行されてから一〇年になろうとしているのに、女性の賃金が非常に低いのはなぜか。「同一価値労働同一賃金」の実現は日本でも可能だろうか。その実際と行方を検証する。

愛と性との新しき谷間を
見つめて立ち、たじろぐ
現代女性へ贈る。

女性性線

「おりん口伝」の作者

松田解子

卒寿記念出版

珠玉の逸品
今、よみがえる

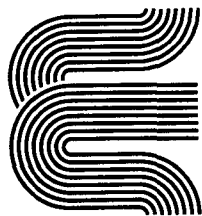
定価2600円
送料340円

「中絶」が犯罪とされ、女だけが罰せられた時代。

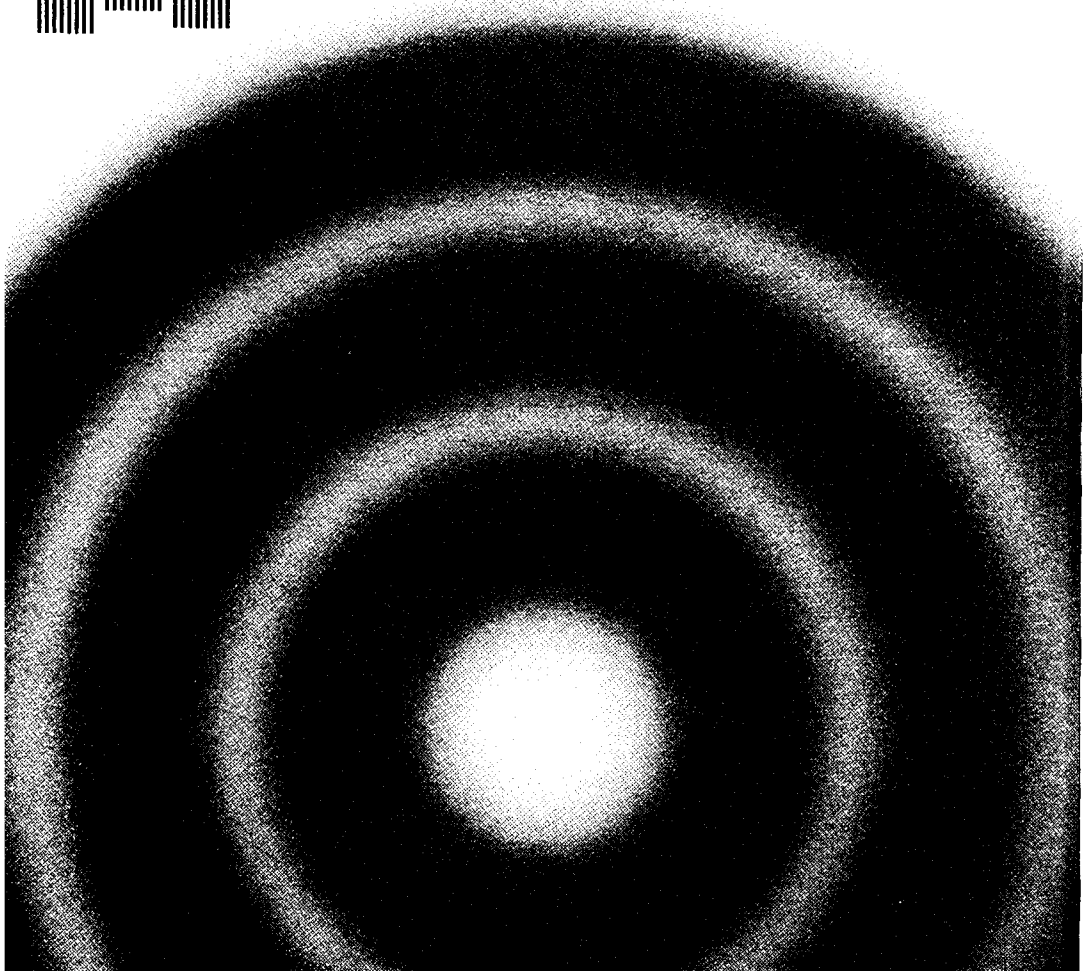
「征服されずに真の平等さをもって愛したい」と理想の男女の姿を追求しつつ、産児制限運動に献身する篤子―。彼女の相談所には、望まない妊娠に苦しむるい子、義兄の子を孕んでしまった娘お春ちゃんら、母性の自由を奪われ愛と性の現実にあえぐ女たちがつづつぎに訪れる。しかし弾圧の嵐は吹き荒れ、運動は解散へと……。1937年の著作、いま新たに蘇る。

あけび書房 東京都千代田区神田神保町2-12

TEL 03-3234-2571 振替00160-6-40323



●—— 読んで、書いて ネットワーキング



読んで、書いてネットワークング わいふ二五六号

目次

4 ヴアラエティ・ライフ④

フリー保健婦・埼玉県蕨市 大石圭子さん
写真提供：文／大石圭子さん

特集 私が離婚を考える理由^{わけ}

10 関白姑とマザコン夫に泣いた日々 松本とみよ

18 私らしく生きたい 宮崎貴子

25 「離婚」なんて絶対したくない、だけど…… 若宮純子

30 もう少し、一緒に暮らしてみようかな 岸田麗子

35 エッセイスト・クラブ

原 眞智子・神山寿子

39 スパリー言

岩田佳子・矢崎道子

戦後50年記念連載

42 シベリアの青春④ 福井秀雄

51

おさない子を育てる

福田豊子・山本雅子

54

厚生省を囲んだ若者たち 本庄たよ子

60

サーフライフ

長谷川恵美子・匿名・藤田勝美
岩崎智子・宮崎貴子・匿名

66

イスラエル体験記 ワイツマン・清泉多美

74

家族と私

清水博子・三田サキ
きくい ゆう・長縄幸子

82

戦後50年記念連載^{最終回}
私と英語 酒井智恵子

92

ブック情報

96 時事放談 ⑩「私の出会ったこんな医者」
倉持和子・林 世志江・横山素子

105 マイジヨブ・マイホビー
ひかり

110 片側顔面痙攣とつきあった日々 山田淳子

115 おすすめの一冊

大兼孝子・河野道子・松井くみこ

118 英語夢追い人たち ② 竹谷セツ
—— 語学喫茶物語 ——

126 情報コーナー

128 フリースペース

村井尚子・田中慶子

135 平成おったまげーション ② 西田淑子

136 コミック ● 痛快ノ一般人 ② 栗田笑

140 ファム・ポリテイク編集室より 田中喜美子

142 ピンポイントニュース・私もひとこと

菊池裕子・太田和枝・T・M

146 老人ホーム情報センター発

147 わいわいがやがや

浅田節子・近藤美子・時尾松子

次号投稿募集 149
編集だより 152
投稿規定 150

わいふ原稿整理方針 ⑬
自費出版はわいふへどうぞ ⑭
文章講座のおすすめ ⑮
バックナンバー ⑯
添削希望の方へ ⑰

■表紙／レイアウト・工房はやし
■AD・林 佳恵

イラスト・梅村莓・奥島千恵子・小沢恵子
カステラネンコ・小林正子・小宅昌枝
佐藤瑞江子・田沼千恵・鳥居禎子
西宮さき・橋本美智子



フリー保健婦・埼玉県 ^{わらび} 蕨市

大石圭子さん

“わいふ”と出会い十年。十周年記念ということですうすうしくも、誌上で十年史を発表させてもらおうと申し込みました。

仕事

短大の家政科卒業後、母の病気を機に看護学校へ入学。東京の虎の門病院に五年間勤め、育児のため退職。九年間専業主婦をしました。昨年から保健婦の産休代理をきつかけに職場復帰。現在は、埼玉県戸田蕨保健所で非常勤で働いています。



“わいふ”との出会い

今子ども達は、小学校五年、四年、二年。十年前夫は、絶対育児に協力するという条件とジャンケンで勝ったこと（どっちが仕事をやるかの）で、仕事大好き人間の私に迫り、私は泣く泣く退職。いろいろなストレスで子育てを楽しむ心の余裕もない時、新聞で“わいふ”を知り読み始めました。“わいふ”は私の子育ての原点であり、精神的命の恩人なのです。



▲市内の第1子の新生児の訪問指導も私の仕事です



▲戸田市と蕨市の三歳児健診も仕事です



▲大事な商売道具、訪問カバンと愛車。
日本一面積が小さく、人口密度の高い蕨市は、
端から端まで自転車で20分あれば、ゆけます



▲近所に住む4人の男の子の母「ナオさん」
私の相談相手。困った時のナオさん頼みです

九年間の専業主婦生活で始めたこと
地域で三十名ほどの子育てグループを作り、
楽しみました。子ども達が小学校へ通うよう
になり、名前だけだった「子どもを考える会」
の事務局を引き受け活性化させて三年目です。
月一回、地域の小中学校の教師たちと開い
ているこの会の目下の課題は、考えてばかり
いないで行動に移そうということ。十月に「性
教育講座」を予定しています。
そして去年の九月、埼玉県女性の海外派遣
事業に応募しデนมार्ク、スウェーデン、ド
イツでの十一日間の研修。夫と子ども達は、
自主研修にて大きく成長（せざるを得なかつ
たようです）。



▲「子どもを考える会」のチラシです。
テーマの決定が大変です



▲「埼玉県彩の国づくりマリンセミナー」
出航です

▶マリンセミナー10班のメンバー。
みんなかわいい子でした



▲日本語ボランティア教室。今日は月1回の
自国紹介の日。パキスタンのアキールさん
の発表のお手伝いです

また、仲間と日本語ボランティアサークル
を作り、週一回公民館で外国人に日本語を教
えて楽しんでます。
「書くことが好きなので、蔵市発行の生涯学
習情報紙「わらびing」と男女平等啓発紙
「パートナー」の編集委員をやっています。ま
た教育委員会の諮問機関である蔵市社会教育
委員会の委員にもなっています。

今年の八月も八日間の鳥羽、沖縄船上研修
(埼玉県マリンセミナー)に応募し、地域女性
活動者として参加。二つの研修で埼玉県内に
たくさんの方々ができました。子ども達はお
母さんばかりずるーい」と言ってます。



▲去年9月の海外研修。スウェーデンのト
ロビーエンさん宅にホームステイしました



▲「わらびing」は、私が命名しました



▲力持ち田さんでもあります



▲海外研修後、「お田さんばかりする～」ということで今年の3月中国へ



▲うちの子とも達。左から瑞樹、あずさ、岳です



▲車を持たないので夫とこれに乗ってます



▲走るの大好き。市内の大会で一昨年6位、昨年4位。さて今年は？ 子ども達とホノルルマラソン参加予定です



◀家作りに挑戦中。私の実家（山梨）の裏に家族で作り始めて5年です。完成はいつの日か？

夫と子ども達とみなさんへ
私のまわりは、夫をほめる人、子ども達をほめる人、私をほめる人という感じです。十年前ジャンケンに勝っていたら、今の私はなかつたでしょう。そんな意味では、育児もすっかり協力してくれた夫に感謝。
そしてゴーイングマイウェイの田に、一生懸命ついてくる子ども達に感謝です。みなさんの十年はいかがでしたか。

専業主婦が 消える

末包房子著
定価 二五〇〇円

年金などで優遇・保護されている専業主婦。しかし本格的な高齢社会の中で二一世紀も同じ境遇の中で生き残れるのか。多くの施策の意図を明らかにするとともに今後の女性の生き方を示唆する。朝日新聞家庭欄（関西7月19日、関東8月26日）に詳しく紹介。

やさしい年金教室

受給者の立場から、起こりうるさまざまなケースについて問答形式で対応する。平成6年改正版
久野万太郎著 定価 一五〇〇円

ホームドクター

主侍医制度

健康を守る契約顧問医。気軽に相談できる家庭医をもつ。
寺下謙三著 定価 一四〇〇円

ニセ医者からの出発

医療現場で遭遇する諸問題を軽妙なタッチで、医療の核心をつく。徳永進著 定価 一五〇〇円

〒113 東京都文京区本郷5-32-6

同友館

TEL 03-3813-3966
FAX 03-3818-2774

ひがしやま
東山書房

東京都中央区新川2-2-1 708
京都市右京区山ノ内大町5-3 708
075-841-9278

性からだるこころ 悩みのぼい！ 毎日中学生新聞連載

村瀬幸浩・堀口雅子著

悩むことはいいこと。人の苦しみ・悩みのわかることは大切。でも時には、1人で考え過ぎず、「助けてー」と声を出すことも大事。みんなの悩み・性編、からだ男の子編、からだ女の子編、こころ編に2人が明快に答えます。(中学生に勧める本、主な思春期外来リスト付き)

四六判/定価1500円(税込)

“人間と性”を考える話題の総合情報誌

Human Sexuality

「ヒューマン・セクシュアリティ」

終刊号

●編集長●村瀬幸浩●
●企画編集●“人間と性”教育研究協会
●季刊/日5割・138頁●定価1800円(税込)

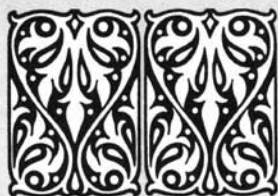
20号(新刊)《特集》「男の性と生」を見つめる

【特集鼎談】「男の性と生」の現状と展望
〈ゲスト〉奈良林祥・山崎比呂志 〈司会〉原田瑠美子
【特集論文】知っておきたい(男)性の基礎知識…三浦一朗
【特集ルポ】インタビュー「男たちは、変わっていくか？」
インタビュー・岡川博二・坂本洋子・若原淑夫・
橋爪大三郎・片山友治・関 修

取材・三井富美代・草野いづみ・木谷美子
【特集レポート】「ラッキースケベ」の男性たち…多田ゆかり
【「男性の性」を考える授業実践】小・中・高各1本
●サブ特集●「引き裂かれた生と性」——戦後50年の現在◎

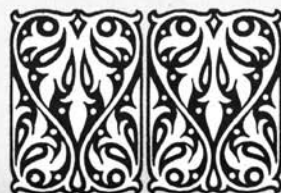
19号 障害者のセクシュアリティと性教育
18号 育つものとしての「母性」そして「父性」
17号 家族—その将来の明暗を問う
16号 エイズ—共生・共存の展望をひらく
15号 女性の性的欲求と性行動
14号 10代の性と「純潔教育」を考える
13号 いま、あらためて人工妊娠中絶を問う

●上記のバックナンバーは在庫ありです(定価・各1600円・税込)。郵便振替:01040 1 1067部



特集

私が離婚を考える理由^わ_け



特集

私が離婚を考える理由^{わけ}

関白姑とマザコン夫に 泣いた日々

熊本県天草郡●松本とみよ（39歳）

顔見て「パス」だったのに

私の結婚は、ちょっと変わっている。

私は母と、高校生の妹の三人家族だった。父を亡くして一年後のこと、

甲状腺機能亢進症を患った私は、長崎県の宇賀外科という所に入院した。甲

状腺の専門医である。

その病院に、後に夫となる人の兄が、同じ病気で入院していたのだ。出身が同じ天草ということで、私達は親しくなった。

退院して何日かたって、突然、その兄が姑とわが家にやって来た。

「弟に会ってほしい」という。病院時代、冗談のように、弟と結婚しないかといわれたことがあったが、まさか現実になるとは。

その弟は、外国航路の船員ということだ。留守がちの船員の妻にだけは、なりたくないと言ひごころ思ってきた。

しかし、私も二十六歳。色々な人と会ってみるのもいいかもしれないと

思った。

夫は西田敏行ふうで、会ったとたん、心に「パス」と叫んだのに、結局結婚することになった。それは、私が今まで会ったどの男とも違うものをもっていったせいだ。会っていると、笑わずにおれないくらい愉快な人なのだ。私の行ったことのない外国や、船員達の面白おかしい失敗談も楽しかった。

その上気前のよい人で、妹に高価なラジカセなどプレゼントする。断わりづらくなると思っ、「困ります」というと「その時は、捨ててくれ」という。まるでドラマみたいで悪い気がしない。

姑もほかからできさくな人。この人

は、三十三歳の時に、夫を船の遭難事故で亡くしている。以来、男の子二人を女手ひとつで育てあげたしっかり者。兄のほうは、すでに結婚して独立、他県に住んでいた。夫は姑と二人暮らし。

結婚するといっても、母の老後が心配である。夫の留守がちの家で、姑と二人暮らしにも自信がないと尻ごみした。

夫は、養子にはゆけないが、私の母の老後の責任は取るという。それに、自分の乗船中は実家で暮らしてもかわないというのだ。私にとってそれは、願ってもない条件であった。

私は高校生の妹が卒業するまでは、自分の給料の中から親に援助したいが、かまわないかと聞くと、「給料なんて、みんなやってしまっいいじゃない」なんて言う。

よい家庭とご縁があったなあ。養子を迎えたいと言う父の遺志には反したが、これほど私達のことを気づかってくださるなんて、と単純に感激する私



だった。

姑の存在も、なまけものの私には、勉強になると無理に納得したが、本当に甘い考えであった。母子家庭の母と息子の絆の深さは、計算外のことだった。

後で結婚に苦しむようになると、実家の母までうらんだ。結婚が、どれほど女にとって理不尽で不利な制度か、もっと説明してほしかった。私は、夫ではなく、結婚という制度に苦しんだ。

“嫁二十日に牛三日”という言葉がある。結婚前は、姑や夫には、本当によくしていただいた。

婚家が私の勤務先から遠いというので、「金は出すから、自動車学校に通うように」という夫の一言で、自動車学校に通うことになった。

夫は乗船中だったが、姑がちゃんと費用を出してくれた。卒業すると、車も買っていた。

病氣入院で、半年会社を休んで復帰したばかりの私には、ボーナスがな

かった。それを知った姑は、

「息子からボーナスを送って来たから」と言っ、私にもおすそわけしてくださるというぐあい。

世間知らずの私は「なんてありがたい」と思っばかり。後々、代償を支払わねばならなかつたとは……。

姑関白に仕える夫

一年後、夫の休暇中に結婚式があげられた。姑と同居ではあつたが、結婚生活は楽しかった。夫の休暇が終わつて、乗船になる時は、私は実家に帰ることになつてゐる。休暇は二カ月半。八カ月から十カ月の乗船である。夫は、相変わらず楽しい人で、笑いのたえない家庭生活だつた。

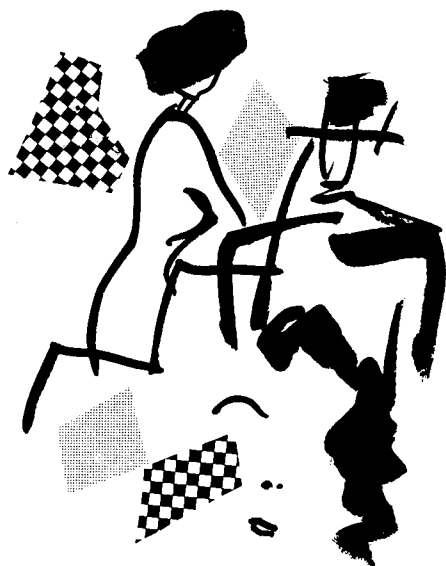
しかし、時折「??」と思ふようなことが、しばしば起こるようになった。結婚前は全然気が付かなかつたのだけれど、夫はどうも姑に頭が上がりぬようなのだ。

事情がわかるにつれ、この家は姑が

絶対の権力者なのだと思つた。亭主関白ならぬ姑関白。

夫は働くようになって以来、こづかい以外は、全て姑の口座に送金してゐたようだ。姑は、その金で生活してゐるらしい。姑には別に遺族年金が支給されてゐたし、自分の仕事の収入もあつた。

夫の送金に手をつけなくても、充分



すぎるほどのお金はあつたのである。そんな状況なら、私だつたら、息子の金は、全部貯金に回すと思ふのだが。貯めたお金は、全て自分名義。結婚式の費用も、自分の金を出してやつたんだなどと言われる。どうしてそうなるのって感じ。しかも、息子のおかげなんて、これっぽっちも思つておられるようすがないのだ。

これは、困ったことになりそうだと予感した。

私の実家は、父が一番えらくて、たとえ祖母でも父には逆らうことはなかった。母もいいなり。そんな家庭に育った私の目からみれば、奇異にうつった。

夫は、こづかいが必要な時は、姑からもらう。自分の働いて送った金を、なんで頭を下げて、嫌味のひとつも言われながらもらうのか、不思議に思った。

私は、自分のかせいだ金は、自分で管理する主義。当然ではないか。親に援助するにしても自分に影響のない範囲。私には、どうにも納得がいかない。夫と姑の関係は、当人達がいくら否定しようが、経済的には夫婦であった。母親の意のままに動く息子。男が三十三歳にもなつて、母親から頼りにされていない。

テレビで、マザコン夫のドラマがあり、姑と夫が笑って見ている。私には「まさに、あんた達そのものじゃない」

と愚えて気味が悪かった。家計をどうするのか、いまだ具体的な話が出て来ないのも気がかりであった。

私のほうから尋ねるのとはばかられる。いい出しづらい雰囲気があった。私の給与、夫の給与、姑の収入を使つて、どんなふうにか計を運営して行くつもりなのだろうか。

今は夫の給与で、姑が家計のやりくりをしているという状態。誰がやりくりしようとかまわない。ただし、オーブンにしてもらわねばやりづらい。当の夫ももらいづらいなんて話にならない。

夫はこづかいの無心をするのに、後には私のほうに言うようになった。口うるさい母よりも妻のほうがいやすかったであろう。休日どこかへ行く時も、お金は私が出した。しぜんと私の給与は、二人のこづかいになった。夫が突然、「家計をまかしてほしかったら、お袋に言えはいい」なんて言い出したが、それを私の口から言わせるのかと鼻白んだ。

わいふ原稿整理方針

◆投稿誌であるので、「原稿尊重」の方針で整理しています。

◆常用漢字表にない漢字または読みであっても、間違いでない限り、原則としてそのまま載せています。ただし次のような語はかな書きに直しています。

又↓また 程↓ほど 位↓くらい 為↓ため 頃↓ころ 丈↓だけ 方↓ほう 様↓よう 御↓ご 迄↓まで 良い↓よい 沢山↓たくさん 中々↓なかなか

害↓はず 更に↓さらに 但し↓ただし 何故↓なぜ e t c.

◆送りがないについては、一応次のような方向で統一しています。

例 変る↓変わる 浮ぶ↓浮かぶ 話合う↓話し合う 気持↓気持ち 行う↓行なう 表す↓表わす

◆用字用語の原則は三省堂発行「用字用語辞典」に準拠しています。



孝行息子は妻のひも

休暇が終わりに近づき、乗船になる数日前。姑からもらった旅費をパチンコですってしまつたと、私の勤務先まで金の無心に来たことがあった。姑に言えば怒られるからだ。

これでは、私にしてみればひもではないか。母親にとつての孝行息子が、妻のひも。しかし、パチンコに勝てば渡してくれる。取りあげるばかりじゃないところが夫のうまいところだ。

ご愛嬌と思うことにしようと、自分を納得させる。私にも強く言えない理由があった。結婚前、ずいぶんよくしてもらつたこと。実家で暮らしてもいいなんて、わがままを許してもらっているということである。

姑は、気前のよい人であつたが、恩着せがましい人でもあつた。

「あなたには、いくら金を使つたと思つてゐるの」

と伝家の宝刀のように言い出された時

は、自分が今後支払うべき代償の大きさに、奈落の底を見る思いだつた。お前には義務だけがあつて権利などないといわんばかり。私は買われて来た女中なのか。できるものなら、目の前にお金をたたきつけて縁を切りたいと思つた。

「ずいぶんよくしていただいて、ありがたいと思っています。でもそんなことおっしゃるなんて、私にすればエサをちらつかされて、喜んで寄つて行つたら、いきなりなぐりつけられた犬みたいな気持ちです」

この一言は、予想以上の効果をもたらした。自分の言っていることのいやらしさに気づいたのか、姑がだまつてしまったのだ。

ただより高い物はない。恩なんか受けるものじゃない。

夫が乗船になり、私は実家へ帰つた。夫から生活費の送金はなかった。私は、独身時代と同じ暮らしであつた。わがまましているのだからやむを得ないと思つた。

自分の給与は勝手に処分してよいのだと解釈した。私は女としては、結構もらっていて全然困らなかった。ポリーナスは夫より多かったくらい。かえって好都合ともいえる。

だが女として妻としてのプライドは著しく傷ついた。こんな大事なことをないがしろにされるとは。私を何と思っているの。実家で暮らしてもいいということに、こんなワナがあったとは……。

このころから結婚を後悔するようになった。姑が入らない二人だけの関係は楽しいことばかりだった。しかし、姑はいつも二人の間に入ってこようとしました。二人だけで出かけると機嫌が悪い。同居だからこそ二人だけになりたい時もある。姑はいつでもついて来たがった。

困ったのは、私がいつも不幸な状態ではなかったことだ。生ぬるい幸せの中で時折、針でつつかれる。へびの生殺し。幸せの中の不幸って、ホントに始末が悪い。

姑との見解の相違。努力してもどうにもならない闘いのようで、もがけばもがくほど、身動きできない蜘蛛の糸に思えた。

本気とも冗談ともつかず、夫に、「私を愛人にして。もう本妻なんて結構。離婚してちょうだい」と言ったこともあった。

密かに離婚届を出して、姑が色々と難題をふっかけるような時、「あら、関係ありませんわ。私はこの嫁じゃありませんから、あしからず」

とせせら笑う場面を想像しては愉快になった。

子供が生まれても、私達の生活は相変わらずであった。

「夫」っていったい何なの

夫があの時何も言わなかったら、ずっとこんな状態で暮らしていたかも知れない。

ある日、火山の噴火する時がやって来た。夫は休暇中毎日私を職場まで送り迎えた。ある朝、出勤途中の車の



中で夫が、

「お前、自分の給料はどうしてるんだ」

と言ったのだ。私が自分の給料を自由にしているのを非難したのだ。

その一言で私は爆発してしまった。

「じゃあ聞くけど、あなたは自分の給料をどうしているの？ そんなセリフは、自分の妻と子を自分の給料で養っている人の言うことよ。私はあなたから生活費をもらったことはない。私は子供のミルク代さえもらったことがない。それで夫や父だといえるの!! それにもかかわらず、あなたは、私にこづかいせびる時だってあるじゃない。私にとってはひもよ。お姑さんにとっては孝行息子でしょうけど、私にとっては甲斐性なしよ。

私の給料をどうしようっていうわけ？ あなたにやれとでも言うの？ そんなことして、私は一体どうやって生活するのよ!!」

言いたいことは、いっぱいあった。しかし、涙が出て、しゃくりあげはじ

めた私には、もはやまともに言葉を発することは困難であった。泣いている自分が情けなかった。涙さえ出て来なかったら、もっともっと辛らつな言葉をなげかけるのに……。

別れよう——こんな結婚意味ない。

私は思いはじめていた。夫はだまってる。

職場についた私は、まだ泣いていた。涙もふかずに車を降りた。出勤する同僚達が、いぶかしげにふり返った。

夫のよいところは、自分の非がわかるということであろう。

反省しているのか、「女を泣かすなんて悪かったと思っている。おれは、お袋が、おれの給料はお前に渡すものと思っていた」なんて言う。

それでまた、私は頭に來た。オフクロのせいにするの。

「オフクロが何の関係があるの!! これは、あなたがどうしたのよ!!」

夫さえしっかりしてて、妻とどんな

未来をききこうとしているのか、ちゃんと方針があったらこんなことは起こらなかった。姑が出て来る余地なんてないはずだ。出て来させているのは夫本人ではないか。

「お前にはまかせられんから、お袋にまかせろ」ならまだ救われるが、夫はどうでもいいと思っていたのではないか。

「いや、実は、そんなことを考えてもいなかった」

全くあきれはてる。そのいいかげんさが悔しくて許せない。

「私は、あなたの給料がなくても生きてはゆける。だけど結婚生活は出来ない。結婚して夫と妻がお互いの給料出しあって、いつか家でもたてようかと目標たててがんばるものでしょう。あなたは今までお姑さんに自分の給料送ってきたけど、それはみんなお姑さんあげるつもりだったの?」

「いや使ってもいいけど、余れば預金しといてくれというつもりだった」

「お姑さんは、そうは思っていない

じゃない。みんな自分のお金と
思っているのよ。親に金送る
などとはいわない。なんで
自分のお金は自分で預金し
ておかないのよ。自分の送
ったお金を頭下



げてもらうなんて、おかしいとは思
わない?」

結婚に対して何の考えもない夫。今

考えても悔しくてならない。私の難儀は全て、頼りない夫から来ている。姑がどんな姑だろうと、夫さえしつかり自分と妻の結婚を第一に考えたら、何も問題はないはずなのだ。結婚前から自立している夫であつたら、結婚後姑の入る余地などないはずなのだ。

夫は父を知らない。家庭での父や夫のあり方がわからないのではと私は思
いあつた。

夫とは、父とは、妻や子を第一に考
えるものよと説得した。

夫がどういうふうに姑へ切り出すの
かと思つていたら、乗船するという、
その日、出発間際に姑に一言、「家計
は、妻にまかせるようにしてくれ」と
言い残して、逃げるように家を出て
行ったということだった。後で、姑か
ら聞かされた。

怒り狂う姑の処置は私に押しつけた
わけだ。

「ひきょう者!! 母親がこわいのかマ
ザコン!!」と叫びたい気持ちだった。

夫は、名誉挽回のつもりなのか、家

を建てると言い出した。

「私は、そんなつもりで言つてない。
ただ目標にと、仮定の話をしただけな
のよ」

預金がいくらあるのかも知らないで
と、またまた私の大ひんしゅくをかつ
た夫。

ひょうたんから駒で家が建つて、私
と姑は、本当の同居をするはめになつ
た。

それから十年がたった。ふつう、マ
ザコンドラマでは、嫁が見切りをつけ
て出て行くという結末になるものであ
る。

私も何回か出て行こうとはしたが、
自殺と同じでなかなか実行は難しい。
色々のゴタゴタを乗り切るうちに、し
だいに夫はマザコンを卒業していった。
いくら夫を愛していても、姑と別れ
るためなら、すぐにでも切り捨てるこ
とのできる自分を感じて、空恐ろしく
思つたものだ。

結婚は当人達だけの問題ではないか
ら難しい。

私らしく生きたい

大阪市旭区●宮崎貴子（32歳）

正式に離婚してから六年。それ以前の別居生活を含めると、七年近くの歳月が流れたことになる。

随分昔のことのようで、今では自分の人生にそんな時期があったことが信じられなくて、まるで他人事のように客観的に感じることもさえあったり、その反面、まるで昨日のことのように色々な事柄が鮮明にフラッシュバックして、私を苦しめることがある。

そして離婚を言い出したあの一瞬は、私の中で一生消えない景色として残ることだろう。

納得する理由

色々な人に、何度も、

「どうして？」

と聞かれた。ごくごく親しい友人二、三人以外には月並みながら、

「性格の不一致」

と答えた。だが、大学一回生からでのべ九年近くつき合ってきた（もちろん彼とだけつき合っていたわけではないが）彼との結婚だったから、誰も信じてくれない。そのうちに私は面倒なの

で、「うーん、ま、てっとり早く言えば、飽きちゃったってことかなー、ははは」

と笑ってごまかすことにした。幸か不幸か、どうもミィハーで翔んでいるというイメージが強い私が言うのと、皆なるほどという顔をして納得してくれるのだった。

もちろん飽きる（という言い方に語弊があるなら「マンネリ」または「倦怠」とでも言い換えようか）と言うのも、当たらずとも遠からずと言えるかもしれない。しかしいくらなんでも、そんなことで一大決心をするはずがない。私が離婚を決意したのは……。

突然の叫び

平成になって日も浅い冬のことだった。

「別れる！ もういい！ 絶対別れるから、もう決めたから!!」

気がつくとき暗い廊下で叫んでいた。

突然の思いつきのようないきなり叫びだったけど、実は心の奥底でずっと「別れる」という一言をまるで爆弾のように抱えていたような気がする。もしかしたら私はいつかこんなふうに叫ぶ日がくるかも知れないことを、うすうす気づいていたのかもしれない。だけど、そんな怖い言葉は一生言わずに穏やかに暮らしていきたいと思っていた。そこから目をそむけて気づかないふりをし、逃げていただけのようないきさした。「別れる」という言葉が自分でものぞけないくらい心の奥の奥にしまわれていたことも、彼が青ざめるほど動揺したことも分かる。だってそんなことが私たちの間に起こるはずがないのだ。喧嘩しながらもずっとつき合ってきた

し、なんだかんだ言ってもいつも結局元のさやにおさまってきた二人だったから。

私と彼は大学の同級生で、一回生の時からのつき合いだった。お互い「第一印象から決めてました！」って感じで、自分で言うのもなんだけどお似合いのカップルだったと思う。卒業後四年半という長い遠距離恋愛を経て、半年前に結婚したばかりだった。

彼にとっては天地がひっくり返るほどのショックだったろう。だが彼が驚いたのは「別れる」という言葉が、今、私の口から飛び出したことにも原因があったのだ。なぜなら、そこは彼の実家で（たまたま周りに誰もいなかったが）、その日は彼の父親のお通夜だったからだ。

いわゆる嫁いびり

以前から（恋人時代から）彼の母や姉（既婚）は意地悪だった。友達の間でも厚く、ルックスも花マルの彼に比



べ、彼の母や姉はひどかった。失礼とは思いますがもっさり、「本当に似てないねえ」と言ったことがある。

「うん、よう言われるわ」と本人は笑って答えていた。だがきくと、彼女達にとってそんな世間の評価（？）は屈辱的なものだったのだろう。しかしはっきり言ってそれは私のせいじゃないし、私の知ったこっちゃないのだ。

彼女達は私を息子（或いは弟）の彼女としてみるのではなく、一人の女性として完全にライバル視していた。彼女達は私の一つ一つが耐えられなかったようだ。彼と同じ大学に通っていることや、家庭教師のアルバイトをしていることに始まり、彼女達より痩せていることウエストが細いことなどなど、アホらしくって話にもならない。

唯一自分達が勝っている（という感覚がおかしいのだが）のは、私より背がすこーし高い（ちなみに私は一五二cmで、彼女は一五七cmそこそこだっ



た)という点だったらしく、私は会う度に執拗なほどにその点を責められ、笑いの種にされた。一度その点について彼に訴えたことがある。

「私だってこんなこと真面目に訴えたくないよ、アホらしい。でも毎回毎回言われたら、適当に笑ってやり過ぐすのにも限度がある。すっごく気分悪い！」

と。話しているうちに、こんな馬鹿馬鹿しいことにムキになっている自分が情け無いやら悔しいやらで、涙が止まらなくなってしまった。結局私の言いたいこと(こんなつまらないことを真剣に話さなきゃならないこと自体が悲しいってこと)は分かってもうえなかった。その時の彼の、

「別に泣くほどのことでもないやん。

あはちゃう？」
と言った冷たい言葉を私は絶対忘れない。

彼女達の底意地の悪さに彼自身も気づいていたようで、

「確かにねえちゃんは、いけずや」

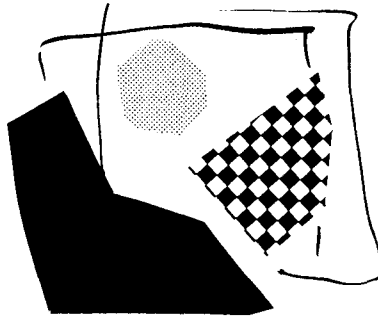
と何度か言っていた。しかし母親にいたっては最後まで、

「悪気はないんや。許したってくれ」と言っていた。

私は背の低いことを話の種にされる(揚げ句のはて甥の幼稚園児と背比べまでさせられそうになった)こと自体にこだわっていたのではなく、一事が万事低俗な彼女たちに我慢ならなかったのだ。身長のこととはほんの一例なのに、彼はそれを全く分かっていなかった。私は彼に、いつもいかに次元の低いことで私が嫌な目にあっているかを分かって欲しかったのだ。

お葬式という行事の中で親戚縁者を味方につけ、彼女達はことごとく私に辛くあたり、その意地悪はピークに達した。もう我慢できない、こんな人達

と一生つき合うのは耐えられないと思っただけ。くだらないことで気分を害し、頭を痛めることに耐えられなかった。いちいち彼に説明するのも嫌だった。どうせ私の気持ちは分かってもらえない



のだから。

気がつくとい何の前触れもなく突然「別れる」という言葉が口から飛び出していた。そんな自分自身に驚くと同

時に、感情的になって取り返しのつかないことを言ってしまったのではないだろうか、という恐怖も感じた。しかしその一方でやっと言えた、という妙な安堵感を感じたのも事実だ。ずっと胸につかえていたことをはき出せてほっとした、とても言おうか。

いくら話しても

「どういふことか、説明しろよ」

彼の動揺が手にとるように分かった。でも私には彼を説得するだけの十分な説明をする自信がなかった。

「おふくろや姉のことか？」

「うん……でも、それだけじゃない……」

「それだけじゃないって、何があるんや！」

彼は怒っていた。もちろん義母や姉のことが直接の原因だ。少なくとも私が突然「別れる」なんて言い出したのは、彼女たちのいわゆる嫁いびりだったことは間違いない。彼と別れない限

り彼女たちと縁が切れることはないのだから。

「ただけど果たしてそれだけだろうか。」

違う、違う。別に同居しているわけじゃないし、そんなしょっちゅう顔を合わすわけじゃない。あんなレベルの低い人達ほっとけばいいんだ、っていうプライドくらい持ち合わせているつもりだった。平和で穏やかな結婚生活を彼女達のせいで壊すなんて、馬鹿馬鹿しいと思う気持ちもあった。なのに、なぜ？ つまり、彼女たちのことはほんのきつかけに過ぎなかった。「別れる」と言い出すためのきつかけ。どうしようどうしようと思悩んでいた時に、ふいに背中をぽーんと押されて、一瞬にしてふんぎりがついた、みたいな。だから少しずつ私の心にわだかまっていたことを話そうとしたその時、「どうせ、また訳の分からん屁理屈やろ」

彼が言った。ほら、やっぱりだ。私の意見なんてはなから聞くつもりないんだ。いつだってそうだ。私が一生懸

命自分の考えていることを話そうとしても、聞こうとはしてくれない。自分の中で混沌とした気持ちを何とかして分かってもらいたくて、言葉を尽くして説明しても、決まってはき捨てるように言うのだ。

「頭のいい女はこれやから嫌いや」と。

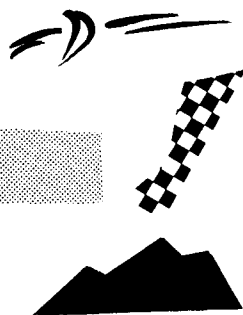
本当の理由

好きな人に自分の気持ちを分かかって欲しい（認めるという意味ではなく）と思うのはそんなに悪いこと？ うまく説明できなくて自分でも歯がゆくて、だから一生懸命言葉を探して少しでも伝えようとするのはそんなにいけないこと？ いつもいつもそんな疑問が心の中に渦巻いていた。私は慢性的に不完全燃焼状態だった。そしてそんな消化不良のような心で私が苦しんでいることなど、彼にはどうでもよいことだった。そう、結局「好きやから、そんなことどうでもいいやん」という一言で何もかも全て片付けられてしまっ

ていたのだ。だけど今回はそうはいかない。なにせ「離婚」がからんでいるのだ。

「だってTちゃんの好きなのは本当の私じゃないよ。理想のベールに包んで

☆.....



むような、一緒に歩いて成長していく二人三脚のような恋愛は好きではないのだ。

「最初のころ、洋裁や編み物が好きで、料理が得意で理想の子だと思った。見

てるだけ。私のことは好きかもしれないけど、それは私の実像じゃないもん。私はTちゃんの好きな無口で、おとなしいだけの子じゃないもん」

いつごろからだろう。私は気づいたのだ。彼は黙って自分の後ろをついてくるような女性が理想なのだ。私が望

かけも中身も俺の好みそのものだった。でもそれはオマエの一部分に過ぎなかった。活発だし、男の意見にハイハイってついてくる子じゃないって分かった。でもそれでも好きで……」

「でしよう？ 全然、タイプじゃないでしょ？ でも心のどこかで自分の理

想通りの子だって、ずっと信じていたかったんでしょ？」

私の中のポジティブな部分を発見する度、彼は自分の中の矛盾と闘っていたのだろう。私がスポーツでも文芸でも、また友人でも、とにかく新しい世界を持つのを極端に嫌がった。

だけど、面と向かって「止めろ」って言わなかったのは、私の反発を恐れていたからに違いない。それこそ「別れる」と言い出しかねないと思っていたのだろう、恋人時代も、結婚してか

らも。だから必死で本当の私から目をそらしていたのだ。

「離婚なんて……俺はこんなにもまだ……」

違う、彼が愛してるのは虚像。私のことを大好きになって、でも本当の私は少し違っていることに気づいた。でも気づいた時には心はもう後戻りできないところにいただけ。

彼は自分の言うことに、三歩下がってついてくる女性を求めていたのだ。私はそんな女性になれない（なりたく

もない）。そして彼は私と別れるのではなく、好きだという気持ちだけを見つめ信じることにしたのだろう、もしかしたら自分でも気づかないうちに。そして何か変だと思いつつも、決定的な別れの具体的理由が見つからないからって、彼と一緒に続けた私。私を分かってもらうなんて所詮空しい努力だと諦め始めていた。そこからどんどん歯車が狂っていったのだ。

今言わなければ

「そんなこと、今言うか？」

私の懸命の説明に行き場がなくなると、彼はそう叫んだ。分かっている、そんなこと言わなくなったってよく分かっている。こんな時に言い出すなんて、非常識極まりないって分かるくらいの理性は持ち合わせている。だけど、だ、今言わなきゃずっと言えない気がした。これはもう理屈じゃなくって、いわば直感のようなものだったのだ。

しかしこんな時に離婚を言い出す私





もとんでもない女なら、夫や実の父親が死んだというのに、嫁いびりに余念のない彼女達だって信じられない人種だと言いたかった。だけどそれを言う気力さえ私には残っていなかった。

私らしく生きるために

やっと私たちの間に長い間横たわっていた、間違った愛情に訣別する勇氣を持てた。あのお通夜の日に。

九年間というアルバムはとてつもなく重い。捨て去ってしまうには、未練だってたくさんある。だけでもし、このまま心の中に消化しきれないものを抱きながら、結婚生活を続けていたら、きっと一緒に歩いた青春時代の思い出も汚れてしまうだろう。別れたことであのキラキラと輝いた時代は、私の心の中で永遠に生き続けるに違いない。私は彼のことを決して嫌いではなかった。むしろ好きだったと思う、別れを決意したあの瞬間でさえも。でも、私は私でいたかった。結局彼の理

想の女性にはなれなかった。私らしく生きていきたくかった、それだけ……。

これからの私

私は彼に私のことを分かつうとして欲しかったし、色々と話してお互いをもっと知りたかった。人はきっと「あんなに長くつき合ってきて分かつなかつたの？」とか「分かつ合つてるだろうに何を今更」と言うだろう。

しかし時間を掛ければ必ずしも分かつり合えるというものではない。もちろん自分自身のことではないのだから、完全に理解したり納得したりするのは無理だろうし、そこまでする必要もないかもしれない。しかし相手をもっとよく知ろう、相手の気持ちを少しでも分かつうとするのが本当の愛情ではないだろうか。相手は人形じゃない、自分の思い通りになんて所詮ならないものなのだ。それを分かつた上で、相手を深い愛情で包んでいきたいと私は今、現在の夫に対して思っている。

「離婚」なんて 絶対したくない、 だけど……

神奈川県●若宮純子（36歳）

ともに

ともに生きるのが喜びだから
ともに老いるのも喜びだ
ともに老いるのが喜びなら
ともに死ぬのも喜びだろう
その幸運に恵まれぬかもしれない
という不安に

夜ごと責めさいなまれながらも
——谷川俊太郎詩集「女に」より

本当は、一生別れたくなんかない。
できることなら、夫の長所も短所もす
べて許容して、死ぬまで一緒にいたい
と思う。ヨボヨボのおじいさん・おば

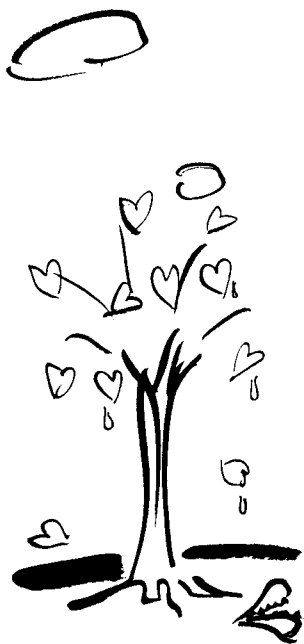
あさんになっても、恋愛感情を失わず
に、いたわり合って助け合っていく自
信があるのに——。

夫の心の半分は

現在私は、子どもたちの夏休みが終
わり、九月に入ったら、ひとりで家を
出て行こうと考えている。そして密か
に、出て行く準備を始めている（住宅
情報誌や就職情報誌を読んだり、私が
出て行ったあとの一切を夫に引き継ぐ
ための事務的な手紙を書いたり……）。
あと、三人の子どもそれぞれと夫、義

母（一緒に住んでいるわけではないが
とてもお世話になったので）にあてて
真心こめた手紙を書けば、私の心の準
備は大体終わる。それに加えて「わい
ふ」二五五号を読んでいたら、次回特
集テーマが私の心の問題にピッタリ
だったので、自分の気持ちを再度整理
する意味も含めて、投稿原稿を書く決
心をした（自分の状況を他人に知って
もらうことで、何か助けを期待してし
まっているのかもしれないが）。

女はどんなときに離婚を考えるのか
——私の場合、それは夫の気持ちがも
うももには戻らないと悟ったとき。ど



んなに努力してもどうにもならないとわかったときだと思う。私は今まで生きてきた中で（うぬぼれかもしれないが）、どんな事でもいっしょうけんめい努力すれば必ずどうにかなると信じてきた。ところが今回、どんなに努力してもどうにもならないことがあるのを、身をもって知らされた。最愛の夫に……。

私たち夫婦は、結婚前七年間つき合いい、今年で結婚十周年を迎えた。九歳・四歳・二歳と三人の子どもにも恵まれた。子どもたちは皆かわいくて仕方ないし、私も夫もお互いに愛し合っている。彼は、私に対する気持ちはつき合い始めたころからずっと変わっていないと言っているし、私も同様である。十七年間一度もキライになつたことはない。夫は子どもたちを非常にかわいがってくれるから、皆パパが大好きだし、彼は下の子のウンチのオムツを替えるのも全然いやがらない。休日には、家族を喜ばすのが彼の楽しみである。一見して本当に温かい家庭、仲

のよい夫婦なのだ（実際に十七年間ケンカらしいケンカはしたことがない）。ところが、一年半くらい前から、夫の心の半分は別の女性が住みついてしまっている。夫の微妙な変化を感じて、私も一年半くらい前から悩んでい



た。自分だけが育児に追われ身動きがとれないことも重なり、「結婚」って何だろう？、「夫婦」って何だろう？って真剣に悩んできた。家をとび出したことも数回あるし、夫に何十通も手紙を書いた。面と向かって自分の気持ち

をぶつけたことも何回かある。私が悩んでいるのを知りながら、悩んでいるにもかかわらず、一年少し前から夫はその女性と肉体関係まで結んでしまった。そして、私にはず——と隠してきた。一生隠し通すつもりだったと言っている。話したら家庭崩壊になるだろうからと。

ところが今年の四月、幸か不幸か、私はすべてを知ってしまった。疑ってはいたものの、夫の口から事実を聞かされた時には、言いようのないくらいショックだった。短絡的に死のうかとも思った。しかし、彼の私に対する愛情を信じる気持ちもあって、何とかなる、きつと乗り越えられるという期待もあった。こんなことで家庭崩壊になんかなるものか、という自負もあった。だが、私が事実を知ったことは、夫とその女性の別れの原因にはならなかった。それどころか、かえって二人を追いつめ、もう二人の気持ちは決して離れられないというところまで、追い込んでしまったように思う。私が

知ったら、私が泣いたら、一も二もなく夫は私のもとに帰ってきてくれるだろうと信じていた私は、本当に打ちのめされてしまった。

家庭を大切にする夫なのに

四カ月たった今でも、彼らは別れられずにいるし、その間相手の女性が妊娠するというハプニングまで起こった。私は、身を引きさかれるような思いだった。何日も食べられなかった。わけもなく泣いてばかりいた。夫のほうも仕事が手につかず、三日間も会社を休んでしまった(超多忙の彼が……)。大の男がボロボロ涙を流してワンワン泣くのを、初めて見た。

何回も何回も、お互いの気持ちを一つめ合って話し合った。その結果の彼の気持ちは、「どちらにも全く同じくらい好きだ。どちらか片方と別れることは、どうしてもできない。両方と別れる以外、自分の気持ちは納得しないだろう。子どもは自分がひきとってよ

い。(私が子どもはひきとれないと言ったので)」というものだった。

何回話し合っても、同じ結論に到達してしまふ。私に対する愛情は全く変わっていないという、おまけ付きで、彼は今まで、本当によき夫であり、

よき父親であった。私のことも子どもたちも、「宝物」と言ってくわいがつてくれた。私が何か失敗しても決して責めたりせず、困った時にはどんな時でも助けてくれた。私は、結婚前よりも、結婚して年を重ねることに、どんな彼のことが好きになっていった。彼もそれは同じで、家庭生活には何の不満もなかったと言っている。

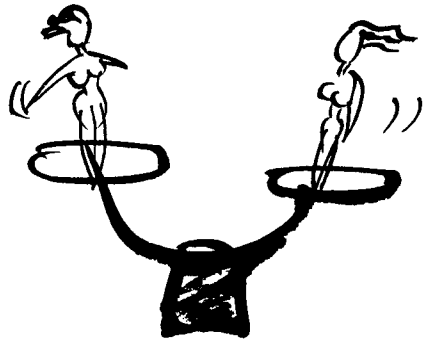
それなのに、なぜこんなことになってしまったのか——？ 夫の言葉を借りれば、大変な仕事(何回も徹夜するような)を二人で長くやりすぎたから、性格がそっくりでありにも気持ちやピットリ通じたから、殺伐とした企業の中で彼女が一番の理解者だったから……云々。

男女関係になってしまったのは、自

分が人間的に弱かったからだ。果して、男女間の友情とは本当には成り立たないものなのだろうか？ もし肉体



関係がなかったとしても、「わいふ」二五五号「永遠の片想い」の西尾さんのようだったら、やっぱり私は耐えられないと思ってしまう(「永遠の片想



い」を読ませてもらって、何とも言い
がたいショックを受け、心が非常に波
立ったのを覚えていた。

私に対する気持ちは全く変わらな
い、家庭生活にはまるっきり問題はな
いと言われても、こういう事態になっ
たからには、やはり私にも何か原因が
あるのではないか、どこか悪いところ
があったのではないかと真剣に悩んで
しまった。

二人の女性を同時に同じくらい愛せ
るという夫の気持ちも、どうしても理

解できない。自分がその立場だったら、
絶対できないだろうから。出会ったこ
ろからずっとさかのぼって、二人の性
格の違いとか、結婚してから今日まで
の生活のスタイルとか、恥ずかしなが
らセックスのことまで本気で悩んだ。
夫は仕事のことは一切家庭に持ち込
まないタイプなので、私が仕事のこと
を全く理解していなかったのもいけな
かったのだろうか？

ひそかな決意

こんなふうに悩んで悩んで悩み抜い
て、四カ月が過ぎてしまった。その間、
いろんな本も読んでみた。恥をしのん
で友人にも相談した。夫とも何回も話
し合い、いやというほど手紙を書いて
自分の気持ちをぶつけた。相手の女性
に何回か手紙も出したし、実際会いに
行ったりもした。そんなことしたって
どうにもならないのに、やっぱり自分
の人生だから何か行動を起こしたく
て、何とか立て直したくて、醜い自分

をさらけだしてしまった。本当は、ど
んなことがあっても夫と別れたくな
い。離婚なんて絶対したくない。こん
なに愛しているのだから……。

これ程までにつらい思いをさせられ
ても、夫のことを好きでいられる自分
が不思議に思えることもある。いっそ
のこと彼をキライになれたら、憎めた
ら、もっと楽な気持ちになれるかもし
れない。彼女と別れてくれさえしたら、
こんなことはなかったものとして、今
まで通り温かい家庭生活を送っていけ
る自信があるのに……。一生そばにい
たいのに……。

ここまで考え抜いて、私はもう自分
の人生、自分で生きる道を決めてしま
おうかと、半ば決心した。夫は絶対自
分から家庭を捨てられない人だとわ
かっているし、私さえがまんして見て
見ぬふりをして、今まで通り家庭を
守っていけば、子どもたちも不幸にな
らずに済むし、何事もなかったかのよ
うに平穏無事に暮らせるのかもしれない。
そして、それが本当に賢い「妻」

のやり方なのかもしれない（現にそうしている人も、たくさんいるらしい）。彼も今まで通り、よき夫・よき父親であり続けるだろう。

でも、夫の彼女に対する真剣な想いも、幸か不幸か知りつくしてしまった。彼の彼女に対する想いが存在する限り、私は耐えられないだろうと思う。彼の心の半分だけでもらっても、満足できないだろうと思う。どんなに心を大きく広げようとも……。

正直言って、私はもうこれ以上傷つきたくない。帰りの遅い夫、出張中の夫のことをあれこれ疑うのにもいやけがさしている（こんな自分はイヤでイヤでたまらないのに、いろいろな疑ってしまうバカな私……）。

だから、彼女の出方をうかがったり、彼が何か決断するのをじっとがまんして待つのではなく、自分の人生だから、自分から家を出て行こうと決めたしまった。

子どもたちと別れるのは、ものすごくつらい。でも、ひとりで育てていく



のはもっとつらいだろう。家を出たからといって、すぐに離婚届に署名捺印できるかというと、その自信もない。では、なぜ出て行くのか？ 今の状況に耐えられないから。何か行動を起こさなくては、何も変わらない気がするから。

私が出て行くことによって、夫の気持ちが変わることを期待しているのかもしれない。反対に、もう二度とやり直せない状況におちいってしまうかもしれない。それは全くわからない。それでも今の状態のまま悩んでいるより、新しい世界に飛び込むほうを選びたいと思う。私の人生において、最も大きな冒険かもしれない。

とりあえず、子どもたちには楽しい夏休みを経験させてやりたいと思っている。プールにキャンプに、数々の計画をこなしていくだろう。そして、九月になったら、突然書きおきを残して、まずは出て行こうと思っている。それが離婚への第一歩になるのか、今のところわからない。

もう少し、
一緒に暮らして
みよつかな

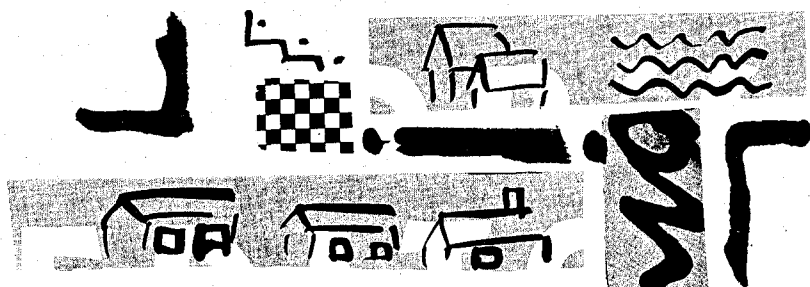
●岸田麗子

仕事を始めた

私は、三十三歳の時、市の非常勤職員として再び仕事に就いた。仕事の内容は、市民のための生涯学習プログラム作り、その実践、学習後にできたグループ活動の相談といったところが主なものだ。

その時に出会った多くの人たちから、私はたくさんのことを学んでいた。

私は、仕事を始めて半年後から約一年の間「離婚」という事を常に考えて



いたような気がする。結婚して八年目から九年目。肉体的子育て期が終了したころのことだ。

私も定年離婚組？

公民館に集まって来る人たちは、教養豊かな女性たちが多かった。金銭的にも、時間的にもゆとりがあり、ある部分に優れた才能も持ち合わせているようだった。イキイキして元気だった。いい妻、いい母、愛すべき隣人に思われた。

しかし、彼女たちは、どこことなく満たされない「何か」を抱えているようでもあった。溢れるエネルギーの使い方に迷いもあるようだった。

そんなふうにしたのも、私自身がそうであったからかも知れない。

ある女性が話してくれたことだ。その方のお母様が、「私は、ずっとがまんしてお父さんに合わせて暮らしてきた。お父さんは、自分勝手に好きな事をやってこれたから、自分の人生満足

かも知れないけれど、私は、何もして
いない。もうこの歳では、何もできや
しない。いまさら離婚も考えられな
い」と、愚痴ばかりこぼされて、こち
らもやり切れず困っているというのだ。

その話を聞いて、私は、「女は、い
つもいつも誰かのために生き、誰かの
事ばかり考えて暮らしているんだなあ。
自分の事を考え自分のためだけの時間
は、いつも後まわし、ちょっと悲しく
て、せつないなあ。私もそんなふう
に歳を重ね、夫を恨んじやうのかなあ。
男はなんだかんだと言っても、自由で
いいなあ」と思った。

男たちの自由への深い嫉妬だ。

折しも、熟年夫婦の離婚がクローズ
アップされていたころだ。定年退職を
した夫に、妻が待っていましたとばか
りにつきつける離婚。

今まで、家族のためと会社人間に徹
し、少しでも多くの収入を得ようと働
いた夫たちはあっけに取られ返す言葉
もない。

確かに、収入を得るということは、

大変かつ大切なことだ。経済的基盤が
あってこそ、家族も安心して暮らせる
というものだ。

しかし、家庭を作り、営むというこ
とは、それだけではない。妻や子ども
に対し、遠くで頼杖ついて傍観してい
る夫たち。妻は、家庭という風呂敷の
こちら側を一生懸命持っているのに、
指先で摘むことしかない夫たち。

そんな夫たちへ、復しゅうとも言え
る離婚宣言。

妻たちは、地域社会、学校のPTA
活動、公民館等で、気の合う友人をど
んどん作る。夫と別れ、ひとり暮らし
になったとしても淋しくはない。夫の
あれこれの世話にうんざりした妻たち
は、退職金の半分と自由を手に入れ
る。もちろん不安はあるが、初めて自
分ひとりですした決断に満足をする。

私は、「それみたことか男たち。女
の縁の下のに甘え、自分の夢を叶え
ていたからこんなことになるんだぞ」
と一方的に夫たちを悪者にしていた。

しかし、しばらく考えているうち

★わいふバックナンバー

- 241号 こうして夫を変えました
- 242号 私のマスコミ体験
- 243号 特集ナシ
- 245号 病気とのつきあい
- 247号 三十五歳はトシなのか?
- 248号 ウマイ話にだまされた
- 249号 夫の職業と妻の生活
- 250号 女の友情
- 251号 集合住宅での子育て
- 252号 うちの子のおばあさん・おじいさん
- 253号 阪神大震災
- 254号 きょうだいは他人のはじまり
- 255号 家事サービスを利用してみたら

シリーヌ老後の暮らし
老人ホーム／お金と介護

一〇〇〇円

お年寄りが安全に暮らすために

一五〇〇円

核家族のための

子育てガイドブック 三〇〇円

変わる主婦・変わらない主婦

一五〇〇円

お申し込みは電話でどうぞ。

☎〇三—三二六〇—四七七—

に、女もずるいという思いが湧いてきた。

妻たちは、どうして夫の胸ぐらを掴んで揺さぶらなかつたんだろう。そんな恨みになるまで、がまんしてしまつたのだろう。自分の不満を、ちゃんと



夫に話したのだろうか。自分の気持ちを伝えたのだろうか。

妻たちは、どれひとつ実行しなかったのだろう。ぎくしゃくする家庭が嫌だったのだろう。結果としては、取り返しのつかない所までいってしまうと

も知らずに。

わが夫の、ホッとする時間というのは、ぼーっとして、テレビを観たり、本を読んでいる、「お茶」と言えば、お茶が出て来る時なのだそう。私のお、ホッとする時間も夫と同様だが、お茶は、自分で入れる。

夫は、お茶を入れてくれたことがない。妻という人種は、夫に対して、そういう事をしてやるものだと思込んでいる。

これが男女平等の教育を受けてきた人たちの実態と言えば言い過ぎか。

何もかも小さな、小さな事だ。しかし、日々の小さな事の積み重ねが、大きな不満を生んでいく。事が小さいうちに解消できたなら、離婚という所には、行き着かないかも知れない。

アルコール中毒、暴力をふるう、外に女を作る、賭事ばかりするなどという男は、離婚をして、しかるべき理由になるようだが、こうやって、妻の人權をことごとく奪う男たちのことは、大目に見られてしまう。

私は、自分の将来を、これらのことに重ね合わせていた。このままの状態にいけば、私たち夫婦も離婚をするだろうと、かすかな思いがあった。夫の胸ぐらを掴まずに、大切なそれぞれの時間を過していくのは、不本意に思えた。

私の不満、夫の不満

私は、夫の「妻がしてあたり前」「主婦の仕事」「お母さんなんですよ」という態度に反発をしていたようだ。夫の言い分は、いつも正しくて、私の言い分は、過分なことのような気持ちにさせられた。

私の不満は、一気に爆発した。八年前の不満を聞かされる夫は驚いていた。

二、三日ではあるが外に出て働くようになると、今までのように家事に費す時間はぐっと減る。午前八時から午後五時までのフルタイムの仕事のある一日の朝は、自分のことの他に、食事

のこと、子どもたちの細々とした世話で、バタバタとあわてふためいて、仕事場に出かけたものだ。

そんな時も、夫は自分ひとりだけのことを済ませ、平気でいられる人だった。

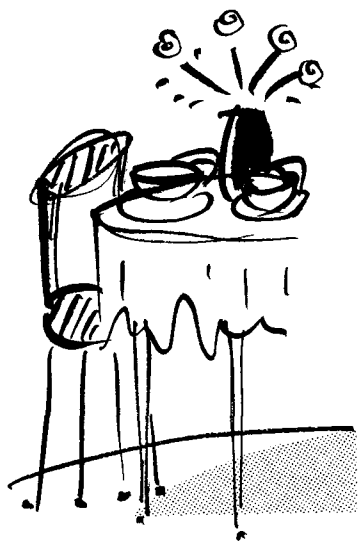
夫の仕事場は、家から近かったので、夫が家事に参加することは可能だった。それにも拘わらず、夫の態度は、「家事をちゃんとやって、仕事をしてよ」「もうちょっと、部屋をきれいに

してよ」「もう少し、いいもの食わせでよ」であった。

私もやりがいのある仕事を見つけて多忙だった。

本音で話のできる友人もできた。職場の人たちとカラオケや、酒の席にも参加するようになった。

今まで優等生主婦をしてきた私。夫と子どもと主婦たちとの話す言葉しか持っていなかった私にとって、それらの世界は、ちょっと魅力的な場所に見



えた。でかけて行きたくなるではないか。

私は、予定を入れる。夫は、私が勝手に決めたことが、何となくおもしろくない。夫のなかには、妻が夫の許可を得るといふことや相談してから決めるという枠があったと思う（しかし、自分にとってめんどうなことは、全て、私に押しつけていた）。

私は、「あなたは、飲み会やゴルフは、私に相談なんかしていないじゃないの。『この日にでかけるよ』とあたり前の顔をして言うじゃないの。それに対して、私はいつだって『楽しんでいてっしょいね』って言って送り出すでしょ」と。

夫「ぼくのはつき合いだ。つまり仕事だ。子どもはどうするんだ。食事」は「

仕事と言えば、何でも許されると思う夫。そう言われれば、今までは許していた私。

私「私も仕事なの。子どもたちのことはあなたが世話してよ。別にオムツ

しているわけでも、風呂に入れてやらなきゃならないわけでもないんだから。寝る前に、本を一冊読んでやったら、子どもたちは、いい子で眠るのよ。あなただって、子どもと関わったほうがいいと思うよ」

夫「普通は、お母さんがするものでしょ」

私「その普通って誰が決めた普通よ」

夫「世の中でしょ」
まったくの平行線。口を開けば、この種の会話だった。エネルギーを蓄えては、私の思いを伝えた。夫の話を聞いていた。

そして、いつも心の中でつぶやいていた言葉。「なぜ私は、この人と結婚したのだろう」

夫とて同じ思いだったかも知れない。「なぜぼくは、外で仕事しているのに、家事や育児までやらなきゃならないんだろう。何のために結婚したのだろう」と。

私たち夫婦は、他の夫婦が恋愛中、

あるいは新婚の時にするようなことを八年も一緒に暮らしてやらやることになった。

三十年後でなかったことを神に、感謝はしているけれど……。



そんなこんなの状態でも、日常は容赦なく過ぎていくものだ。子どもたちの成長は目に見えて、私を感激させ、驚かせ、戸惑わせる。それに比べ、なんと情けなく、こころもとない親たち

か。

私は考える。

今までの私たちの会話は、不毛なものだったのか。ただお互いを傷つけただけだったのか。二人の間は、近くなったのだろうか。それとも溝は深くなったのだろうか。

どれひとつ答えられない。

ただ言えることは、人生は、いつもいい事ばかりでないということ。自分の思い通りには進んでいかないということ。

夫と私の間も、「仲良しだなあ」と思える時と、「どうしてこんなに嫌な人なんだろう」と思う時があるということだ。

この人と、一緒に暮らしたいという、若い時の思いもある。こんなに広い世界で、縁のあった人なのだとも思う。

そう簡単に結論は出せない。

いまだ少し、エネルギーが残っているようだから、もうしばらくは、わが夫と暮らそうと思っている。

(エ・カステラネン)

最中

横浜市泉区

原 眞智子（59歳）

もなか、である。和菓子の原点のように、この地にもご当地のものがある最中。四十年以上も前の話だが、私はこの最中にずいぶん和菓子を詰めたことがある。

私の生家が菓子屋で、小売の傍ら製造も手がけていた。もちろん全くの家族経営だから中学生、高校生の子供たちは大事な戦力だった。

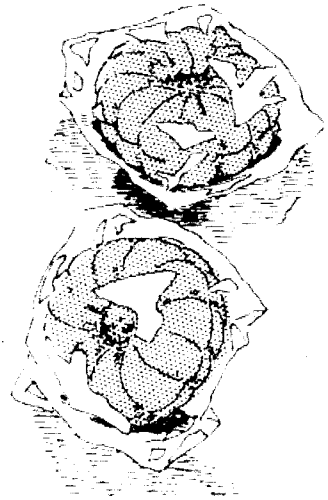
砂糖や小豆が食糧統制からはずされたあととは思いますが、戦争の記憶もまだ遠くないころのことである。

最中の餡を炊く（煮るとは言わなかった）のは父の仕事である。まず、小豆は水に浸しておかない。洗ってすぐ火にかける。途中で二度ほど煮汁をそっくり換えてしまう。しぶを切ると言っていたが、あくを除くためである。

やわらかくなった小豆は水気を切って砂糖と合せ、直径八〇センチほどの銅製、半球状の鍋に入れ、火にかけて杓子で練っていく。この杓子はボートのオールくらいある。最中の餡は砂糖の割合が多いので、手を休めればこげてしまうし、弱火ではかき回さない。辛抱のいる作業である。



煮つまってきたとろみと艶がついてくると、仕上げに水あめと溶かしておいた寒天液を入れる。どちらも保水性があって、あんの表面が乾いて砂糖が析出してくるのを防ぐという。最後に塩を少々。これは煮すぎるとくどくなるので、入れたらまぜる程度で火を止める。



これをホーローのバットに移してすっかりさます。熱いうちは杓子のへりからゆっくり流れるくらいだが、室温になるとへらで扱うのにはよい固さになる。

さて、最中の皮である。これは皮だけを扱っている店から届く。型は既製と特注とあるが、わが家のは既製の菊の花で、こがし（焼色をつけたもの）、白、薄紅の三色が茶箱に入ってくる。防湿には氣を付けなければならない品である。

こがしには粒あん、白には白いんげんから炊いた白あん、薄紅にはこしあんを詰める。皮はパリパリに乾いた薄いもの、そこへねっとりした餡をのせるのだから手かげんが大切である。ほどよい分量を片側に盛ってならし、同じ皮をもう一枚合わせて押さ

える。皮を割らないように力を加えていかなければならない。これを一個ずつパラフィン紙で包んで店頭に出す。

当時一個十円。最中は贈答用によく使われた時代だった。三十個入りまで各種の箱を揃えてあり、用途別の掛紙をかけて包装する。進物の包装というと母は私たちにさせた。早くきれいに包むからだった。

はるか昔のことだが、ふと最中の皮の感触が指先によみがえることがある。今は買って食べるだけの最中、単純なこの和菓子がなつかしい思い出を呼び起こしてくれる。

マリアちゃんの嘆き

栃木県鹿沼市

神山寿子

いつも息子を連れていく公園がある。

午後になると小学生が遊び始めるが、午前中は乳幼児連れの母親が三々五々集まり、子供を遊ばせて

いる。

最近、公園に新顔が現れた。巻き毛のかわいいハーフの子である。名前は「マリアちゃん」、年は「四歳、もうすぐ五歳」とのこと。

一体どこの国の子で、どこに住んでいるのか、いつも一人で来るので皆目わからない。

どこから来たの、と聞くと、

「イセザキから」

じゃ、伊勢崎の前はどこにいたの？

「知らない」

えーと、おうちでは何語で話してるの？

「ナニゴってわかんない」

四歳児じゃ、まあ、こんなものでしょうが、母親たちは身許不詳の子をどうしてよいのか、ちよっととまどったのである。

なんといっても、ハイハイやヨチヨチの子にまじって、口も達者で手も早いお姉ちゃんが来たのであるから、全く相手にならない。おもちゃは持っていかれるし、三輪車で鼻先をかすめていかれるし、きわめつけは、押車を取り上げられて、すべり台から落とされたことであらう。

始めはまあまあと見ていた親も、ムツとして「小さい子なんだから、そんなことしないでね！」と、「！」をつけてマリアちゃんに言うようになってし

まった。

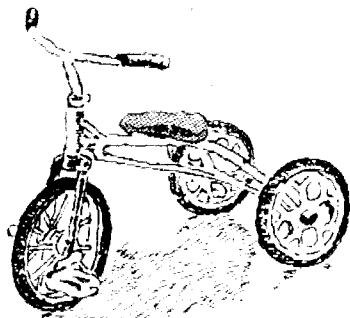
問題はマリアちゃんが乱暴なんじゃなくて、相手になるような年ごろの子がいけないということなのだ。四歳児になれば、普通は幼稚園か保育園に行っていて、昼日中母親と公園にいたりはないのである。

かくしてこのごろでは、マリアちゃんが公園に来ると、さりげなく一人散り、二人散りして、マリアちゃん一人残ってしまうようになってしまった。

ある夕方、たまたま息子と公園を通りかかった。マリアちゃんがいた。マリアちゃんのそばに一人の女性がいるのに気づいた。外国人には見えない、日本人とおぼしき婦人が赤ちゃんを抱いて立っていた。

「こんにちは」と声をかけると、困ったように「こ





んにちは」と返ってきた。

「マリアちゃんのおかあさんですか？」と尋ねると、答えるかわりに途方にくれている。「日本語わかりますか」と言うとはっきり「NO」と答えたのであった。

彼女は日本語の話せない日系人なのであった。英語もダメと言われて、スペイン語は話せるかと聞くと、「少し」とのこと、やっと話をする事ができた。

彼女たちはブラジルから来た日系人で、すぐそのアパートに住んでいること。赤ちゃんは女の子で、六カ月になるということ。日本語は全然できないこと。

事情はなんとなくわかってきたが、私の言いたい

のはそんなことじゃなくて、マリアちゃんは幼稚園にでも行ったほうが、遊び相手がいいていいんじゃないですか、という、まったく大きなお世話な忠告なのである。

しかし、私のスペイン語はそんなおせっかいのできるレベルではなく、結局「それでは、また」と、あいさつして終わってしまった。

帰ろうとする私たちに、マリアちゃんが「帰っちゃうの」と言う。今日はもう遅いし、と答える、「どうして、みんなマリアちゃんと遊んでくれないの？ どうして、すぐ帰っちゃうの？」と泣きそうな顔で聞くのである。「それは、他のママの連れてくる子は小さい子ばかりだから、すぐくたびれちゃうからよ」と、愚にもつかぬ返事をしたが、マリアちゃんの表情はかわらなかった。

「明日はおばさんがゼットイ遊んであげるから、ネ、約束する」

マリアちゃんはちょっと安心したようで、「じゃね」と家に帰っていった。

明日の約束は守るけど、その後のことはどうしよう、心ひそかに悩んでいることは、マリアちゃんの知らぬところである。

ごめんね、マリアちゃん。

(え・西宮さき)



福祉の不公平

神戸市東灘区 ● 岩田佳子

四年前、一人で暮らしていた夫の母が脳内出血で倒れ、その後症状は落ちついたものの、到底自立生活はむりな状態になってしまった。

そのころわが家は、長男の妻である私が義母を引き取って世

話できるような状態ではなかったのですが、さすがのような思いで最寄りの福祉事務所(東灘区)へ行き「特別養護老人ホーム」で預かって貰えないかと頼んでみた。しかし、窓口に座っていた若い男性の職員に「施設不足」という理由であっさり断られた。

当時、東灘区(区民一九万人)に特別養護老人ホームは一カ所もなかった。ちなみに神戸市全体(一五〇万人)で二十カ

所しかなく、しかもほとんどの施設が市街地から遠く離れた場所に建てられていた。東灘区に住む老人はこれから他区の施設に割り振られて入所していたのである。東灘区でも空き室待ちが何十人もいるとのことだった。

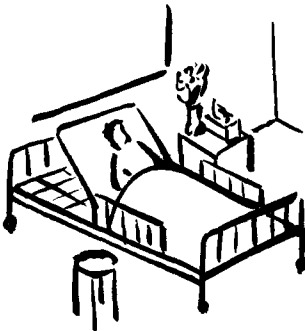
私の夫には四人の弟妹がいる。神戸市は施設が足りないのでも他のきょうだいの住む他県の施設に申し込んでくれと職員に言われたが、昔から長兄が親の

面倒はみるものと決めてかかっている夫のきょうだいに、そのようなことがどうして頼めよう。せめて、空き室待ちに加えて欲しいと頼願したが、それすらも聞き入れて貰えなかった。私はしかたなく、長期にわたって預かってくれる病院を探し回り、そこへ義母を入院させた。現在も義母はその病院で小

康状態を保ち続けている。義母が倒れて数年後、義母とほぼ同年齢の私の母が、骨折がもとで寝たきりに近い状態になった。私は一人っ子なので、母の面倒をみる者は私以外にいない。義母の場合は、私の夫の他にこどもが四人もいたので、長男の嫁だからといって私だけが面倒みることはない、という不満が付きまತ್ತたが、実母は私がみなければならぬとの強い思いしかなく、手元で母の世話をすることになった。このことについて、えこひいきをしたとの思いは免れない。

母をうちで介護することになった私は、電動式ベッドを購

入った。母をうちで介護することになった私は、電動式ベッドを購



入することになり、業者にいわ

れて福祉事務所を訪れた。社会福祉制度により補助金がだして貰えるというのだ。だが、私の夫の県市民税の額を見て一円の補助金もだして貰えなかった。

断っておくが夫は高額納税者ではない。補助金の適用者があまりにも低所得層に限られているのである。生活保護者か、年金暮らしにしか適用されないような仕組みになっている。私の母であることを強調し、私が無収入であることを訴えてみたが、これも聞き入れて貰えなかった。私は夫の扶養者であるから、私の母も私の夫の扶養者だというのだ。

結局、母を介護中、福祉の恩恵が受けられたのは、介護費用として私が毎月一万円貰えたこと、母がまったく寝たきりになったとき、母にたいして月々二千元の手当が支給されたこと

だけだった。

二五三、二五四号に載った田中慶子さんの「母の特別養護老人ホーム入所」を読むと、神戸市に比べ奈良市はかなり老人福祉が充実するように思える。

福祉行政は地方自治に任せられているので、地域差があるのは当然であるとはいえ、受ける側からすれば統一して欲しいと思う。それにもうひとつ、老人施設だからといってなぜあのように立派な建物を作るのだろうか。われわれが住んでいる家程度の建物にすれば、もっと多くの老人施設を建てることができるだろうに。

母は私の元で二年あまり過ごした後、昨年の秋他界した。おおかたの世間の人は、最後の二年を娘のそばで過ごせた母を幸せ者呼ばわりするけれど、家庭介護の限界を経験した私は、自分の老末をしかるべき施設で過

ごしたいと願っている。

わからないこと

東京都台東区●矢崎道子

八月四、五、六日と、武蔵嵐山にある国立婦人教育会館での『女性学講座』に参加した。

参加資格は女性学に関心のある成人男女で全日程参加できる人、と要綱には書いてある。

しかし実態は個人参加が非常に難しいようだ。なにかのグループに属していないと、申し込み手続きにやたらエネルギーを必要とするものらしい。

参加者名簿によれば三〇〇名募集のところ四二二名以上の大盛況で、抽選に漏れた人もかなりいたようだ。会館に泊まれ

ず、近くの民宿などに宿をとってまで参加した人もある、ということも聞いている。

これほど女性学が関心を呼ぶことは、大変いい状況と言ってもいいことなのだろう。参加した四二二名のうち、九七名ほどが自治体の女性施策の公務員、大学関係の先生方ほぼ二〇名、高中小の先生二三名、専門学校教師、養護の先生等各二名、女性センター関係とおもわれる人達一五名くらい、市会議員四名でおよそこの一五〇名の方たちは、どちらかと言えば一般大衆を指導すると思っている人達でもある。

そういうわけでもないのだから、宿泊棟が三棟あってA棟はシングルとツインで構成され、この棟には大学の先生方、公務員でも係長クラス、そして女性センターの正規職員、議員、あと数少ない男性参加者が

しめる。

その他の人達はB棟、C棟の和室に振り分け部屋割りをしたらしい。

ちょっと腑に落ちぬことがあって、帰宅してから会館へ電話をいれた。担当の人が出たので今回の部屋割りはどのようにしたのでせうかとたずねた。

「無作為にしました」という返事。

「そうですか、無作為にしてはA棟にはある地位や階級の方たちが泊まっていましたね」

「それは講演をしていただく先生方はA棟のシングルルームにいたしました」

「しかしA棟にはその先生方だけではありませんね？　だとすれば無作為ではなくあきらかになにかを標識にして部屋割りをしたといわれても、結果からは、そう見えてもしようがないですよね……」



確かに何かを標識にして区別をしたのは明らかなのだが、不愉快に思われたことはA棟はシングルか、もしくはツインでも終夜エアコンが入っていて、私たちその他の者たち（と思わせてしまうものがあつた）が宿泊したB棟、C棟は、和室で一部屋五、六人が寝泊まりしたにもかかわらず、エアコンは十二時

でピタリと止まってしまい、その寝苦しさそれぞれが初めていきあった人達（グループで行った人達も部屋割りについては要求はできないと聞いていた）だったわけだから、遠慮もあつただろうし、なかなか熟睡するには非常に条件が良くないまま二晩を過ごし、すっかりくたびれ果てて、なんだか変なところで煮え切らない屈辱感に、さらにいわれない差別をされたように思われた。女性学というあたらしい学問を展開している

大学教授、行政担当官、今回企画をした人達、そして国立婦人教育会館を運営する方たちの見識の脆さを見たような気がした。高みにいて教えてやる的様態と、十把一絡げにわりふられた女たちという構図がそこにはある。

この男社会の中にもかかわらず個人的努力によって、地位やポストを獲得した能力ある女たちと、ごくごく普通の女たちとは違うということなのだろうか。

不快なままの三日間に、一体なにを学習するために貴重な時間を割いてきたのだろうか、内容のなさも重なってやり切れない思いが残ってしまった二泊三日の学習会だった。

ちなみに私なんかは当たり前みたいにすべて自費参加なのだが、公務員や先生方はどうだったのでしょうかね。

（え・奥島千恵子）

戦

後

50

年

記

念

連

載

シベリアの青春 4

大阪市住吉区

福井 秀雄

ロシア娘との出会い

長い長い夜が明けたように、待ちわびた春が訪れた。枯野は徐々に青さを増して、厳寒のころがうそのように陽光が輝き始めた。

暖くなると、ここでの仕事は冬場だけの予定だったとみえて、私たちに移動が告げられた。

これを聞くと、つい私たちの脳裏に帰国の文字が浮かんでしまう。そしてそうでないにしても、シベリア鉄道で少しでも日本に近づきたいという願望



を抱いていた。だが、そんな期待もむなしいものだった。徒歩での移動だったからそんなに遠くではなかった。

私たちが到着したのは町はずれの農場の中に建てられたラーゲリだった。それはあたりののどかな風景とはまったく場違いに、やはり高い柵に囲まれたもののしいものであった。

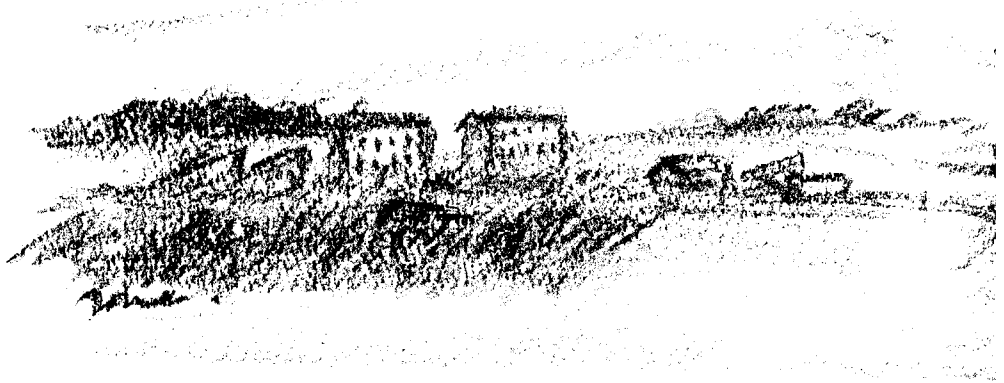
その建物は私たちを入れるために建てたのでは、と思うほど新しい。前の陰うつだった幕舎に比べ、中は広々としており、多少人間らしい生活ができそうな宿舎である。ここで畠仕事でも

やらすつもりか、と思ったがそうではなかった。このラーゲリから農場を隔てた先に、国営食糧倉庫だという数十棟からなる大きな建物が見えている。そこが私たちの新たな作業現場となるらしいのだ。

翌日早々から入ったその倉庫敷地内は、驚くほど広く、あらゆる食品の入った建物が整然と並んでいた。これらの物資は、シベリア鉄道からの引込線を利用して入って来るのだ。その貨車の積み降ろしが私たちの仕事であった。

ここには私たちがいま、もっとも関心を持っている「食べ物」が、どの倉庫にも山と積まれていたのである。だが全く罪なことに、私たちはただただそれらを見るだけ。その重量のある物資の積み降ろしに、ひいひい言わされるのみ、という悲しいものであった。

特に袋詰めされた砂糖は九〇キロ余りはあるし、缶詰の箱詰めはやけに重い。これを背によろめき歩く私たちを、ソ連人監督が「ダワイ、ダワイ」



シベリアの青春

を連発しながら容赦なく追い廻すのである。

このような重労働のべつ続いたら、体がもたないのはわかっていた。そんな私たちのことを考えてくれたわけでもなからうが、幸いにも三日に一度くらい、近くの町へ出での軽い作業が廻ってきた。ときにはパン工場の使役で、思わぬほど大きなパンにありついたこともあったのである。

なかでも、私たち若者に一番人気のあったのが煉瓦工場の仕事だった。なんのことはない、その現場には、若いロシア娘が大勢働いていたからなのである。

食い気ばかりの人間になり下がったかと思いきや、意外にも色気も少しは残っていたのだ。

「今日は煉瓦工場の仕事がある」と聞けば、私たちは我勝ちに志願した。仕事はきつかったが、ここには何よりの楽しみが待っている。

ここで働くロシア娘は、頭にネッカチーフ、粗末な衣服を身に着けてはい



るが、まるでカチューシャを思わすように可愛らしく、きびきびと働いていた。

その魅力的な姿は、男ばかりの殺伐とした中で過ごしてきた、私たち若者の青春を呼び戻すには格好のものであった。とは言うものの、私たちの姿は如何にもみずばらしい。最初のうちは彼女たちに近づくのも躊躇していた。だが、こんな私たちに彼女たちは臆するふうもなく、近づき話しかけてきた。それは多分、珍しさもあってのことだったのだろう。

彼女たちの話す日本語といえば、

「トウキョ（日本を指す）」

「ヒロヒト（天皇）」

「サムライ、ハラキリ」

「カミカゼ（特攻隊）」などだった。

これは日本語と言うよりも、むしろ彼女たちの知る日本の総てとも言えるものであった。

そして、私たちには、

「スコリカ（何歳）」と尋ね、すかさず、「トウキョ、マダムイエス」と聞い

てきた。

それは、国に彼女が居るか、ということか、もしくは女房が居るか、なのか？ 私たちが最初に会ったソ連人は必ずと言っていいくらいにこの質問をした。

この年で母親なら居るが、他に女など居るはずがない。この場合私たちは決まって、

「ニエット（ない）」と覚えたロシア語で答えることにしていた。だからここでもそう言った。

私たちのこのロシア語に彼女らは、「ハラシヨバロスキー（ロシア語が上手ね）」

と一斉に笑い声を上げた。

笑ったところをみるとおかしなロシア語に聞こえたのだろう。彼女たちは底抜けに明るく、しかも愛想がよい。

ここで私たちが担当する仕事は、土を掘りトロツコで運び、これを攪拌機で練るといふ、割にきつい部分であった。彼女たちはできた製品を乾燥場に運んだりする軽い仕事だった。

作業が始まると機械に追い廻されて息つくひまもないほどだったが、昼休みには彼女たちから声がかかった。なんとすることはない。トロツコに合乗りして、坂道を喚声を上げて走り降りるだけのたわいない遊びをしようというものだった。

そしてすっかり親しくなった私たちに、彼女らからプレゼントがあった。それは単なる古新聞紙であり、今思えば笑いたくなるようなものだが、当時のソ連では紙は貴重品だったのだ。キザミ煙草を巻いたり、他にも使い道は多く、私たちにはうれしい贈りものだったのである。

そんな彼女たちを、あの娘はきれいだとか、いやあの娘のほうが優しくていいなど、私たち同士の間では、まるで恋人の奪い合いのようなことまでが演じられていたのである。

不思議なことに、このような汚れた異国の捕虜に近づく彼女たちを、ソ連の大人や、カンボイ（監視兵）も何の咎めだてもしなかった。

異国の地で、しかも捕われの身である私たち若者を、神は憐れとお思召されたか、束の間の青春を与えて下さったのである。彼女たちとの出会いは今も楽しい思い出として心の中に残っている。

あれから数十年、彼女たちも、すっかりデブのおばさんになってシベリアの何処かに居るに違いない。この記事を書きつつ、ついそんなことを考えてしまった。そして一度会ってみたいという気にまでなった。だが、長い年月の間に覚えていたはずの名や、顔さえも思い出せない。彼女たちだってそうに違いない、と思えば今ごろこんなことを考えること自体が滑稽なことではあるのだが。

私たちが抑留されて以来、異常なまでに日本人を警戒していたソ連人も、意外に従順で真面目だとも思ったのか、私たちに対して徐々に心を開くようになっていたのは確かである。そして、とげとげしい態度で、めったに話しかけてきたりしなかったカンボイま

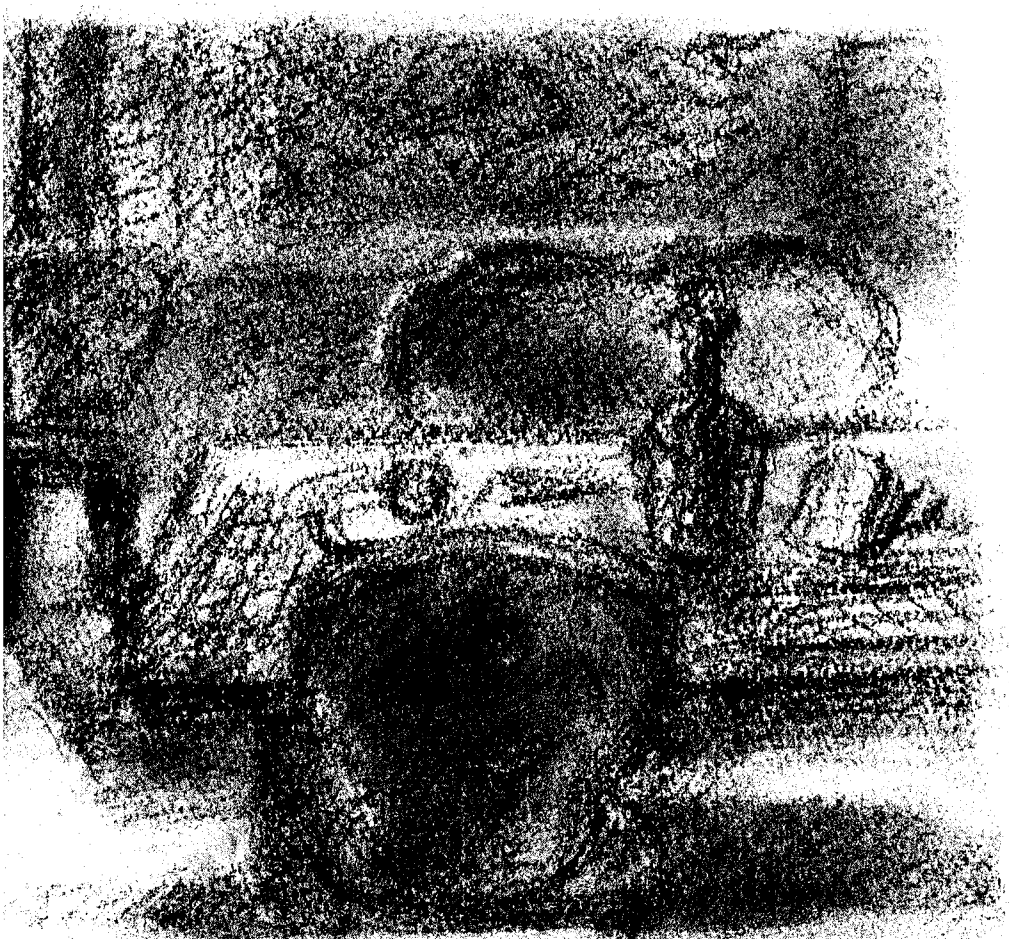
でが、時として私たちと冗談を交わす
ほどになった。したがって、ある程度
の自由は黙認されるようになっていた
のである。

そんな雰囲気の中で、私たちのほう
でも、当初からソ連人に対して抱いて
いたイメージも少しはいいほうに変
わって、「いつか殺されるのでは」な
どといった恐怖感は薄らいでいった。

ある日の昼休み、ロシア娘に誘われ
て、工場の近くにある彼女の家を訪れ
たことがあった。

珍しい日本人を家族に見せたかった
のだと思う。彼女の家はシベリアでよ
く見る小ぢんまりした家だった。厳寒
のシベリアでは暖房などの都合上、広
い家は少ないのだ。

私は恐る恐る彼女のあとについて、
家に入った。迎えてくれたのは、東欧
の女性によくある、ふくよかで見えるか
らに人の好きそうな母親だった。彼女
は私を見ると大きな声を上げて両手を
広げ、外人特有の大げさな仕草で歓迎
してくれた。



だが、一瞬悲しそうな表情で私を抱きしめた。

「マーリンケ（子供じゃないの）」と私をつくづく眺めながら、さも可哀相にと言わんばかりに、

「トウーキヨ、スコーラダモイ（国へすぐ帰れる）」と繰り返し慰めてくれた。言葉ははっきり理解できなかったが、このとき彼女の口から、「マーチ（母）」と言う言葉が何回となく聞こえた。おそらく、国で母親が案じているだろうに、との同情の言葉だったに違いない。

すでに娘から聞いていたのだ。部屋のテーブルには食事の用意がされていた。それは黒パンと牛乳、じゃがいものふかしたものにスープであった。早速彼女は食事をすすめてくれた。

「クージエ、ムノーガ（たくさん食べなさい）」

首のあたりに手のひらを横にあて、ここまで食べよという。ソ連人は食べ物すすめる時、決まってこの仕草をするのである。



私は、その親切に甘えて食事をしながら、こんな汚れた捕虜を連れてきた娘を、母親はなぜ咎めたりしないのだろうかと不思議に思った。

そんな私に、時々目を向けながら母親は何か楽しみに話し合っていた。そして食事をする私に、「クージエ、ムノーガ」と何回となく言葉をかけながら、その食べ振りを見詰める顔は、まさに母親そのものであった。私はこの時、国の小さな母を思いだした。

彼等だって食糧は乏しかったはずだ、と思うと異国で味わった人の情に胸が一杯になった。

「スパシーバ（ありがとう）」

私は知る限りのロシア語で、親切なロシアのおばさんに感謝の意を表して現場に戻った。

私がそれまで知っていたソ連と言えば、赤の国、謎の国というのがその総てだった気がする。しかも残酷性を持った民族だとも聞いていた。確かに満州へ侵攻してきたソ連兵が、残酷無頼な者として私たちの目に映ったのは

事実である。

また、ラーゲリ生活においても、私たちに対する待遇は、前述のように極めて非人間的と言えるものであった。したがって、特にソ連の権力者に対しては憎悪の念を抱かざるを得なかった。

しかしながら、短期ではあるが、ラーゲリの外でかなりの数の民間人と接触する機会を持つことができた。そしてそこで感じたのは、彼等は意外なほど人がよく、しかも陽気な民族であるということなのである。

また、仕事中は柄の悪い男たちも、普段は大抵愛想がよく、朝など私たちを見ると、「ドラスチイ（おはよう）」と、ごく自然に声をかけてくる。そんな彼等を、私たちは少しばかり見直す気持ちになった。

これは戦中のことだが、当時日本に連行されていた連合軍側捕虜を見て、「かわいそうに」と言った一言が、憲兵に聞こえてしょっ引かれたと聞いたことがある。

ソ連という国には、多数の異なった民族が同居している。したがって他民族に対する差別意識は低いのでは、とも思ったのである。

これも後に聞いたことだが、美しいロシア女性と知り合って、思いが昂じてソ連に永住した日本兵が居たとも聞いた。敵国の捕虜に愛を捧げるなど戦前の日本では考えられないことであった。

たかだか一食の恩義でその総てを評価するつもりは毛頭ない。私がソ連民間人と接して感じたことを少し述べてみただけである。

重ねて書くが、私たちに満足な食も与えず、苛酷な労働を強制し続けたソ連当局に対して、決して許すつもりになつてはいたわけではない。

西へ西へと故国は遠く

昭和二十一年（一九四六年）八月十五日、敗戦から一年の歳月が経った。「よく生き延びたものだ」これが私たちの実感であった。終戦から一年も経

つというのに、一体、国はわれわれのことをどう思っているのだろうか。それらしい事は何も聞えてこなかった。私は未だに行方不明者なのだろうか。と故郷の父母兄弟に思いを馳せた。

帰国への気配さえもない中で、まともや訪れる酷寒の季節を思いながら、心の内はうつ状態となる一方であった。すっかり初冬の気配のする九月下旬だった。私たちにまともや移動命令がでた。だが、今回の場合それはあまり穏やかなものではない。わが中隊は反動分子として重労働に廻される、という物騒な噂が流れてきたのだ。

しかるに、この度の移動は寝台列車でだった。反動分子には過分な待遇だと思ふ反面、列車でとんでもない奥地へ連行されるのでは、という恐怖感に襲われもした。

私たちを乗せた列車は西へ向っている。どのくらい走ったか記憶にないが、かなり大きな駅に到着した。私には想像もつかなかったものの、東京出身者の話によれば、この駅は品川駅の構内

に匹敵するほどの広さだとのことだった。

わが中隊は、クイブシェラカの最初のラーゲリを出てから、その位置さえも確認できない所を転々としていた。だがここに到着して、ようやく迷路から脱けだしたような気分になったのだ。それというのも、ここはシベリア鉄道沿線に列記されている「シマノフカ」というかなり大きな町だったからである。

私たちのラーゲリは、町から南へ一キロ余りの所にあつた。それは今までとは比べものにならないほど大きな建物だった。しかも、ここには大勢の先客が居た。

宿舎に入り装具を解いた私たちは、ここに居る人たちの顔ぶれを見て驚いた。これらの人々は、最初のラーゲリだったクイブシェラカで一緒だった、わが大隊の人たちだったからである。聞くと、私たちより一足早くここへ移動して来たということであつた。もちろん将校たちの顔も揃って居たが、大

隊長は見えなかった。

つまり本隊を離れて放浪していたわが中隊は、再びここに合流したわけなのだ。これによって、人員も孫呉出発当時の編成である、約千名の作業大隊に戻つたのである。

何回も書いたが、私たちは移動のたびに、帰国への期待を抱いてはいた。しかしながら、このたびは、シベリアは結氷期に入ろうとしており、帰国は来春まで期待できない状況となつていたのである。それどころか、この霧囲気から見ても、むしろ本格的な捕虜生活はこれからでは、と思わせるものがあった。

ここに落着いて、あらためて周辺の人々を見ると、その顔触れが著しく変わっているのに気がついた。孫呉出発当時一緒だった老兵たちは、病氣や死亡するなど姿を消した者が多く、その数は極めて少なかった。また、たまたま当ラーゲリに補充された者の中には、凍傷のため手足の指を切断した者や、たび重なる凍傷に鼻の頭が猫のよ



うに黒ずんだ者も居るなど、それは初めて体験したシベリアの冬が如何に苛酷なものだったかを物語るものであった。

ただ、こんな中で、憎たらしいほど変わりなかったのは将校と下士官たちであった。この者たちには特権が与えられていたからである。

だがもっとも虐げられていたはずの下級兵士の中にも、目立って元気な者が居た。それは私と同期の初年兵たちだった。そのいずれも私と同様に、北

満の開拓団から志願兵として入隊した元義勇隊員であった。

十代という若さだったこともさることながら、満州の苛酷な自然の中で忍従の生活を数年間体験している。これが、思いもよらぬ逆境の中でも、充分耐え得る体力と精神力の源となっていたものと思われる。しかも私たちは、まえのラーゲリでは、はかないながらも甘い青春の気分まで味わっていたのだから、若さとは如何にすばらしいものか、と今になってつくづく思うので

ある。

さて、このラーゲリで私たちに与えられる仕事は、奥地の森林地帯から運び出されてくる材木の貨車積みであった。道路が凍結する厳寒期に主に行なわれるもので、昼夜を問わず厳しい労働が待っているのである。

すでにシベリアの大地は凍り始めていた。私たちに死の恐怖を与えた冬將軍は、再び目前に迫っていたのである。

— つづく —

(え・佐藤瑞江子)

おさない子を育てる



再び 「三歳児神話」考

千葉県流山市
福田豊子 (34歳)

“わいふ”誌上でここ数カ月、三歳児神話に関して多くの意見が交わされた。そこで私なりの三歳児神話に対する考えを整理してみたい。

鈴木さんのレポート(二五五号)にあるように「乳幼児期の周囲の人(特に母親)とのふれあいが人格形成上非常に重要である」というのは、おそらく事実であると思われる。

ただ、その「事実」は母親が働くことを否定しているわけでもないし、母と子べったり一対一の関係をベストとしているわけでもない。この「事実」が歪曲され、三歳までは母親の手で育てるべきだ」という「神話」に仕立て上げられたのではないだろうか。この「神話」には「小さな子を持つ母親は働くべきではない」とか「母親は育児に専念するべき」といったニュアンスが含まれている。

神話のもとになる事実には根拠があるのだから、神話そのものに全く根拠がないというわけではない。神話にも一理はある。ただ神話である以上、そ



のまま鵜呑みにするのは危険だということだ。

社会や慣習、あるいは文化規範が作りあげたこの神話は、今日フェミニズム的論理によって、そのベールをはがされつつある。もちろんその論調の中には、神話のもとになっている事実までも、否定しかならないようなものもある。

る。鈴木さんが指摘しているのは、おそらくその辺のところではないだろうか。

確かに神話は崩れつつあるのかもしれない。特に現代のような子育ての状況——核家族内での密室育児などが問題にされるような現状——においては、母親だけが保育者である場合の弊害も無視できない。また、専業主婦の母親が、やっぱり働きたいとストレスにさらされているよりは、保育園に預けたほうが子供のためにもよい可能性もある。

しかしそれにもかかわらず、私を含め多くの女性がこの神話にとらえられているのはなぜだろう。一つには、神話の背後にある事実のせいである。もう一つは、神話を作り上げた社会が、未だに神話を信奉しているからではないか。言い換えれば、女性が神話に縛られざるを得ないような社会のシステムが出来上がっているということである。

私自身、神話との葛藤を個人的な次



元、私的なレベルでとらえていたが、実は社会構造に根ざした問題ではないかという気がしている。税制や社会保険などにおいて、女性を専業主婦へと

追いやる制度が確立しているのを初めて、働き女性が子供を持つて、保育園に預けるか、仕事を辞めるかの二者択一を迫られる。祖父母が近くに住んでいるとか、条件が整わなければ、多様な子育てを試みることは不可能である。母親が一手に育児を引き受ける体制ではなく、社会的にもう少し柔軟

な保育システムなどがあれば、あるいは父親が保育に参加できるような状況になれば、神話に対するスタンスも変わってくるにちがいない。

しかし神話は神話である。神話と事実の境界を見極めるのは難しいが、神話をどのように受け止め解釈するかは、結局個人の問題である。まさに「神話は心の中に」といえる。「自分の優柔不断を三歳児神話のせいにして」「という指摘に対し、今の私は何の弁解もできない。

お母さん業を 廃業したい

東京都板橋区
山本雅子



今日も朝から吐言と吐責の嵐が吹き荒れる。

「朝起きて来たからお早ようございますでしょ」「ブラウスの衿がきちんとなくていいわよ」「ブラウスの裾は、スカートの中に入れるのよ」「歯みがいた?」「顔洗った?」「髪の毛とかした?」「新聞とってきてちょうだい」「はい、朝食できてますよ」

毎日の事なのにいつも同じ事を言われないと一日が始まらない。

その上に、「どうして毎日同じ事言わなきゃならないの」「たまには言われないでしてみたら?」などのおまけがつくのだから大変である。

「七時半すぎたわよ。早く食べて!」

「トイレはすんだ?」「タオル、かばんに入った?」「連絡帳は?」「毎日何か書いて持たせる?」「給食袋は?」「筆箱は?」「ハンカチ、ちり紙は?」……

矢つぎ早やにとび出す私のことは、「ハイ終ってます」という返事はマレである。これが小学六年生、残念ながら知恵遅れである。

モタモタと言われた事をする、それでも八時には身障学級へ登校のため家を出て行く。

五歳のサツちゃんを、お母さんになつてあげると言つて家に連れて来て(里子として)六年半経つた。いろんなことができるようになったけど、自分でできることは、食べる、排泄すること、眠ることだけで、あとはすべて言われなければできない(言われればできるだけマシなのだそうだけど)。

これからも毎日毎日言い続けなければいけないのかな。それとも言いすぎるからいけないのかな。

身体は大きくなって、胸もふくらみ、肌もなめらかになり、思春期まっ盛り。でもこの子の未来はまっくらである。お母さんもう疲れちゃった。疲れがイライラに変わり、児童虐待につながる前に、お母さん業を廃業したほうがいいのではないかと、今真剣に考えている。

(え・小林正子)



厚生省を囲んだ若者たち

東京都世田谷区
本庄たよ子

厚生省は
「安全」
と言い続けた

一九九五年七月二十四日午
前十一時。厚生省前は三〇〇
〇人の人波で埋まっていた。
「あやまってよ95・厚生省を
囲む人間の鎖」というHIV
訴訟を支援するために集まっ
た人々である。

私がHIV訴訟を身近に
知ったのは広河隆一・川田悦
子著の「龍平の未来・エイズ
と闘う19歳（講談社発行）」
という本を読んだこと、テ
レビ朝日「徹子の部屋」に出演
した龍平君母子を観たから
だった。

川田龍平君は、生後六カ月
で血友病との診断を受けた。
そして一九八六年、十歳のと
きに血液製剤によるエイズ感

染の宣告を受けたという十九歳の青年である。

米国ではそれよりずっと以前の一九八二年の段階で、血液製剤がエイズ病原体に汚染されているという警告がだされ、製薬会社は薬の回収を始めていたのだった。そしてその薬は安い値段で日本に流れこんで来ていたのである。血友病の患者たちは、血液製剤の輸入禁止、安全な国産の製剤への切り替え、アメリカで始まった加熱処理された安全な血液製剤の使用を訴え続けていた。

しかし厚生省は「血液製剤を変える必要はないし、心配もない」と言い続けていた。血液製剤はそれからも大量に使用されて、血友病患者約五〇〇〇人の中二〇〇〇人も人がエイズに感染させられてしまったのである。

龍平君のお母さんも、医師に何度か聞いたんだけど、「心配ない」と言われ続け、また製薬会社が開いた説明会でも安全性を強調されるばかりで、不安の中にもどうしようもない思いで過ごされていたのだった。

薬害によるHIV感染者が、国と製薬会社に対し訴訟を起こして六年になろうとしているのに、まだ何の謝罪もされていないという。龍平君は、どうしても裁判に勝ちたいという思いで実名を公表した。

ご両親は、薬害エイズ裁判をめぐる考え方や生き方の違いから離婚されている。母親は息子とともに闘う道を選んだが、父親は「国を相手の裁判で勝つのはむずかしい。今は健康管理と残された時間をどう生きるかが大切だ」という考えだった。

龍平君がエイズ感染を公表すると告げたときは「身体にだけは気をつけてがんばるんだぞ」と励まされたそうだが、今は心から応援しておられることだろう。「徹子の部屋」での龍平君は、おだやかな表情で静かに語る好青年だった。

血友病ということではじめをうけた小学生時代、高校生になってからエイズ感染をうち明けた友人たちが、みんな理解し支えてくれたこと、そんな体験から「もしかなうならば学校の先生になりた

● 厚生省を困らせた若者たち



い」という彼に、徹子さんは涙をこらえつつ「四年後にその夢がかなったら、必ずまたこの番組に出て下さいね」と話を結んだのだった。

抗議行動に参加

それから間もなく、私は「HIV訴訟を支える会」に入っている夫から「人間の鎖で厚生省を囲もう!」という抗議行動に誘われた。

前の日に私は古い絵の具を探し出してゼッケンを作った。「厚生省よ責任を取れ」「薬害エイズの責任をとれ」と赤、青、黄色で派手に書き、赤いリボンで体の前後に掛けるようにした。うちわにも紙を貼って同じように書いた。そして当日、おむすびと水筒を持って私たちは霞ヶ関に向かった。

「二〇〇〇人集まらなければ厚生省をかこむことが出来ない」と聞いていたので心配だった。知人や子どもたちに声をかけたが皆出勤日なのだ。しかし霞ヶ関で停車した途端、胸がドキドキした。



小田急線や地下鉄の車内で、原宿にでも遊びにゆくのかと思っていたいくつもの若い子の集団が、いっしょに動き出したのだ。地下から外に出るとそこはもう若者たちで埋まっていた。

声を漕がして叫んでいる受付係から黄色のスカーフを受けとると首に巻きつけ、ゼッケンを身につけて私たちは離れないように手をつないで揉まれるように歩き出した。

厚生省の前には演壇用のトラックがあり、マスコミ各社のカメラが右往左往している。

道を隔てた日比谷公園側に行くと、その歩道も人が一杯で、学生たちが汗だくで整理している。ここには黄色スカーフの人たちが集まっているが、黄は厚生省の裏手に、青は正面、赤は右側、緑が左側を囲むようにと指示があった。

こんなに大勢集まっちゃって収拾がつかんだらうか。ベビーカーの赤ちゃんも参加している。真昼の太陽の下、暑さと人いきでムンムンだ。私は、うちわを取り出して抗議をこめながらバタバタとおいでいた。

おばあさんがひとり私に声をかけてきた。パサッパサとして髪をアップにした、いかにも下町っ子のおばあちゃんだ。場ちがいな所に来てびっくりしてるのかな、と思っていると「わたしやね飛んできたのよ。テレビでね、厚生省囲むって言ってたから……。お役所は国民を守ってくれなきゃいけませんよ」と、ひとしきり気炎を上げると暑い暑いと行ってしまった。

学生たちがビデオカメラをあちこちで回している。夫も突然マイクをつきつけ



られて「厚生省は、血液製剤が汚染しているという情報を知っていながら許可したことの結果責任をとるべきです」と、けっこう緊張しながら話していた。

急にスピーカーが大きな音をたてた。学生たちが厚生省への抗議の声を上げるという。

医療福祉の勉強をしているという女子学生が口火を切った。「私は福祉の仕事

をしたいと思っています。福祉を実現するための厚生省が、こんなひどいことをしてしまったなんてショックです。絶対に責任をとって下さい」

二番手の白百合女子学生は胸がつかまってしまい、涙で声が出なくなるほどだった。

次から次へと、大学名を挙げながら学生の抗議が続けられる。「僕は四日前にこの裁判を知ったんで、学校の許可も受けずにビラを貼って、皆に呼びかけたんです」「東大医学部の〇〇です。厚生省には先輩がたくさんいると思います。僕はそれを非常に恥ずかしいと思っています。責任をとって下さい」

ギターを弾きながら抗議の歌を自作自演する学生もいた。

皆も手拍子で応援した。茨城県立牛久高校の生徒もマイクをとった。「大人は子どもたちに、悪いことをしたら『ゴメンナサイ』と言えと言います。厚生省もちゃんと謝って下さい」

大阪から駆けつけたというお母さんが立った。

「私の息子は血液製剤でエイズをうつされて死にました。いいえ死んだのではない。殺されたのです。本当にくやしい、と言って死んだ息子のために、私はこの裁判に勝つまでがんばります」

血友病の子どもたちの未来のために

龍平君と彼のお母さんがマイクを握った。

私は、もう頭に血が上ってしまって二人が何を話されたのか、きちんと文字で表わすことができないけれど、龍平君の「僕はもうあまりながくはないと思う。それまでにどうしても勝ちたい。今日はこんなにたくさんの方が集まってくれてとてもうれしい。ありがとう」という言葉と、お母さんの「今、五日にひとりずつ血友病薬害エイズ患者が死んでいきます。いっしょにがんばってきた友人の死を彼に伝えるのはとても辛い」という言葉が耳に残った。二人ともしっかりと大

きな声で落ちついて話をされていた。

しかし、「人間の鎖でとり囲む」ことに突然警察から中止命令が出た。「交通妨害になる」というのだ。

三〇〇〇人のどよめきが上がった。壇上の学生が、あらん限りの声を張り上げて抗議している。

主催者側の女性が発怒を押さえた声で皆に訴えた。

「皆さん、静かにして下さい。私たちは騒ぎをおこしてはならないと思います。冷静に抗議しましょう。その場でウエーブをおこして怒りをあらわして下さい」「わかった」という声と拍手がおきた。

さて、ウエーブとは何だろう。「どうやるの」と顔を見合わせたが誰も分かっていない。手をつないでみたり、スカーフを振ったりしているとマイクから指示が流れた。

「皆さん手をつないで立って下さい。カウントダウンに合わせて学生が端から走ってゆきます。前に来たらしゃがんで下さい。それでは1098……321」

学生が声を上げながら走ってきた。そ



れに合わせてしゃがんでみる。そして立ち上がって見送ってみると、たしかに人のウエーブが流れてゆく。黄色のスカーフが揺れながらウエーブとなってどこまでも流れてゆく。

怒りをこめて、訴訟の勝利を願って、患者さんたちへの励ましをこめて、ウエーブが起きたのだ。走ってゆく学生も手をにぎった人たちも、私の見た人たちは、みんな涙と汗でびっしょりだった。

そのあと日比谷公園に集まり、デモ行進をすることになった。本当に申し訳ないが、私達は疲れてしまっていた。あとは若い方々におまかせして帰ることにした。

行進の最前列に龍平君の姿が見える。さっき私と手をつないだ若者たちが、ダンボールで作った汽車ポッポを腰に当てて並んでいる。

ピンクの集団が手を振ってくれた。看護婦さんたちだった。私たちもうちわを振りながら「がんばりましょう」と叫んだ。小さい子や小学生もたくさん歩いていた。

若い人たちのエネルギーに圧倒された一日だった。何ごとにも無関心な若者が多いと思っていた。それだけに若い人が行動する素晴らしさに感動で胸が一杯だった。

その日は、どのテレビ局でもニュースとしてこの抗議行動をとりあげていた。世の中の人々が、薬害の恐ろしさ、生命の尊さ、責任をとることの大切さ、を知ってほしいと思う。



そして日曜日、「関口宏のサンデーモーニング」のオープニングに「薬害エイズの責任をとれ」という派手なアピールが画面いっぱいに出た。

「エッ、どこかで見たような……」そう
だ、それは私の胸にあったゼッケンだ。
顔のほうはカットされていたけれど、私
が心を込めて書いたゼッケンであった。

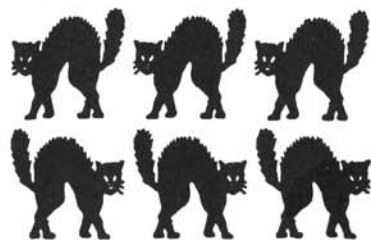
最後に龍平君のお母さんの言葉を皆さんにお伝えしたいと思う。

「厚生省、製薬会社、医師は謝ってほしいです。子どもたちは生きる希望を奪われたのです。『まちがっていました。ごめんなさい』と子どもたちにいって下さい。そして一日も早く、薬を、安心して受けられる医療を、安心して暮らせる社会を、そしてこのような苦しみがおきないような制度をつくってほしいのです。みんな、薬ができるまで生き延びて！子どもたちよ、みんなといっしょに笑ったり、苦しんだりしながら、生まれてきてよかった、そんな思いを味わってください。仲間たちと手をつなぎ、希望を失わずに。」

血友病の子どもたちの未来のために「（龍平の未来・エイズと闘う19歳より）」

写真提供・HIV訴訟を支える会

サーブ



レシ ー ブ

二五四号の「ごめんなさい、おとうさん」を読んで

東京都板橋区 長谷川恵美子

私もこの約三年間ずーっと「お母さん、ごめんなさい」という気持ちで過ごしてきました。

母は乳癌で医者に見放され退院して来たのです。当時、高校生だった私には突然の炊事、洗濯等がとても負担になり、自由に遊んでいる友人を羨ましがり、決してよい

娘ではありませんでした。

ところが三年前の夏、私も母と同じ病気になる手術をしました。ハイケアーでの一晚、痛みと闘っている私の目に浮かぶのは母の痛々しい姿ばかり。

乳癌とわかった時、悲しくて、つらくて、何度も一人で泣きました。でも、私が母の涙を見たのは術後三年目に「再発」という言葉を聞いたとき一回だけ。きっと私と同じ、一人で泣いていたのだろうと……。

私は母に比べたら傷もきれいだし、手も上がる。医学も進歩しているし、三年経った現在、元気で仕事も出来る。この三年余

りの間、傷を見る度、手が思うように上がらない時等々、色々な場面でもっと母に優しくしてあげられなかったかと。母が元氣に見えて「夏までは……」と言う医者の言葉が信じられず、家事一切を母に押しつけ、高校生活を楽しみ、心配をかけ、「母の死」というものから逃げていた私。

結婚、出産、育児、「母がいてくれたら……」といつも自分の事ばかり考え、母がどんなにつらかったか、どんな思いで逝ったか、考えた事もなかった。

看病というものは、これだけしたら完壁、ここまでやったら悔いが残らないとい

うことは決してないと思う。あれも、これ
もと後で思い出され悔やまれる。

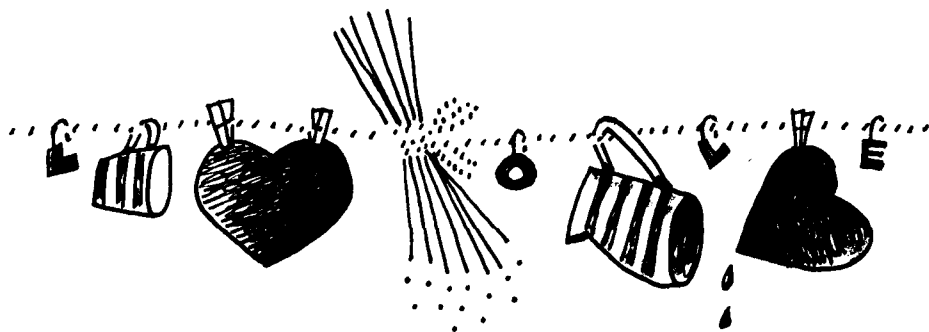
横山さんもきっと、その気持ちに誰かに
対する優しさが変わるのではないでしょう
か。

私の家は、祖母、母、私と三代にわたり
乳癌です。母を奪った病気に負けずに長生
きし、癌は私で打ち止めにしたいもので
す。

恋することは 自由ですが……

匿名

「永遠の片想い」を読んで、私ははつきり
いって怒り心頭です。他人の惚れたはれた
にとにかくいうほどばかばかしいことはな
いと思うのですが、今回のような不倫話が
黙認されてしまう日本でイヤだな、とつく
づく思っています。



考えてみてください。人の家庭に土足
で踏み込んでいった女性が、悲劇のヒロイ
ンのごとく語られているんですよ。つき合
い始めた彼に婚約者がいて、ショックで手
首を切ったなんて聞くと、私もついついの
せられてかわいそうに思ってしまうところ
でした。

しかし、本当に気の毒なのはこの筆者で
はなく、姿の见えない彼の婚約者ではない
でしょうか。彼女からすれば、この筆者は
不屈き千万。信頼していた彼に、「他にっ
き合っている女がいる」と打ち明けられて
ごらんない。彼女の気持ち、想像を絶す
る感があります。それでもいいからあなた
と結婚したい、と言った悲しい女心。健気
じゃありませんか。そんな辛い思いをして
まで、そのばかな男が好きだったのでは
しょう。

しかし、そうまでして結婚してみたもの
の、夫の背中に女の影がちらつくことほど
苦しいことはありません。私にも似たよう
な経験がありますが、夫の行動に猜疑心は
かりが膨らみ、来る日も来る日も真綿で首
を締められるようで発狂しそうなほどでし

た。

筆者が「好きだ、好きだ」と自分の気持ちを押しまくる話の裏側には、愛する人に裏切られ、のたうち回るほど苦しんだ女の呻き声が聞こえてきます。子どもを連れて夫の元を去っていった後ろ姿が目につきます。

悲劇は無神経な一つの行動から始まります。人を恋することは自由ですが、他人の生活を踏みにつたり、幸せを奪う権利は誰にもありません。一人の女の人生を狂わせてしまった償いは、そう簡単にできるものではありません。筆者はそこをどう考えているのでしょうか。

馬ではないが車で

千葉市花見川区 藤田勝美（32歳）

二五五号の「永遠の片想い」を読んだから心の隅ですっと西尾さんのことを思っ

た。私はこれほどまでに人を好きになったことがあっただろうか？

答は否。いつも自分でセーブしていた気がする。文中にもあったが、私もきつと思いつめて手首を切ることくらい朝飯前だったろう。そうなるのが怖くて、そのまゝに想いを抑えてしまう。傷が深くならないうちにすぐ自分をいたわってしまふ。

私は主人と見合い結婚である。出会ってからちょうど半年後に式を挙げた。「どうして決められたの？」とよく尋ねられるが簡単なこと。だって結婚というものを、一度してみたかった。会社勤めも疑問の毎日だった。母親から一日もはやく独立したかった。だから結婚したのだ。

でも心の中でずっとくすぶっていた。結婚ってこの人がいなければ、昼も夜もないという人とするものではないのだろうか？私が出会ふべき相手はもっと他にいたのではないか？

だって私には、白馬に乗った王子様があるわれるはずだったから。

そうだ。今、思い出した。王子様で思い出した。私は自分で気がついたのだ、世の

中に私より美人で聡明で性格のよい女性はごまんといる。それなのに私は、豊川悦司のような男性が私の前にあらわれ、私を馬の背に乗せて、連れ去ってくれと思うていたのだ。

主人と会った時、自分で決断したのだ。私にはこういう穏やかな人が必要なのだ。一緒に生活していくのならこの人だと。

そういえばこんな私に主人は言ったのだ。白い馬ではないけれど白い車で迎えに来たよと。

しかしそれでも尚、西尾さんをうらむ気持ちがあるのもまた事実なのである。

「専業主婦」と「侵略」

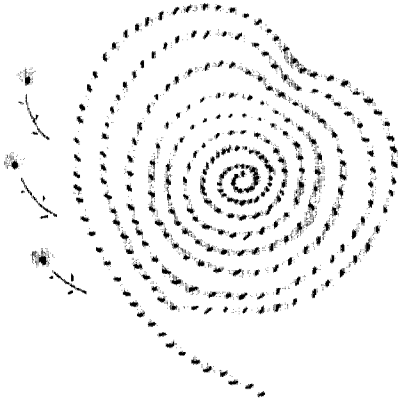
神奈川県相模原市 岩崎智子（38歳）
ちえ

一つの記事をこんなに何度も読み返しをしたのは初めてでした。二五五号「ファミ・ポリティク編集室より」を、冗談ではな

く、二十回は読みました。勢いがついて、田中さんの著書「働く女性の子育て論」も本棚から取り出し、一気に再読してしまっただけです。

私の解釈が間違っていないければ、田中さんのご主張はこうでしょうか。

専業主婦は悪であるということを認めたがらない女性の気持ちは、太平洋戦争が「侵略」ではないと考える兵士たちの気持ちと共通している、と。



田中さんの、いわゆる、専業主婦叩きの思想は、現在自分の意志で専業主婦をしている私なりに、一応理解しているつもりです。ですが、「侵略ではない」と言い張る人の気持ちと共通している、というぐだりは、どう考えても納得できません。あまりに飛躍し過ぎてはいませんか。

あるいは、私の読みが違っているのであれば、再度ご解説をお願いします。

神は許し給う？

大阪市旭区 宮崎貴子

幼稚園から高校までカトリック系のミッシェンスクールに通っていた私にとって、神様とか宗教とかいうものはごく身近なものだったが、だからと言って信じるというものではなく、むしろ私はそういうものに反発していた。

しかしお洒落というだけで結婚式を教会

で挙げることにした私は、八年振りに教会の扉を叩き、神父さまとお話する機会を持った。正直いって、その時も神父さまの「死が二人を分かつまで離れてはいけません」「離婚は罪悪です」というお話を「はいはい、分かってますよ」とうんざりした気持ちで聞いていた。

ところがととん神様に反抗するようにできていたのか、半年もたたずに別居、その後離婚してしまった。すでに離婚してしまっているのに何も知らない神父さまから、結婚記念日に電話があった。新居に掛けてもつながらないので、実家に掛けたが元氣ですかとカタコトの日本語で。その後毎年すでに幻となってしまったその日にならず電話をくださった。毎年母が何とかがまかしてくれていたのだが、去年ついに、

「もうすぐほら、神父さまから掛かってくる日よ。いい加減に自分で本当のこと言えば？ 私も毎回毎回嘘つきの辛いわ。いつも親切に掛けてきてくれてはるのに」と困った顔をして言った。

気が重かったが——なにせ離婚は罪悪な

のだ——一大決心をして神父さまに手紙を書くことにした。あれからすぐ離婚してしまったこと、今は結婚して夫と可愛い息子に恵まれ幸せに暮らしていること、を英語で伝え、最後に離婚のこと、嘘をついていたことに対してごめんなさいと謝った。きつとひんしゆくものだろうなあ、これであの神父さまともお別れだなあと思いきい投函した。

すぐに返事が届き、その内容に私は涙が出そうになった。

よく書いてくださってありがとうございます。(中略) 悲しいことがあったとしても、それではおしまいでありません。宮崎様たちがおつき合ひしてくだされば、喜んでほしいのです。(以下略)

神父さまのご好意に甘え私は今も、新しい家族と共におつき合ひさせていただいている。今まで形ばかりにとらわれて、そして(座談会であったように)宗教と聞いただけでネガティブなイメージを持っていた自分がなんだか恥ずかしかった。宗教って人を受け入れるという人間愛であり、決して融通のきかないものではなかった。神父

さまは本来許されるべきではない離婚を許してくださり、温かい心で包んでくださった。その人達が望まない限り人と人とのつながりは簡単にはおしまいにはならないと言ってくくださった(そういう点オウムなどほんとおかしいと思う)。嘘をついていたことさえも、本当のことを話したその勇気のほうを認めてくださった。私はこの神父さまによって、今まで見えなかった大切なことを教えられた気がする。

「ぜいたくな悩み」 第二弾

匿名

誌上でセックスストレスが話題になっていることを知った。私たちの場合も井川さんや香山さんと少し似た状況である。でも夫の弛まない努力により、けんかをしたりノイローゼになったりすることから救われてい

る。

人の欲望には個人差があり、大食家の人もいれば少食で満足する人もいる。性の場合も同様で少し食べればお腹一杯になる人に、もっと食べろというのは酷なことである。相手のいることなので、お互いの間で「もう充分」「いやもっと」という具合に満足感に差があるため、問題がでてくることになる。

私は夜一刻も早く眠りにつきたい。頭にあるのは明朝の献立と目算めてからの段取りのことばかりである。なのに床についたとたん夫はビール腹をどかっとな乗せてくる。重たい。私は細身の彼が好きだったのだ。思わず顔がゆがむ。とすかさず、

「オッ、嫌そうやないか」

と夫、つづけて、

「なあ、ええやろ? 今日一日楽しみにしてたんや。すぐ済むさかい」

と耳元でせがむ。そんな味気のないこと、と余計に気分が削がれる。

二十年前のあの情熱はどこへ行ってしまったのだろうか。思い起こしてロマンティックな気分になりたいたいのだけれど、

時間にも気持ちにもゆとりが持てない。

「やっと眠れると思ったのに——」

と文句を言つと、

「いつも好き勝手させてやっているやないか。お前の喜ぶ顔を見たくて何でも言うことを聞いているやないか。欲しいものはいつでも買えるように給料も全部渡しているし。オレは他に何の楽しみもないのやから、なー」

としつこい。こういった押し問答の数日後には、

「うるさい。お前はオレのものや。オレには権利がある」

と強気に出てくる。そうなると私も折れてしまふ。陰悪なムードは疲れるし、夫の脅し文句である「愛人」などできては面倒だからだ。

でも、もともとこちらが積極的でないためしはらくすると、

「もっとまじめにしろ」

とカツを入れられることになる。

夫は勉強家だ。週刊誌やサラリーマン向けの夕刊紙などで情報を仕入れてくる。得た知識はすぐに実践に移そうとする。この

ことに関しては実にまめである。

重い、痛い、息苦しい、口が臭い（ニンニクやアルコール）、ヒリヒリする、みっともない、はしたない、そんな思いから、「あなた変態とちがう？ 私は足をなでてもうっただけでいいのに、もう恐怖やわ」と言つと、

「そんな子供みたいなことアホらしい。オレはいたってノーマルや。一夫一婦制度自体が不自然なことやから、長い人生いろいろ工夫せんと長続きせえへんのや」と平然としている。一立派。

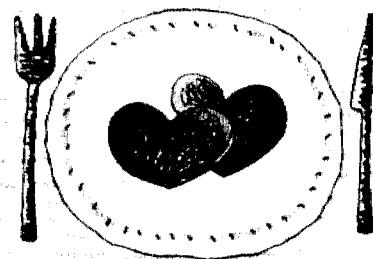
そして準備から後かたづけまでまめまめしく働く。日中の夫からは想像もできない姿である。

「お前はええな。ただドテツとしているだけでパジャマまで着せてもろて」と言いながらも心なしか嬉しそう。

友人の間で夫の相手をするのが億劫だ、夢中になれないといった話題が出るようになったのは、年齢が四十歳近くになるころからであった。皆それぞれ日常生活から離れ、自分自身の活動の場を持つようになつた人たちだ。年月と共に楽しみの優先順位

が変わつた結果である。

でも長生きするであらうこれからの数十年を夫婦仲良く暮していくためには、少食家の妻にとって第一の楽しみではなくても、夫との日常は大切にしていかななくてはいけないと思ひ始めている。それは夫婦にとって重要なことだと考える夫の気持ちをも、どこまで理解し受け入れられるかにかかっている。



（え・小沢恵子）

イスラエル体験記

イスラエル・ハイファーマ市
ワイツマン・清泉多美



ハイファーマ市

当時私は、東京のあるフランス系銀行で翻訳者として働いていました。おもにビジネス関係の記事を訳していたのです。私のデスクの上には、いつも厚い技術語の仏日・日仏の辞書、普通の仏日・日仏辞書が置いてありました。二十年もたった今では、これらは家の本棚の奥のほうに埃をかぶって置かれてあります。

さて、私とフランス語のつながりはとても長いのです。私の通っていた小学校にフランス人の先生がいて、フランス語を教えていました。中学・高校ともこの学校へ通いました。さらにこのフランス語専門科へ上がり、一年フランスのディジョン大学へ留学したのです。いっしょに学んだ仲間たった八人でファミリーのようでした。生れて初めて親から離れて見ず知らずの国へ行き、見ず知らずの人達と一年間食事を共にしたわけで、箱入り娘の私にとっては不安な日々の連続でした。この仲間達とも一年後にはすっかり親しくなりました。

卒業後、あるフランス系会社に入社したのですが、また勉強したくなり、両親に頼んで今度は一人でフランスへ出かけて行っ

たのです。一度暮らした土地なのですぐに慣れ、友達もたくさんでき、行動範囲も広がっていきました。大学で目的の免状をとり一年後帰国。すぐに銀行に勤めたわけです。

自信のついた私は国際的な交友の出来る場所を探し、ついに見つけました。そこは東京の下町に事務所があり、多数の外国人スタッフを持ち、語学教室、交友パーティ、講習会、家庭訪問、旅行などを企画している所で、世界中から集まって来た人々で一杯でした。アメリカ人、イギリス人、フランス人、ドイツ人、イタリア人、カナダ人、インド人、など。日本に長く住んでいる人、滞在期間の短い人など、また会社員、主婦、先生などバックグラウンドは様々でした。そして彼らの中に私の現在の夫であるアランもいたのです。

パリから来たユダヤ人青年

最初に彼に会った時、彼はあご髭を生やし、優しくくるくるした目が印象的でした。後でわかったのですが、この目がユダ

ヤ人特有の目だそうです。彼の前に知り合った何人かのフランス人とは、ぜんぜん雰囲気が違うのです。落ち着いていて男らしいのです。

彼はフランスのパリで長男として生まれました。卒業後、兵役に一年つき、その後パリのある空手道場に入会しました。当時パリは空手ブームで、ここへ日本から有名な先生方が来て本家の空手を披露し、パリっ子の彼は日本文化に興味を深く持ったのです。中でも宮本武蔵の話に強く心を動かされたそうです。その後盆栽、生け花にチャレンジしていきました。現在家には彼の作った松の盆栽がいくつもあり、時々花も生けますし、尺八の古典音楽を聞いたりして、彼は日本愛好家なのです。

その後、やはり日本文化に興味を持った二つ連いの弟と共に、日本へやって来ました。着いてすぐ、友達で紹介で東京のある空手道場へ入り、そこで一人のユダヤ系フランス人と知り合いになりました。この人も日本の女性と結婚し二人の子供を持ち、日本で暮らしています。彼を通して、さらに他のユダヤ人と知り合いになりました。

さて私はアランとデートを重ねていったのですが、彼が一度、「ぼくはユダヤ人なんだよ」と言った事があります。このころユダヤ人に関して知識の全然なかった私には、もちろんなんの意味もありませんでした。

さすがフランス人、舌が肥えていて、彼の作るお料理は本物のフランス料理。結婚した今でも時々時間があると、彼は腕を振るってフランス料理を私達にこちそうしてくれます。他にもイタリア料理や中国料理もおいしく作ります。私が感心して「お料理学校へでも行ったの」と聞いたら、「いや、ぼくは舌の感覚が発達しているから、味にすぐく敏感なんだよ」と言っていました。

その内にアランは両親の経営する会社の日本代表事務所を東京に作り、本格的に輸入の仕事を始めました。

イスラエル人との出会い

ある時、アランから紹介された人がイスラエル人だったのです。この時初めてイス

ラエルという国の存在を知りました。そしてアランとこの人の共通語が、なんと、あの歴史上一番古い言葉「ヘブライ語」だったのです。旧約聖書に書かれた言葉で、四千年たった今でも変わりなく話されている言葉です。それにしても、フランス語が世界で一番美しい言葉であると断言している私にとっては、なんとも変わった言葉でした。英語やフランス語に一言も似ていないのですから、チンプンカンプン。

今、イスラエルに住んでよく分かるのですが、イスラエル人はよくしゃべる。丁度機関銃の玉が連発されるように、非常に早いスピードで、ガガガーと話しまくるのです。日本の男性は無口ですので、これには驚きました。けんかをしているんじゃないか、ととられてもよいほど大きな声で話すのです。今でもこれだけは耳ざわりでどうしようありません。また、不思議な事に、お互いに初対面であってもすぐ親しげに話すのです。

例えば、バスの中でよくラジオ番組を流すのですが、特にニュース番組が流れると、今まで静かにすわっていたのが、急に

口論の場が変わってしまします。男女性別、年齢にかかわらず「私はこう思う」と、堂々と言い合い、彼らには「恥」も「見栄」も全然ないようです。自分の言うことが正しいのだと、とことんまで主張し、絶対譲ることはしません。

またヘブライ語には尊敬語がないので、初対面の人にもよく知っている人にも同じように話します。ですから、私がイスラエルへ初めて来た時に、見ず知らずの人から声をかけられた時はびっくりし、同時に怒りを覚えたくらいでした。

もう一つの例は、私の長男が小さいころ、乳母車に乗せて歩いていたら時です。多分日中で日が照っていたのでしょう。近くを通った年配の女性がすれ違いに、「子供に帽子をかぶせなさい。帽子がないの？こんなに日が照っていて日射病にかかりますよ。かわいそうに」と、まるで自分の娘に言うように私に言うのです。肌の色が違おうが、顔の形が違おうが、彼らは少しも気にしません。

ユダヤ人と一言で言っても色々あります。ユダヤ系アメリカ人、ユダヤ系フラン

ス人、ユダヤ系ドイツ人、ユダヤ系イギリス人、ユダヤ系スペイン人、ユダヤ系イタリア人、ユダヤ系ロシア人、ユダヤ系マロコ人、ユダヤ系エチオピア人、ユダヤ系アルゼンチナ人、ユダヤ系アルジェリア人、ユダヤ系イエメン人、そしてもちろんイスラエル人と、代表的な国でもこれだけあるのです。旧約聖書の中に、当時（何千年前）、エジプトで奴隷として強制労働にっていたユダヤ民族が、一時にエジプトを脱出し、四十年間砂漠をさまよったと書いてあります。

放浪しながら安息の地を求め、世界のあちこちに流れて行ったのでしょう。流れ着いた国で子孫を作り成功した者もいれば、そこで迫害を受け現在のイスラエルへ流れて来た者もいたことでしょう。流れ着いた国でその教育を受け、その文化様式を身につけたのですから、同民族でも、それぞれ違うのです。それでも一たんユダヤ人が集まると、親しげに互いに、どこの国に住んでいて、親はどこ出身で、何の仕事をしているかなどと、すぐにヘブライ語で聞き合います。このヘブライ語というの



イスラエルの田園風景

は、まったく見ず知らずのユダヤ人同士を親密に近づけるマジック的な言葉なのではないでしょうか。

もちろん当時の私には、こういう知識は頭になく、ただフランス人の彼がいることで毎日満されていたのです。

フランス、イスラエルへ発つ

月日はたち、私達のフランス、イスラエル旅行が決まりました。パリには彼の両親、親戚、学生時代の友達に住んでいます。色々と想像し、胸をふくらませながらパリへ発ちました。パリではブティック経営の両親のリッチなマンションに寝泊りしました。毎朝隣のパン屋へ焼きたてのバゲットを買いに行き、どんぶりくらいの大

きさのお皿「ボル」にカフェオレを注いで、バゲットにバターやジャムをつけ、カフェオレの中にザブンとバゲットの先を入れ、丁度カフェオレがよく浸ったところできり上げて食べるのです。このバゲットのおいしいこと。これが楽しみで毎朝早く起きて買いに行きました。

朝食後、気持ちのよい朝の町に二人で出ました。両親の経営するブティックはリボリー通りにあり、この通りにはガラリールファイエットや他の有名店がズラッと並んでいます。そこへ、朝の挨拶に顔を出しました。行くと必ず近くのカフェーに連れて行ってくれて、いっしょにコーヒートクロワッサンを食べたのです。アランの両親を始め、叔父、叔母、並びに家族の方々、みんなザックバランな人達で、私をすぐ歓迎してくれたのです。夢のような日々があつと言うまに過ぎ、私達はイスラエル行きの飛行機に乗ったのです。

パリからテルアビブまで三時間半のフライトです。ベンゴリオン国際空港から外に出ると、サウナの中にいるようなムートとする暑さに一瞬びっくりしました。丁度初夏（三〜四月）だったのです。周りを見渡すとヤシの木があちこちに生えていて、周りの建物の色はクリーム色でした。それからタクシー乗り場のほうに目を向けると、なんと大型メルセデスベンツばかり。私がボーとして立っていると、私の傍へ顔の色、髪の毛、髭も黒い、目のギョロっとし

た、あまり人相のよくないおじさんが近よってきて、アランと何かを話しています。耳をよく澄まして聞くとあのヘブライ語だったのです。周りを見るとこのおじさんのような人があちこちにおり、なんと彼らはタクシートの運転手だったのです。様子を見ていると、アランとこのおじさんは料金の交渉をしているようで、手を激しく上下左右に動かして話していました。ヨーロッパでもない、アメリカでもない、今まで見たこともない所、中近東に私は来ていたのです。運転手との交渉も決まり、いよいよハイファァー市に向かいました。

今から十四年前のことですから、車には冷房なんかありません。走りだすと窓から乾燥した風が入ってきて、意外と気持ちよいのです。目に入る風景は広々とした荒野。時々あのヤシの木やユーカリの木が国道に沿って生えています。ユーカリの木が多いので「どうしてこの木が多いの」とアランに聞くと、「ユーカリの木は水分をすくく吸収するんだ。この辺は一番前まで湿地だった。この木をイスラエル人が植えたことで、今はすっかり水がなくなっただんだ、

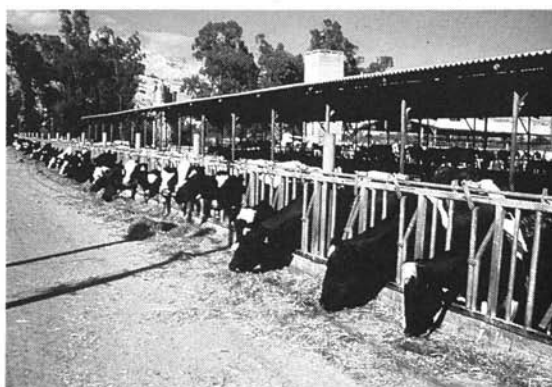
よ」と、いかにも自分が植えたかのように自慢しながら言います。急にオレンジの木やバナナの木が目に入ってきて来ました。それも何キロも続くのです。

「あれがキブツだよ」と言われて、よく目をあけて見ると、広大な耕地には様々な野菜がきちっと整頓され植わっており、遠くには村の建物が見えます。これがよく話に出たキブツだったのです。

キブツ

キブツとは共同村のことです。キブツにも色々あり、農業を営む村、電器、電子部品を作っている村、プラスチック製品を作る村もあります。日本に入っているオレンジやアボガドは実はキブツ産です。またコンピュータの部品もそうです。

あるキブツでは魚(ます、こい)の養殖をしています。また、立地条件のよさを利用して、観光客用にゲストハウスを営むキブツもあります。それぞれキブツの収入額が違うので、リッチな村もあれば貧乏な村もあるのです。



酪農を営むキブツ

さてキブツには、そう簡単には入れないそうです。トライ期間が一年くらいあり、この期間中色々チェックされるそうです。また、今までキブツのメンバーだった人が村払いを受けることもあるといえます。

一所帯に小さなキッチン、居間、シャワー室、寝室、日本でいえば一LDKか二LDKほどの家が与えられます。食事は村の中央にある食堂で、朝昼晩出るのでキッチンが小さいのです。村にはホール、保育園、幼稚園、診療所、床屋、食料品

屋、スポーツグラウンド、プールまであります。住んでいる人は様々です。赤ん坊から年寄りまで、それに外国から来たボランティアもいます。一昔前、キブツでは子供達は毎日いっしょに寝起きをし、子供専用の家で暮らしていたそうで、両親の家には週末もどっていたそうです。初めてこのことを聞いた時は驚きました。よく考えてみると、何にもなかった荒地にイスラエル建国に燃えた人々が集まり、水を引き、土を耕やし、種を植え、家を建て、学校を建て、こうやって共同で村を築いたのです。



キブツの中の保育園

またたびたびあったアラブ側の襲撃とも戦ったのですから、彼らはイスラエル建国を実現させたパイオニアだったのです。

ハイファアー市へ

さてタクシীর窓から海が見えてきました。これが地中海です。アランがいつも私に話していたあの海、なるほど色が青いのです。水が透き通っていて底の岩や魚達まで見えます。窓から見ると海岸がずっと続いていきます。その内に右手にちょっと高い山が見えてきました。これがカルメル山です。「ハイファアーはもうすぐだよ」と教えてくれました。しかしこの山、岩が多く非常に野生的で、グランドキャニオンのようなのです。時々山の頂に松の木が一本、変わったシルエットで立っているのが見えます。少し走ると木がいっぱい生えている所に出ました。「これらはイスラエル人の手で一本一本植えられたのだよ」とアランが言いました。よく見ると確かにきちんと同じ間隔で同じ種類の木が生えていました。スゴイ！年に一回、二月に国中そろって

一人一本ずつ木を植える行事があります。「トゥービシユバ」です。

山の頂に赤い屋根の家がちらちら見えてきました。ちょっと大きめの建物が建っています。これがカルメル病院。ふと目の前を見ると、すでに車は町の中に入っていました。

さて最初に私達を迎えてくれたのがアランの一番下の弟で、彼は当時ハイファアー工業大学「テクニオン」の学生でした。それからアランが日本に行く前に、ハイファアーで開いていた空手クラブの弟子達にも会いました。この中にはアメリカ人、フランス人、ロシア人、マロッコ人もいました。

このマロッコ人の彼が日本人に似ているのです。髪の毛、目の色も黒、顔の輪郭も似ているし、目が細く背も低く、肌の色は黄色なのです。彼に聞いたら、やはりこちらでも東洋人にまちがええられるそうです。

イスラエルでもヨーロッパと同じくお客様を自分の家へ招待しますので、私もあっちこっちでその家の家庭料理をごちそうになりました。例えばフランス料理、ポー



ハイファー工業大学「テクニオン」

ランド料理、マロッコ料理、アルジェリア料理、ロシア料理、アラブ料理など。どれも野菜と肉を豊富に使ったお料理です。サラダだけでも色々な種類があってお腹が一杯になってしまうのです。

ここでどこに行っても必ず出るサラダを紹介しましょう。トマト、きゅうり、玉ねぎを一センチの四角に切りオリーブ油とレモン汁をかけたサラダ。大きなすをまるごと皮がまっ黒くなるまで焼き、皮をはがしフォークで中身をつぶし、にんにくとレモン汁とオリーブ油をかけたサラダ。ホームスという豆を煮てやわらかくし、ミキ

サーでつぶし、レモン汁、オリーブ油をかけたサラダ。

もう一つ典型的家庭料理「ハミン」があります。ユダヤ教の掟の中に土曜日「シャバット」には働いてはいけないというのがあります。これは旧約聖書の「天地創造」の中に「……神は七日目にお休みになった」と書かれてありますが、ここから来ているのです。ですから家事一切しないでいいわけで、我々主婦にとっては最高なことです。ただど食べないわけにはいかないので、そこで金曜日夕方、日がしずむころこの「ハミン」を電気レンジでコトコトと一晩中煮るのです。調理は簡単。大きな鍋に皮をむいたじゃがいも、牛肉のかたまり、白いんげん豆、麦、そして殻をつけたままの卵を人数分入れるだけ。一晩中調理され牛肉から出る汁が全体にしみこみ、全体がブラウン色になりとてもおいしくでき上がるのです。

とにかくこちらではあらゆる野菜と肉を色々な方法で調理するので、カレーライスやチャーハンしか作れなかった私は、早速ノートに記録したのでした。

また女性が集まると、必ず自分の子供の自慢話とお料理の自慢話をします。代々伝えられてきたお料理なのでしょう。みんな食べるのが大好き。最初の内は彼女達のエネルギッシュなのに圧倒されました。そして必ず日本のお料理へも会話が進むのです。当時日本のことを知っている人がほとんどいず、私が生で魚を食べると言うところ、みんな信じられないという顔をしていました。また中華料理と間違えられることもありました。現在では国内に日本料理店がいくつもあり、日本へ旅行する人も多くなくなり、日本食愛好家も増えていきます。

時々家族そろって海へ泳ぎに行くと、アランがもぐってうに見つけることがあるのです。その場で私達がうを食べていると、みんな興味しんしん近よってくるのですが、うを見たとたん驚いていやな顔をして逃げていくのです。丁度私達日本人がかえるをおいしそうに食べているフランス人を見て、いやな顔をするのと同じことでしょう。食べてみると意外に美味な物で、ただこういう物を食べる習慣がないからなのです。

「カシエー」とは

さてイスラエルで食物の話をする時に、必ず耳にする言葉があります。それは「カシエー」です。ユダヤ教の数ある戒律の中で、一番ポピュラーでよく話題になります。辞書には「適法で清浄な（食物）」と書かれてあります。例えば、お肉は使用する前にお塩をたっぷりかけて、血を取り除いてから料理するのです。この処置法を「カシエーする」と言うのです。ですから肉屋で売られている牛肉、鳥肉、羊の肉はすでにラビ（ユダヤ教学者）により「カシエー」され、証印がついているのです。ただし豚はなんでもきかない物を食べお腹の中に虫がわくから、豚肉は「カシエー」ではないそうです。また、お魚でもひれとうるこのある物は「カシエー」ですが、私達日本人が大好きないか、たこ、えび、うに、貝類、うなぎは海中のよこれた物を食べるので「カシエー」ではないそうです。それともう一つよく聞くのが、「肉と乳と一緒に調理してはならない」ことです。どうしてと聞いたら、「モイズ時代（四千年

前）の法律は衛生と実用を基礎としていた。時と共にそれが伝統と宗教に変わっていった。この中で一番主要な法律が、肉と乳をいっしょに食べないことと豚を食べないことだった。理由は、豚はなんでも汚ない物を食べるのでお腹に虫がわき、人にも移った。またこのころは冷蔵庫もない時代



オレンジ畑

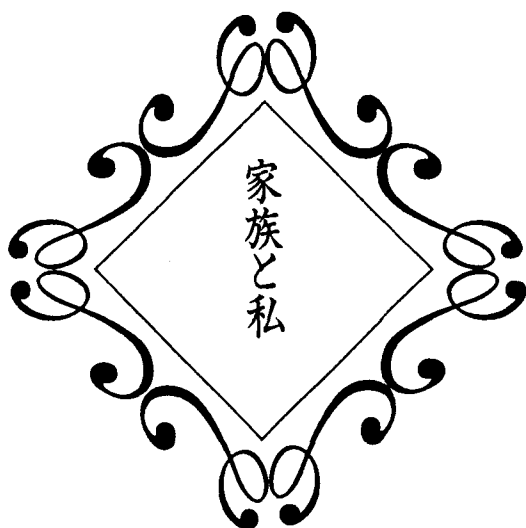
だから、保存状態が悪くすぐに肉がいたんだ。そして肉と乳をいっしょに食べるとお腹の中で化学反応をおこし病気になる。それから肉は子牛、子羊、つまり子供を意味し、乳は雌牛、つまり母親を意味し、肉と乳をいっしょに食べることは野蛮的行為で女性と子供を軽蔑しているとし禁止した

のだよ」という長い返事がもどってきた。四千年前にすでに衛生と実用的生活知識を教えたユダヤ教、スゴイ!!

家庭によっては「カシエーキッチン」というのがあって、台所に流し場が二つあり、一つはお肉を盛ったお皿、お肉をさしたフォークやナイフ用、一つはそうでない食器類用と分かれています。万が一、まちがって流し場に入れてもちゃんと処理方法まできまっています。万が一、しかし現実にはここまで徹底してやっているのは少数人数です。それからレストランも「カシエーレストラン」とそうでない普通のレストランとがあります。

アランについてあちこち訪ねた所で、私はその度歓迎されました。日本から来たと言うとみんな「すばらしい、すばらしい」と目をキラキラして色んな質問をしてくるのです。あんまり日本を誉めるので、今まで日本人のプライドのあまりなかった私でさえ、ちょっと偉くなった気分になりました。こうして三ヶ月が過ぎ去り私達は日本へもどったのです。

（写真提供・イスラエル政府観光局）



大往生

東京都杉並区 清水博子

父が死んだ。九十一歳八カ月。振り返ってみると、父が七十歳代からは、何度となく病気の知らせが入り、病院への入退院をくり返した。そのたびに私は、今回はひよっとすると最後になるかもしれないと、独り心の中でつぶやいたことだった。それがそのたびに復活した。ほっとするやら、少しばかり裏切られたような気持ちもあった。

そして今回、父はまったくあっけなく、旅立ってしまった。私はいま、父の死が悲しくない自分に驚いている。残された、ぼけが日々進む母が気がかりだからかもしれないが、「父を亡くす」ことがこんなことなのかと不思議でもある。

「オレはこの家で死ぬ」「お前たちの世話にはならない」「これが父の口癖だった。そう言われると、遠く離れて暮らす私たち子どもは何も言えなかった。確かに老人二人になってからも、とにかく二人暮らしを続けていたのは事実だったし、この言葉を言う時の父は一種の気迫がこもっていて、反論を許さないものがあった。たまに姉などが、「そんなことを言ったって、お母さん独りになったらどうするつもり？」などと言おうものなら、即座に父は「それこそ子どもたちで考えることだ」とか、「オレのほうが残ることはないから」とか、屁理屈で頑張るのだった。

この「オレはこの家で死ぬ」というあやふやさが、単に本人の希望的観測であるのはわかっている。でも、まあその時にまた考えようかというのも、私たち子どもの希望的観測でもあった。世間で高齢者の生活設計が声高くなるにつれ、こんなに加減は許されないのではないかの理性も働いたが、年齢とともに頑固になる父を放っておくしか

なかった。その「オレはこの家で死ぬ」がついにこの冬、現実になった。

一月四日まで、姉が行っていて、無事に年越しをした。帰った姉からは「お父さんはちょっと食が細くなっただけで、元気だった」との知らせだった。

四日後の一月八日夕方、私は別な用件で実家に電話をした。いつものように母が出て、私の「お父さんは？」に「昼寝している」ということだった。それはこれまでも何回もくり返された言葉だったから、私も何の疑問もなく、「風邪を引か



ないようにね。火に気をつけてね」で電話を切った。それが五時過ぎであった。ほぼ一時間後の六時を少し回ってから、電話が鳴った。

「ご飯にしようと思って、お父さんを起こそうとしたら冷たくなっていた」母のうろたえた声だった。「すぐ鈴木さんを呼んでね」父の主治医だった近所の開業医に電話をするように言った。

最終の新幹線にいまならぎりぎり間に合う。弟にも伝えて、遮二無二支度し、駅へ走った。ちょうど八時発だったから、本当にぎりぎりだった。東京駅についたのが、五分前。新幹線の改札で、一カ月前にダイヤ改正があり、発車が八分遅くなったことを知って、やっと息がつけた思いだった。

弟に声を掛けられほっとひと心地がついた。列車にのってから、私は風邪を引いているでもないのに、ものすごい咳に見舞われしばらく苦しかった。五、六分間でも走ったからだろうか。還暦過ぎて弱ってきている自分に、否応なく気づかされた。

仏間が父の寝室だった。父はその母親とまったく同じ場所、同じ向きに寝ていた。終戦の翌年、いまから四十九年前、私たちの祖母にあたる、この父の母親が老衰で亡くなった。それがこの部屋

だった。そして私は同じような場所から、同じ角度で祖母の遺体を見たことがあった。

父の「オレはこの家で死ぬ」はみごとに実現した。まるで自分の死を知っていたようだった。昼寝の前にトイレへ行っていたから、下もきれいだっただ。死亡診断書には「心筋梗塞（の疑い）」とあった。常備薬はのんでいたが、注射一本打たない終わりだった。最後の言葉は、「夕飯まで寝る」だったそうである。

これを「大往生」と言わずして大往生はないだろうと、そのみことな最期にいま私は圧倒されている。

築きあげた幸せ

横浜市緑区 三田サキ

私は三十七歳で夜間高校を出て、二年後に見合い結婚をした。相手は二年前に奥さんを亡くして、十四歳の女兒と十二歳の男児をかかえ、男手ひとつで子供を育てている人だった。

お互い再婚同士だった。主人は共働きを嫌い、内職をも許さないので生活は苦しかった。「どん

なに苦しくとも子供には生活の苦しさは絶対に見せるな」と言われていたので、そのように心がけていた。子供達は何も知らないで、色んな物を買ってねといってねたるのである。私はその度に、ひやひやして財布と相談しながら何でも買ってあげていた。



月末近くなって「ああ今月こそは給料日までちそうだわ」と思いほっとしていたら、思いがけない時に「お母さんジーパン買って」と息子にねだられたりして、給料をもらう日までは安心出来なかった。

こうした生活で経済的には大変だったが精神的

には子供との間は何の問題もなく、毎日毎日が楽しかった。学生気分ぬけきらない私は、二人の子供と学校での部活やホームルームの話を交したりして、仲のよい友達になれた。

こんな生活をしていた或る日、私の友人が遊びに来た。その日は丁度息子と父母会があったので友人には午前中で帰ってもらって、大急ぎで学校にかけつけた。用件が終り帰宅してみると、二人共ぶすっとしていたので、何かあったのかと聞いた。だしたら「今日来たお母さんの友達って男の人でしょう、煙草を吸ったあとの灰皿があったよ」と言うのである。

私はびっくりして「小島さん（友人）は煙草は吸うけど女なのよ、私に男友達が居るはずないよ」と釈明した。すると二人は「ああそうなの！」と、ようやく機嫌を直してくれ、もと通りの明るい声で「おみやげのバナナ食べてもいい？」と言っておいしそうに食べ始めた。

私はほっとした。それと同時に純真な子供の心を傷つけないため、私は心に一点のくもりも持つてはならないと、固く自分にちかったものだった。

そして息子もいよいよ小学生生活の終りの日がきた。卒業式に出席した私は帰り際に担任の小川

先生の所にお別れの挨拶に伺った。すると先生は三田君は『僕、新しいお母さん大好き、お母さんを信頼しているよ』と言ってました』と言って下さった。

私の知らない所で息子がこんな事を言ったのかと、嬉しさでほろりと涙をおとしてしまった。

そして六年の歳月が流れ、二人は各々短大と高校を同時に卒業して、いよいよ社会人となった。娘は栄養士、息子は小さいころからの念願かなって国鉄に入社することが出来た。

どんなことがあっても仕事のぐちを言わず、こつこつと仕事に磨きをかけた。そして着実に進歩し今では運転士として、十五両編成の電車を動かしている。息子は社会人になると同時に毎年母の日には、デパートの商品券にカーネーションを添えて「はい、母の日のプレゼント」と言ってくれ、渡し続けてくれた。

そんな息子も三年前に結婚したので、母の日のプレゼントはもうこれでおしまいと思っていた。すると終りどころか今度は嫁がわざわざデパートに向いて、ハイセンスなセーターやカーディガン等を選んできて、プレゼントしてくれるのである。私は息子夫婦の好意に感激して仏壇に手を合せ、拜まずにはいられなかった。今では子供が独

立して、定年退職した主人と二人きりの生活である。

でも月一度は必ず全員に集まってもらい、この日は早朝から起きて主人と二人で目いっぱいのご馳走を作り、酒盛りで大いに賑わうのである。月一度の楽しい晩餐である。

こうした子供達にかこまれ私は幸せである。妊娠・つわり・出産・育児の苦しみを全く知らずに、こんな優しい子供と嫁達にかこまれ、人並みの母親としての生活を営める。この幸せの中、家族と私はしっかりと強い絆で結ばれている。

男の更年期

東京都 きくい ゆう（47歳）

朝いつものように「会社へ行く」と家を出た次兄が音信不通となっていました。残された家族は、友人、知人、仕事関係を捜したが行先が全然わからない。思い当たる原因も考えられず困り果てていた。事故・家出・蒸発・失踪などと限りなく不安は続く。

次兄は十数年前からコンサルタント業を経営。

バブルの崩壊と不況でもちろん大きな打撃を受け、事務所や雇用も縮小していたが、最近では仕事も増えたと聞き安心していたのだが……。

いなくなつて数日後、兄から講演の仕事をキャンセルする電話があつた。義姉が急いで居場所を聞くが「今は言えない」と切れた。泣声だった状況からさらに心配は膨らんで、とうとう警察へ「家出人捜索願ひ」を頼んだ。夜も眠れぬ日が続いた。いつ電話が入っても対応が出来るようにと姉も泊り込み、家族を支えながら、無事に帰ってくることを祈るしかなかった。

一週間後、身も心もボロボロになつて玄関に倒れこんだ兄。憔悴し切つており、泣きじゃくり、号泣しながら「ごめんなさい。ごめんなさい」「許してくれ」と謝るばかりである。身長一七二センチ、体重七〇キロ近くで色黒のガッチリとした体格の男が妻に向かって、ただ謝るばかりの姿は異様である。迎えた妻は想像以上の状態に驚いた。

少し落ち着いてから「死に場を探してずっと歩き回った」「だが死ぬことも出来ずに帰宅した」「もう自分はダメな人間で生きている価値が見出せない」と嗚咽し泣き続け、今度は一人にして欲しいとカーテンも閉めてとじこもる。腰痛がひど

いのでベッドの下に布団を敷いたが寝られない。立ったり、座ったりして落着かず目も離せず、精神的にも狂いかねない状態だ。危険な物がなければ、義姉は二階へ上がったたり降りたりりの往復で筋肉痛になったほど。

私は心配ですぐに区の相談室へ問合わせた。保健所にいた精神科の医者とコンタクトがとれ「鬱病だから抗鬱剤を打つように」と病院を紹介してくれた。どのように説得しようかと迷いながら「よい病院を教わったので、行けばすぐよくなるから」と伝えると意外にもすぐ行くと言つ。「心配だから一緒に行く」と言つとそれもすぐにOKがでた。初めて訪ねた病院は精神科の専門であった。兄は「なんだ精神科じゃないか！ 腰が痛い



んだからここではダメだ！」と看板を見ただけで引返してしまった。兄は腰痛を治すつもりだった。

十年間近く私は兄の仕事を手伝っていたことがある。学歴社会の中で、すごく努力したし、仕事に情熱を傾けて大いにチャレンジもした。人脈も開拓し、多くの信用も得た。世話好きで親切なのは有名なのだが、欠点は弱い者にえげることが多く、謝るのも嫌いだ。それでいつも虚勢を張ってプライドを保つワンマン社長だった。

不況の影響は経営コンサルタントには一番に到来。趣味は持っていないも、ヒマは辛かった。仕事量が減れば、付き合ひも減る。寂しさのためか逆に酒の量は増えていた。どんなに収益があっても、気の進まない仕事で日銭を稼ぐのはプライドが許さなかった。思うような仕事が出来ずに神経が参り、日増しにアルコール中毒に近くなっていた。経営能力も生活力もあり、他から見れば自由で気ままに振舞い、不満などあるとは思えなかったのだが……。

張り詰めていた糸がとうとうバツサリと切れてしまった。夢遊病者のように歩き回ったあの一週間、どこでどうやって過ごしていたのかははっきりしない。家庭はもちろん、仕事や自分が生きるこ

とまでを否定して、苦しみ悩み抜いた兄の姿である。

今まで、わがままな兄にどれほど泣かされ、恨みに思ったか数えきれないが、「どんなに辛かったことだろうか」と思う。その苦しみの深さは計り知れないが、一番辛く苦しいのは本人だった事はわかってあげたい。「よい病院」の受け取り方の違いで抗鬱剤の注射もせず、しばらくして社会復帰することも出来たのでひと安心であるが、兄の更年期として、事件はこれで終わって欲しいと願う。

人間やりたいことを思うままに、いきいきとやっている時に、落込むことなんてない。

男の五十代には気をつけよう。

アルバムの中の息子たち

岐阜県各務原市 長縄幸子

アルバムはいつもの所に立てかけてある。私はアルバムを横目で見ると、いけない物を見たような気持ちになる。鏡で顔を見てみる。淋しく暗い顔がそこには映っている。なんということだろ



う。常に自立を志し、子どもは自由にさせてやろう、子どもにはとらわれない、という課題を心がけてきた私である。おまけに夫はやさしいし、子どもが出ていってからはひんぱんに二人で旅行をするようになった。

それでも私はアルバムを見られない。家族四人で旅した九州旅行の写真。毎年夏休みに泳いだ海辺でのひととき。じいちゃんに連れていってもらったキャンプでの写真。教室での息子たち。学童保育での忍者ごっこ写真。転居してしまった息子たちが小学生時代を過ごした家の前での写真。いいや、そこには息子たちの赤ちゃん時代の写真もある。

アルバムをめくれば、年子の二人の息子たちの

輝いた顔がすぐに出てくる。でも私はアルバムを見られない。そばを通るのも辛い。アルバムを横目でみながら私は思う。今までの私は一体何だったのだろうか。

専業主婦を五年体験してから、大学に再入学し、臨時教員の職を得た。仕事にこだわりながら、息子たちの事は常に優先で一番にしてきた。その理由は教育熱心というより、息子たちは私よりは弱者であるという私なりの持論からだ。だから、私より強者である夫は私のことより後回しだった。その点私は、夫のことを「主人」と言って立てるごく一般的な妻とは違っていた。でも息子たちは大切に育てた。

朝の慌ただしい中、懸命に作ったお弁当。早くお弁当作りから解放されたいと思った。成長盛りの中、メニューに気を使った夕食。膨大な食器を洗いながら早くこの作業から解放されたいと思っていた私。ささいな事で口論したり、衝突した息子たちの反抗期時代。今となっては、走馬灯のように私の脳裏を横切って行く。過ぎればなんでもなつかしい。

息子たちが巣立った後を考えて、職を持つよう早くから準備した私。幸い臨時という不安定な身分だが、教員というやりがいのある職を持っていた。

る。

でも、子どもが巣立ってみなければこの淋しさはわからない。巣立ったといっても、二人とも大学に通うためにアパートを借りて家を出ただけの事。それなのにこの始末だ。まったく情ない。この私だ。

私はアルバムは見ないで息子たちの今までの絵や習字、作文の整理をすることにした。保育園時代に描いたお父さんの顔がある。お母さんの顔がある。小学生時代に描いた、家族で行ったスキーの絵がある。長男の描いた彼の大好きな名鉄電車の絵がある。

私はそれを壁に貼った。少し元気がでてきた。その絵から彼たちの息吹が感じられる。私を描いた顔の中の口はやけに大きい。元々大きいからでもあるが、きつと口うるさかったのだろう。

二人共出ていって二年と少しが過ぎた。就職の内定した長男は来年この地方に戻ってくるかもしれない。次男とはこの夏休み、二人でギリシャ、エジプトを旅することになった。二人が出ていってからのショックからは少し立ち直った。でも、意外だった。この私の心が。人間なんて所詮弱いもの。アルバムを見直す勇氣はまだ私にはない。

戦

後

50

年

記

念

連

載

最

終

回

私と

英語

横浜市港北区

酒井智恵子

クリスマスシーズン

十一月の声を聞くと奥様はそわそわし出し、私に家の中を念入りに掃除するように命じた。

やがてヒイラギが欲しいと言い出した。私は伊勢佐木町まで出掛け、ヒイラギを届けると、それで丸い輪を作り、てっぺんに赤いリボンをつけた。そして戸口に飾った。今というクリスマス・リースである。

奥様は赤いリボンはジーザス・クラ

イストが人間の罪をあがなうため十字架で流した血。ヒイラギの緑はジーザス・クライストを信ずることによって得られる永遠の命を現わすのよと教えてくれたが、キリスト教会にも行ったことのない私には何のことかさっぱり分からない。

分かったのは、クリスマスは信者にとって大きなお祭りのようなものだということだった。

クリスマスが近づき、リビングルームにあるファイア・プレース（暖炉）

に火が入った。大きな丸太をどんとくべていく。パチパチ燃える火は部屋の明かりを消すとロマンチックでさえある。

火といえは悲しい思い出ばかり。火薬工場の田奈部隊では極端に火を恐れた、戦争末期には、空から焼夷弾が火のついたまきのように落ちてきた。

同じ火でも時と場所が変われば心に安らぎさえ与えてくれる。雪がしんと降る日の暖炉の火は心まで暖かくしてくれた。

昭和二十二年（一九四七年）と年が
改まった冬のある日、奥様は近い内に
ブラッフ・エリヤ（＝山手地区）へ

引っ越し

引っ越すことになったと告げた。この
ころ、横浜の山手地区から本牧にかけ
ての住宅地や焼け跡が接収され、続々
と本格的な米軍住宅が建ちはじめてい
た。慶應大学構内のハウジングエリヤ

私と英語



BEST WISHES FOR A



私にキリスト教の種をまいてくださったチャブレン・ブライアン師ご一家
（昭和24年のクリスマスカード）

は仮設住宅だったことから、越すこと
になったらしい。「一緒に来て」と言
われた。家からはかなり遠くなるので
一旦はためらったが、ついて行くこと
にした。

新居は中区千代崎町の高台にあっ
た。北向きの傾斜地の百坪（約三百平
方メートル）ほどの敷地に、白いしょ
うしやな家が青い芝生に囲まれて建っ
ていた。家の広さは今でいう六LDK
か。

日吉の家の窓は極端に小さい。しか
しこの家には広くて大きな窓ばかり。
広く高い窓に分厚いドレープカーテン
がどっしりと。その奥にはレースの
カーテンがあり、まるで滝が上から落
ちるかのようには波打っていた。

ご夫妻の寝室は十畳ほどであらう
か。今度のベッドは木製でどっしりと
していた。ベッドの横にはサイドテー
ブルが置かれていた。

ある朝、ベッドメイキングに入ると
黒光りするピストルがサイドテーブル
の上に置いてあった。狭い道路を越え

れば日本人の家。護身用にピストルは必要だったのだろう。私はそれを持って見た。ずしりと重かった。慌てて元の場所に置いた。

同僚

新しい家に落着くと間もなくとし子さんという、私と同じ年の人が一緒に働くことになった。彼女は色白で髪の毛をチリチリにパーマをかけ、ぼちゃっとしたかわいい方だった。

ゲストがが然多くなつた。お客様はたいがい夕方に見える。その日は奥様も朝からレシピーを揚げエブロンかけて大はりきり。大きな肉の塊をオーブンで焼いたり、フレンチ・フライポテトを作ったり、セロリのくぼみにクリムチーズをぬりこんだりして色どりよいオードブルを作った。

ダイニング・ルームのテーブルにはとつときのテーブルクロスをかけ、中央には低い花器に季節の花をアレンジした。

定刻にゲスト到着。ディナーが始ま

ると、奥様はあまり動かない。サービースにこれつとめるのはご亭主である。ここにこ笑いながらリップサービスとともに、肉をナイフで切り分け皆の皿に配る。この様子は、私の家とは正反対だった。父はいつもでんとお膳の前に座り、母はこまめに動いて心配りをしていた。私もいつか家庭を持ったら、こんな風景がいいナと思うのだった。

楽しいなゲストのおもてなしをかいま見た後は皿がいつもの倍以上。片付けをすませて外に出ると表は暗闇。街灯の満足にない坂道は足許が悪い。時刻はとうに九時を回っている。千代崎町停留所で市電に乗り、桜木町で渋谷行きの東横線に乗りつぐのだが、この桜木町駅構内が実に恐ろしい。夜遅くこの近辺を歩くのは夜の女ばかり。堅気の女の子の近付く場所でない。

のんびり歩こうものならたむろする米兵に「ヘーイ」と呼びかけられる。私はそこを脱鬼のごとく馳せぬけた。ハウスキーパー（私たちはこう呼ばれた）が二人になったので仕事は楽に

なった。奥様がショッピングにお出掛けになると、二人の天下だった。仕事をそっちのけにして、二人でいつもするのは髪のかし合いだった。

とし子さんの髪の毛は縮れ毛でくちやくちやしていた。その上にパーマをかけているので、くしがなかなか通らない。私は、学徒動員中の田奈部隊で、仕事の合い間の短かい休憩時間に、仲良しと髪のかし合いをして遊んだのを思い出し、彼女の髪を丁寧にかしてあげた。同じくして彼女が私の頭をいじった。

その内、私の頭がチクチクカッカしてきた。余りかゆいので母に見てもらうとシラミの卵が付いているという。

シラミがいると分かっただけで「ファイアークビ」と言われる職場。

私は慌てて薬局へ駆け込み駆除剤で退治した。次の日、とし子さんの頭をよく見ると、いるわ。いるわ。柳の芽吹き時のように白い卵がびっしり縮れ毛にしがみついていた。

そのころ発疹チフスが多発し、シラ

ミはその元凶と恐れられていた。戦時中、ちょっとしたでもかゆいと衣類一切脱いでたらいに入れ、熱湯をかけて釜茹での刑にしたのに。なんとかつだったことか。

おいとまごい

帰宅が安全でなかったことも、シラミの一件も辞めなくなった理由であったが、もう一つおいとまごいをしたいわけがあった。

それは奥様が仕事のパートナーとなったとし子さんをかわいがり出したように思えたからである。

交替で休みを取った翌日、出勤すると、私のいない日に奥様から石けんやセーターなど、当時の日本人には貴重な品物を頂いたと、とし子さんが報告するのである。

私は奥様から特に何かを頂いたという経験がない。相手は物の豊かな国の異邦人と割り切っていた。いくら敗戦国の人間だからといっても、物を欲しがるそぶりはしまいと、敗戦国民のプ

ライドを私は持ち続けていた。

物は抜きにして、奥様と私との関係は親密だと勝手に自分で思いこんでいた。そう思えばこそ、通勤に倍以上の一時間余はかかる山手くんだりまで、乞われてついできたのである。

事の真偽も分からぬままミセス・ペシアックに「グット・バイ」を言った。

奥様の春のイースターに着るペプラム付きのブラウスを縫い上げた時だった。

多分、私は少しばかりの古参をいいことに、かわいげのない態度を見せていたのだらう。英語の全く分からないとし子さんに何から何まで教えたのにと、恨めしい気持ちもなくはなかったがさよならをした。



ミセスチャネスキー、とても優しく、私をタイピストの学校に通わせてくれた恩人

チャネスキー家

再び就職浪人となった私は、次の仕事もおいそれと見つからないまま、近所の人の頼まれ物をせっせと縫っていた。

三カ月ほど経ったある日、ペシアック家を紹介してくれた斉藤さんが、またやってきてもう一度、日吉の米軍住宅で働かないかと、持ちかけてきた。

そして勤めたのがチャネスキー家であった。ご主人のチャネスキー中尉は三十歳はとうにすぎている優しい温厚な紳士であった。夫人も大柄で肉づきがよく、ひっこんだブルーの目はなんでも包みこんでしまいそうな優しい光を放っていた。

この家でもお子さんはいなかった。太り気味を気にするミセス・チャネスキーはもっかダイエツト中とかで、にこにこ笑いながら、私の仕事を片っ端から取り上げる。

朝十時と、午後三時はティタイムだった。「チエコ。お茶にしましょ」

と言いながら、自ら紅茶を入れお菓子を用意し、私にすすめた。「本当は我慢しなくちゃいけないのだけど。でもちよっとだけ……」と言いながら、クッキーやチョコレートをほおばる。

この時間は、願ってもない英会話のひとつとなった。満足な基礎のないまま米国人と向き合う私の発音は、さぞや吹き出したものであったろう。ミセスはそれを直したかったのか、マガジンラックに入っている「タイム」「ニューズ ウィーク」などの雑誌や、通信販売誌「シアーズ ローバック」を取り出して私に読ませた。そして発音を直してくれた。特に「R」と「L」は自分の口をあけ、舌の丸め具合まで見せてくれた。

そのうちに「チエコ。家の中の仕事よりオフィスの仕事をしたら」と言い出した。私の夢は「英文タイピスト」と告げると、「ハズバンドの事務所ではタイピストを欲しがっているわ。タイピスト学校を見つけないさい。学校へ行った残りの時間だけここへくればい

いのよ。給料だってちゃんとあげます」と夢みたいなきことを提案してくれた。

前に、一回落ちた神奈川県語学要員養成所の生徒募集記事を新聞で見つけたのは、それから間もなくのことであった。

エイビー・AEPスクール

再度試験に挑戦した私は、今回はすんなり受かった。昭和二十二年（一九四七年）の秋も深まり始めていた。

この養成所は別名AEPスクールと呼ばれた。アーミー エジュケイションナル プログラムの略で、折からの進駐軍のオフィスでの英文タイピスト不足から、アメリカの陸軍の教育プログラムによって出来た職業訓練校であった。期間は六カ月で、卒業したあかつきには米軍基地での六カ月勤務が義務付けられていた。

インストラクターはアメリカ日系二世のミセス中川という、年のころ四十歳ぐらいの婦人で教室内は一切日本語厳禁であった。マニユアルもタイププラ

イターも米軍の貸与で、タイプライターのキイには、頭でキイの配列を覚えるように白いペンキが塗ってあった。

生徒は女子二十人、男子十人。毎日、単語五十個覚えなければいけない宿題が出て、翌朝、朝一番にテストが行なわれ、それをパスしないと生徒としての資格がなくなった。

AEPスクールの授業が終わると、チャネスキー家に直行するという、ハードな二足のわらじを私ははいた。そんな生活も一カ月くらい続いたか。チャネスキー家も前のペシアック家と同様に山手の米軍住宅に越すことになり、私はこれを機にAEPスクールに専念した。

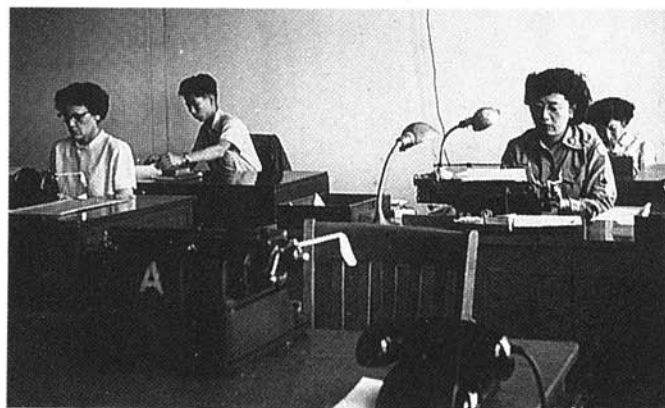
敗戦国の人間だからと、おずおずしそうな私に、同じ人間でしょ。という大らかな態度でチャネスキー夫人は接して下さった。この家での生活はすべて楽しかったと言ってもいい。しかし、ひとつだけ嫌なものがあつた。こんなこと言える義理ではないが……。

それは鰯をはじめ、ツナ、サーモンなどが昼食に出されることだった。ご夫妻は前のペシアック夫妻同様、日本に着いたばかりなので家で昼食はとらず、近くの将校用のメスホールに出掛けていた。家にいる私には、必ずパンと鰯など魚を用意してくださる。

「日本人は魚好きと聞くけど、チエコ。あなたも好き」と最初に聞かれた。なんでも有り難いと思っている身、「イエース」と答えたことから「魚好き人間」と思われたらしい。主に鰯とパンの昼食となった。

この鰯は動員時代に大根との煮付けにしょっちゅう出たし、子どものころから鰯はカルシウムがあるとめざしを食べ続けていた。ここは油漬で、私にはくどく、しまいには見るのさえ苦痛になった。鰯の目には、奥様の目を盗んでちり紙に包み、ハンドバックに押し込んだ。ついにおこづかいを貯めてやっと買ったハンドバックは鰯臭くなった。「肉が食べたい」と叫びたくなった。

昭和二十五年ごろ
タイピストブルで。
私、右の奥。
前は、WAC（女の兵隊）二世の人、外にも外人の女性が大勢いました。
日本郵船ビル三階、米第八軍輸送司令部事務所にて



英文タイプピストとなって

あこがれのタイプピストになったのは、志を立ててから二年後の昭和二十三年（一九四八年）春のことである。

派遣された先は、慶應大学近くの米軍基地内のオフィスだった。上司はグレック大尉。でっぷりした中年の将校。その下に二人のG.I.がいた。ここでは軍人の名簿や命令書などをタイプで打って作成した。新米の私は、初めて見る書類にとまどいを感じ、ミスタイプもしたが三人そろって親切に、手取り足取りで助けてくれた。

癖のあるハンドライティングには正直言って参った。困っているとすぐ飛んで来て「テイク イーजी（気楽にやって）」と言ってくれる。そして人前では決して恥をかかせない。

職業に貴賤（*きせん）はないものの、英文タイプピストとメイドではひと味もふた味も違った。タイプライターを前に背筋をしゃんと伸ばして、頼まれた書類を仕上げると小気味よい。

田奈部隊で出会った日本軍人は皆しゃちこぼっていた。旗が異なるとこゝうも違ふのか妙に感心した。

基地内チャペル

ある日、基地内の従軍牧師チャペレン・ブライアン師と知りあった。

「チエコ。チャペルに来ませんか」

誘われるまま、初めて入ったチャペルはかまぼこ型の建物だった。私がキリスト教の教会と名の付く所に足を踏み入れたのは、ここが初めてだった。

私の住む町にも六角橋教会がある。六角橋教会は、私の家と私の通った小学校とのほぼ中間にあり、屋根からつき出ている十字架を見ては、私は一体何をやる所だろうといつも疑問に思っていた。私は母に聞いたことがある。

「あの家は何？」と。しかし、母は答えなかった。仏教色濃く越前生まれの母には、いくら子どもに聞かれても答えようがなかったのだろう。

会堂内の正面にも十字架がかかげられ、その下のテーブルの上には聖書が

置かれていた。人々が静かに祈りを捧げている。そこは私が味わったことのない静かな空間だった。これを機に私は日曜毎チャペルに通い出した。

ここでは職場にあり勝ちなアメリカ人と日本人との区別もなく、平等であった。当り前のことだが、すべて英語なので説教の意味も分からなかったが、その内、空気で「主の祈り」を同席するアメリカ人たちが唱えていた。その年のクリスマスに、なんとチャブレン・ブライアン師は、私を山手の米軍住宅内の自宅に招いて下さったのである。

その夕べ、青い目のブライアン夫人と、カーリーヘアの二人の小さなお嬢様にゲストとして迎えられた私は夢心地であった。食卓の上には丸焼きの七面鳥がキャンドルの明かりに照らされてテカテカ光っていた。

楽しい教会通いは足かけ二年ほどは続いた。その後、私が横浜市の中心に近い海岸通りにある、第八米軍輸送司令部に職場を変えたことから遠のいて

しまった。

新しい職場は第八米軍輸送司令部（TMRs）の行政副官室だった。この司令部は、占領下の日本の鉄道を統括していた。接収した客車に白い帯をつけ「ヤンキー・リミテッド」などの名を付け、進駐軍専用列車を走らせていた。

私は、四、五人のアメリカ婦人たちと、行政副官室内のタイピストプールで各種の命令書、レター、タイムテーブル（列車の時刻表）などを作成していた。

ブライダルシャワー

英文タイピストとして充実した日々を送っていた私に、縁談が起った。昭和二十六年（一九五一年）と年が改めてすぐのことである。

つきあい出して三カ月ほどで、私は彼の言うなりに、ジューン・ブライドになるべく純白のシルクサテンで、ウエディングドレスを縫い出していた。オフィスのアメリカ人たちに花嫁に

なることを告げると、私に隠れて同僚の婦人たちが何やらメモを回しはじめた。

「はて何だろう」と思ったそれが、私のためにブライダルシャワーを開いてくれる計画と後日知った時の驚きと



ブライダルシャワーで。左は事務所のキャプテン
ルール大尉、右は招待された母

いったら、言葉も出ないほどだった。

サプライズパーティにするために、私にはぎりぎりまで内緒だった。米国では結婚する前、花嫁となる人の友人が集まって祝福する習わしがあることは、ペシアック夫人から聞いていた。それが我が身に起こるとは！

司令部で働くアメリカ人や日本人約二十人が、勤務先の日本郵船ビルの三階の食堂に集まってくれた。

その日、私は祝福の渦の中にいた。

アメリカ人はレースのテーブルクロス、縞模様のコットンのふきん、時計、ランジェリー、旅行用アイロン、日本の正絹羽織に至るまで、美しいカードを添えて贈ってくれた。私はここにシンデレラ気分！

私はひとつひとつのプレゼントを開けて喜び、特別に用意してくれた二段重ねのデコレーションケーキにナイフを入れた。一部始終を見守る紋付姿の母は上気していた。父も招待されたが恥ずかしがって出てこない。物の無い時代のこうした好意は真底有難かった。



ブライダルシャワーで、プレゼントに囲まれた私

結婚

昭和二十六年（一九五一年）六月十七日、私たちは市内のホテルで結婚式を挙げた。夫二十六歳。妻の私二十歳。

私が結婚すると決めた時、気がかりなのは家の経済だった。公務員の初任給が五千円のそのころ、私は若い女の子にしては高給の一万五千円の月給取りだった。何故そんなに高いかと言う

と、タイプしか打っていないのにジョブタイトル（職種）だけはほとんど上がって通訳になっていたことと、新たに付き出した語学手当も二〇パーセントクレアーしていたからだ。私はその大半を家に入れていた。

貿易会社勤めの姉も家計を助けていた。我が家は娘が頑張るという変則的な経済で成り立っていた。しかし、私が出たらどうなるかの杞憂もすぐに解決した。父が、私が退職するのと



自分で縫ったウェディングドレス。型紙は洋裁の先生のお祝いでした

入れ替わりのようにT M R Sに勤め出したのである。

やがて私は長女を身ごもり、昭和二十七年（一九五二年）の春、職場を離れた。講和条約が発効する直前だった。

空の巣症候群

主婦となって約三十年の歳月は瞬く間にすぎ去った。「ハッ」と気がつくと、三人の子らは成人しもう親を必要としなくなっていた。私はこれ喜ぶ

と同時に、空の巣症候群に陥っていた。それに加えてぼうこう炎や頭痛などの、更年期障害とみられる症状にも悩まされ、まるでトンネルの中にいるようだった。そこから脱出したいと気分転換も兼ねて、体の調子のよい時にはカルチャーセンターに通った。

忘れた英会話もブラッシュアップしよう、と、ある朝つけたF E N ラジオ（在日米軍放送）からキリスト教の話が聞こえてきた。それは、私を一気にティーンエイジャーに引き戻した。まぶたの中にはチャブレン・ブライアン師がにこにこ笑っていた。

モーニング メディテーション（朝の瞑想）というこの番組を聞くうちに、私は教会の門を叩きたくなった。タイミングよく、信者になっている姉が誘ってくれた。再び教会に通い出してから一年半後の昭和五十六年（一九八一年）のクリスマス、私は洗礼を受けクリスチャンになったのであった。

――終わり――

（写真提供・筆者）

さまざまな戦後

第一集・第二集・第三集



日本経済評論社

明確な戦後処理がなされないまま、戦後五十年を迎えた。それまでの価値観が一変した昭和二十年を境に、人々はさまざまな生き方を通じて暗中模索を繰り返し、自己の確立をめざしてきた。本書はまさにその生

きざまの証であり闘いの記録である。

困難を極めた状況の中で彼らが戦後を歩み始めたとき、民主主義は多くの人々の生きる上での道しるべとなったが、はたしてそれはわが国の土壌にしっかりと

り根づいたのであろうか。

戦後の価値観が崩れ平和ボケの中に置かれている今、彼らの生きざまを振り返り、思いを共有することで戦争の風化に歯止めをかけてほしい。

日本経済評論社 各三六六円(高)

キャリア

一歳かれた自由と実績一



藤野佐智子 著

夜の世界で十二年の実績を積んできた女性が、すべてを捨ててひとりの男との結婚に賭けたその結果は……。『空虚』であつたと言う主人公の後悔と苦しみ満ちた本書は、怨念めいた感が拭えなくもないが、とかくマイナスの固定観念で捉えら

れがちな職業に「信念を持って取り組んでいる」姿は、敬服に値するものがある。また彼女達が緊張感にあふれたその仕事に充実すればするほど、安穩な生活には虚脱を感じてしまうというあたりは、かつての職業人だった自分に執着を持つ専業主

婦にも、共通の思いとして感じられるであろう。

何もかも失った四十歳の主人公が毅然と再起を期す姿には、あらためて職業に貴賤はないということを意識させられる一冊である。

JDC 二〇〇〇円(高)

女がひとりで生きるためのマネープラン



福田美紀 著

独身志願の女性が増加している昨今、生涯の生活を支える経済的な基盤を作るためには、若いときから準備を始める必要があります。

そのためには社会保障の仕組み、有利な貯蓄、いざという

き安心の保険の種類や内容など、基本的な知識を身につけ、上手に利用することが大切です。

「一〇〇万円を確実にためるには、まずライフプランを立て、それにそった資金計画から始めなさい」と具体的な計画の立て

方から説明してあります。男女・既婚・未婚の別にかかわらず、このくらいの知識は身につけておきたい貯蓄・保険・社会保障の入門書です。

一読の価値があります。

汐文社 一三〇〇円(時)

平成7年度版
有料老人ホーム事情



久野万太郎 著

平成元年の初版以来、毎年四月現在の最新情勢を出版しています。本書は平成七年版です。有料老人ホームは人生最後の大きな買い物といわれています。老人ホーム選びに失敗しないためには、事前の十分な調査と、

実際に体験入居して、ホームの雰囲気や食事の味を確かめることが大切です。この本は社会情勢に伴って変化する老人ホームのお金の話、賢い老人ホームの選び方、全国一一六施設の老人ホームの特色

と簡単な実情、厚生年金事業団、簡保事業団ホームの紹介など、知っておきたい基礎的な知識について解説されています。老人ホームを選択するひとつの目安として、参考になります。

同友館 二〇〇〇円(水)

才女の運命

有名な男たちの陰で



インゲシュテファン 著 松永美穂 訳

トルストイの妻は、マルクスの妻は、アインシュタインの妻は、どんな生涯を送ったのか。本書では、有名な男たちの妻や愛人として生き、世の中から忘れ去られた、男性と同等あるいは男性よりもずっと有能であったかもしれない十人の女性

が紹介されている。結婚生活のなかで男性パートナーにアイディアを盗まれ、文章を盗作され、それでも常に自己表現の方法を模索し続けた女性たち。パートナーの死後、やっと自分らしく生きることができた女性を見ると、生まれた

時代が少し早すぎたと思わざるをえない。自己犠牲と自己主張の間で苦しむ女性たち。その苦しみから逃れる方法が病氣や自殺、そしてしばしば狂気であり、晩年を精神病院ですごす女性が多いことが読んでいてかなしい。あむすく 二〇〇〇円(美)

放浪カメラマン

酒と旅の人生



石川文洋 著

著者の趣味は飲酒と旅行、仕事はカメラを担いで旅へ出ること。と、聞けば何とも優雅な話だが、実像はフリー報道カメラマン。取材のために、激戦のベトナムで四年も従軍生活を送った骨のある人なのだ。

その旅の思い出と写真を一冊にまとめた。趣味の分野が色濃く出た著書の、話の中心はお酒と食事。銀座から沖縄、ベトナム、香港、北方四島まで、各地の文化と庶民の日常が記されている。食堂

の女将が笑い、避難民の子どもが裸足で遊ぶ。彼の写真はホンワリ温かくて、実に力強い。そこには観光ガイドには載っていない、地元の本当の姿が息づいている。

創和出版 二〇六〇円(佐)

セックスレス
したくない妻できない夫
愛しているのにすれ違うのは
なぜ？



安宅左知子編・著

男、もしくは女盛りといわれる年代のセックスレスが問題になっている。夫婦にとってセックスが全てでないことは重々承知のうえだが、心や言葉で語り合えないことを、体で語り合うことは、かなり重要なコミュニケーション

ケースションである。誰しも、愛しい相手と一つになり溶け合う満足感を知っているのだから。実は我が家も、こ多分に漏れず、セックスレスカップルであり、仕事仲間の八割がセックスレスである。それは決して異常なこと

とではなく、現実だ。順調なセックスライフを送っている夫婦にとっても、いつ起こるかもしれない身近な問題としてとらえ、セックスについて、もっとオープンに話し合えたらと思う。主婦の友社 一一〇〇円(税別)

エンパワメントの女性学

ゆうひかく選書



村松安子・村松泰子 編

七〇年代、八〇年代の成果を土台にして、セカンドステージに入った女性学のテキスト。キーワードの「エンパワメント」とは、エリート女性だけでなく、大勢の普通の女性たちが力を合わせて、自分たちで自分たちの状況や地位を変えていく

「実力をつける」ことを表す。女性のからだ、家族、教育、人権、雇用、政治参画、開発など、世界女性会議の行動綱領の重要項目と対応した内容になっている。女性の就職難、夫からの暴力、国外に目を向けると、ODAが途上国の女性の生活を

一層圧迫している事実。むしろ女性の状況は悪くなっている。文句を言い批判するだけでなく、「あらゆる意思決定の場」そして政策決定の場に女性がどんどん参加・参画する必要があることを痛感させられる。

有斐閣 一八五四円(国)

反抗期の子育てを楽しむ

尾木式教育法



尾木直樹 著

反抗期の子どもをもつ親は、我が子の言動に手を焼きイライラしている。二十二年間、小、中学校で教師をし、現在大学で教鞭を執っている著者は、反抗期を心も体も学力も飛躍する魅力一杯の時

期と肯定的にとらえている。そして親に、肩の力を抜いて自然体で子どもと手を取り合おうと勧めている。キーワードは「依存しつつ自立する」。

著者が言うように、揺れる子どもの心をキャッチしながら、どっしり腰を据えて接することができたなら、反抗期の子育ても余裕をもって楽しめそうだ。真只中の人、将来に不安を感じている人は是非お薦めしたい。

学陽書房 一五四五円(税別)

フランス家族事情

—男と女と子どもの風景—



浅野素女 著

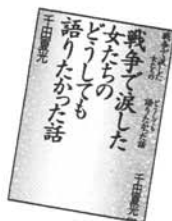
男女平等を追求し、仕事につき、経済的な自立を果たし、そして性の自由も手に入れた女たち——その結果、家族の実体はどう変わっていくのか？
フランスにおけるその実態を描くこの一冊ほど、私たちの未

来について思いを馳せさせてくれる本は珍しい。
昔ながらの結婚のかたち、家族のかたちはいま、フランスではほとんど解体されてしまった。法的な結婚のかたちを取るカップルは同居している男女の

四〇パーセント。都市部での離婚率の増加、非婚の母、不妊と人口受精の横行、子どもから切り離されてしまう男たち。日本とはあまりにも違う現実を知ることには実に刺激的である。

岩波書店 六二〇円(田)

戦争で涙した女たちの どうしても語りたかった話



千田夏光 著

本を書いたのは元新聞記者。戦争にはんろうされた女たちの実話が涙を誘う。
売春防止法などなき時代(同法の施行は昭和三十三年)に、こんな私でもお国のためなら、自ら従軍慰安婦に志願した娼婦。敗戦直前のソ連進攻時に夫

の目の前で辱しめを受けた満州在住の妻。産着も、手当する脱脂綿もない空襲下に、六人の赤ちゃんを取り上げた一人の助産婦。全部で八つの物語の中で私が注目したのは、敗戦直後、政府が良家の子女を守るという名目のもと、資金を出して作った

RAA(リクリエーション・アミューズメント・アソシエーション)の実態である。
読者はこれらを読むと戦争の重さを再確認するだろう。文中に戦争用語を易しく解説してあるのは親切で、好感が持たれた。
汐文社 一五〇〇円(智)

喜びの秘密



アリス・ウォーカー著 柳沢実子訳

題名も物語も何やら謎めいている。主人公のタシはなぜ心が病んだのか？なぜ裁判にかけられたのか？読み進むうち、その根底に女性性器切除という伝統的儀式が浮かび上がってくる。この慣習はいまだにアフリ

カ、中近東、アジアの一部で一億人以上の女性に行なわれている。その事実には読者は慄然とし、それが、女性のからだへのまぎれもない暴力であることに強い怒りを覚えるに違いない。しかし、当事者の女性自身が声をあ

げることはまだ少ない。著者はタシを通してそうした女たちに限りない愛情と共感をもって、この問題を告発する。小説のもつ力がここにはある。「喜びの秘密」の意味は読後のお楽しみに。
集英社 一六〇〇円(由)



時事放談

私の出会ったこんな医者

出席者 倉持和子
林 世志江
横山素子
編集部 和田好子
司会 田中喜美子

司会 人生のなかで、よいお医者さま、悪いお医者さま、いろいろ巡り会うわけですが、今日いらした方々はそれぞれ痛切な体験をお持ちだろうと思います。

まず最初に、そのご体験からお話ください。

命は、医者の判断にかかっている

林 今日針をうってもらってきたんです

けどね、お正月にギックリ腰をやっちゃったんですよ。針をやったら呆気なく治っちゃって。

私、体重が標準より三〇キロ多いんです。それが全部膝にかかって、体重を減らしなさいと言われてるんですけど、なかなかできませんで……。

(ギックリ腰の)前に、インド医学をやっていたらしゃる医大の名誉教授の先生のところへ、週に一度、三年間ぐらい針に通っ

ていたんです。そこでずいぶん痩せました。和田 針に通って痩せられた？

林 そうなの。それと、「今まで食べていたものを半分残しなさい」って。要するに食べなければ太らないわけですけども、私、痩せますよね、貧血みたいにめまいがして、風邪をひきやすくなるんですね。

精密検査をしてもらったらどこも悪くない。「ようすを見ましよう」ということで、しばらく通わなかった。

で、今年の六月にヘルペスをやりましたんですよ。孫の水疱瘡がうつったみたいで。右腕の付け根が痛くて痛くて、ツーンと電気が走るように痛くて、すぐ針をやっていたら……、人間てのは治る力があるんでしょね。痛みがいっぺんで消えちゃったんです。

和田 今は普通のクリニックで、針をやってくださいとところがけっこうありますよね。

司会 あとで突っ込んで話していただくとして、どういう病気でどういう理由で医者におかかりになったか、まず、ひとわりお願いします。

横山 私は三月十三日に千代田区のN医大付属病院へ入院しまして、六月二十八日に退院しました。事の起こりは、一月初めにちよっと出血をしたので、クリニックで細胞をとって検査に出したんです。

「ガンの心配はありません」と言われたけど、どうもおかしい。

友だちに電話したら、「そんなクリニックへ行かないで、ちゃんとした大きい病院へ行きなさい」と言う。でも外は寒いし、

行きたくないと思っていたら、その友だちがしょっちゅう電話してくるんですよ。

「もう行った？ 私も落ち着かないじゃないの」(笑)。「ガン三回って言うのよ。三件ぐらい病院を回らなきゃダメ」って。

司会 持つべきものは友、ですね。

横山 病院へ行ったら、「大丈夫かもわからないけれど、ちよっと肉が厚いようだ」と言われて、いろんな検査をしました。二週間後に検査結果を聞きに行くと、「明日、とにかく入院してください」と。それで、組織を取って調べたら前ガン状態だということがわかった。

どんなによい機械があつてエコーをとっても、それを読む医者の判断に命はかかっていると思いましたね。

入院したら、また膀胱から腸から、MRIもとって、全部検査しなおした。検査中でも土、日曜は帰宅できますし、「苦痛を与えない医療」というのが徹底していて、ちよっとでも痛かったら、すぐ痛み止めが自動的に入るんです。だから、あまり苦しくなかった。

司会 みなさん、検査はつらい、とおっ

しゃいますけどね。

横山 「苦しかったら、すぐ言ってください」って。先生と看護婦さんが一人ずつついて、MRIやっていても一〇分おきに自動的に血圧が計れるんです。思ってたほど、心配することはないかったですね。

子宮と卵巣、リンパ腺、全部取って、夫婦そろって組織検査の結果を聞いて、「確かに説明を受けました。納得しました」という署名、捺印をしました。

抗ガン剤を入れたほうがいいという話になったとき、抗ガン剤で今いろんな問題が出ていますから、「やりたくない」とずいぶん言っただんですけど、「ガン細胞を叩いたほうがいい。納得のいく医療を受けて退院してほしい」と言われて、結局、気がついたら先生の思うように説得されているんですよ。

でも、その抗ガン剤も巷で聞くような、髪の毛が全部抜けるとかひどい副作用はなくて、吐き気止めとかいろいろ入っているから、全然苦痛じゃないんです。先生も看護婦さんもしょっちゅう見に来てくださるし。



林 世志江さん

よかったのは、外来で診察した先生が担当医になって手術まで全部みてくださることでした。女の先生が一人入って、担当は三人つくんですけど、やっぱり女の先生はよかったと思います。

再発は受け入れてくれない

倉持 私はお産以来、医者とは縁がないけれども、昨年母がガンで亡くなって、兄も若いときに胃を手術していますので、出会った医者の数からすればかなり多いと思います。母は、病院は六つ行きましたから

ね、最終的に。最後はホスピス病棟の医者との出会いもありました。

母はガンセンターで告知を体験したり、私の場合は家族から見た医者ということでお二方とはちょっと違います。

司会 家族のほうが痛切に思うことがありますから、それはかまいません。

今までの体験の中で、とくに、ここが言いたい、ということはありませんか。

倉持 そうですね……、医者も一人の人間で、それ以外の何者でもない、という実感がすごく強いです。

でも、自分の命を預けるとか、大事な肉親の命がかかっていると、人間的に“とか、理想化したりして、どうしてもフィルターがかかってしまう。

司会 当然ですよ。

倉持 本当に対等な感覚で（医者が）診るようにならないければ、患者は安心してかかれないんじゃないかと思えますね。

私の友だちなんか、あまり医者に縁のない人は「お医者さまは神さまみたいに思う」って、ポロツと言うわけです。転がり込めば何とかしてくれる。すごく明るいイ

メージで言う。

でも私はそうは思えない。例えば母の場合、T大病院でしたけど、再発したら入院させてくれない。胃ガンの再発は二度目は切らないという常識があるみたいで、手術後も通院していたにもかかわらず、受け入れてもらえない。

司会 何か、ヘンねえ。

和田 どういうわけで？

倉持 患者が多いから。

母は最初からT大病院へかかっていたんじゃないくて、近くの病院から回されたんです。だから手術後は地元の病院へ通いたいわけです。抗ガン剤をもらったり、検診ぐらいだけです。ところが、駄目だと。自分のところで手術した患者は自分のところでケアする責任があると言うんですね。でも現実には、T大は第一線の手術をする病院であって……。

司会 ああ、わかりました。

倉持 終末医療を受ける病院ではない。再発した場合のケアには不適切な病院なんだ、と。

診断を鵜呑みに しちゃいけない

林 大病院なんか、診察時間が三分だとい
いますね。朝八時半に行って、帰ってきた
ら午後一時過ぎて。たった三分でも、信
頼できる先生ならいいけど、大きな病院で
は初診だけが部長先生で、あとは若い先生
が診る。それで私、大喧嘩したことがあり
ます。

ちょうど閉経の時期で、出血が多くて、
最初に部長先生に診ていただいたら、「た
いしたことはないけれど、閉経期だからも



横山素子さん

う一度出血があったらいらっしやい」とい
うていどだったんです。

でもドッと出血するので、EPホルモン
を飲んでしまったんですね。

和田 どうしてそんな薬、持ってたした
の？

林 生理を調節するのに、薬屋で売ってい
たんです。

それでも出血が止まらなくて病院へ行っ
たら、「医者へかかっていながら、なぜそ
ういう薬を飲んだのか」「すぐ入院して手
術しなきゃ駄目だ」と言われた。子宮筋腫
だと判断したんですね。それが若い先生な
の。いわゆるT大出の自信満々の。

でも手術はしなかった。他の病院で診て
もらったら、「子宮筋腫では絶対ない。よ
うすを見ればいい」って。こういうケース
はとも多くて、閉経になってしまえば何
ともないからって。結局、そのまま閉経に
なって、治ったんです。

和田 閉経の間際に出血するのはよくある
話ですね。

林 私、若い先生が嫌いだというのは、経
験がないから。

うちのお隣の坊やが医者で、坊やといっ
ても三十五、六歳ですけど、「あいつ、も
う七、八人殺しちゃったんだってよ」と息
子が言うの。やっぱり体験を積まないと、
正しい判断は難しいんじゃないですかね。

だから、若い先生に間違いないがあるのは当
然といえば当然で、それが一つのステップ
になって医者は成長していくんじゃないか
なあと感じたんです。亡くなった方には本
当に申し訳ないけれども。

和田 でも、自分がかかるのは嫌ですよ
(笑)。

司会 よいお医者さま、悪いお医者さまと
いうより、むしろ誤診の話ですね。診断が
早急で、あまり経験のない医者の診断を鵜
呑みにしちゃいけない、と。

林 そうです。

じつは私、もう一つ、そういうケースが
あるんです。

痩せる薬を飲んでいたときに、体調が悪
くなって検査を受けたら、腎臓が、普通は
ソラ豆みたいな形をしているのに、盂みた
いな形をしているって言われたんですよ。
水の袋が五、六個あって、若い先生が「あ

あなたは入院患者さんでしょ?」「いえ、違います」って言ったら、すごく驚いて「すぐ手術しなくっちゃ」とおっしゃる。

私、太っているので肉が多くて、開腹手術が大変なんです。傷口がくっつくまでが。「あなたは絶対に手術をしちゃいけません」って、他の先生からも言われていたのね。

で、私は、「O先生のご紹介で来ましたので、返事はO先生から同う約束なので」と言って、一週間後にO先生のところへ行った。「手術なんかはしたくない」って言ったら、「水の袋はどうってことないですから、ほっとけばいいんです」って。

和田 そんなヘンなことって、あるんですね。

司会 そりゃ、コワイ。たまんないな。

林 それで、ずっとそのまんま。O先生は、私の腎臓が盂の形をしているのは生まれてつきじゃないかとおっしゃる。

和田 だから、一回だけの検査で、そんなこと言っちゃいけないんだ。

司会 それもやっぱり若い先生だったわけね。

林 そうです。

司会 若い医者は、何でも基準から外れてれば「切る」って言うのよ。

横山 今は一人の先生の判断では決めないんですよ?

和田 チームを組んでやるみたいですわね。

会議には教授も出て、みんなで検討する。

司会 ちょっと伺いたいんだけど、それで、その若い医者は納得したんですか?

林 わからないんです。

それから私、薬の副作用かなんかで、膝の具合が悪くなっちゃった。座れなくなっ

てから、十五、六年経ちます。



倉持和子さん

痛みの軽減した 現代医療

和田 横山さんは、現在はもう抗ガン剤は使ってらっしゃらない?

横山 使いません。同じ子宮の手術なさった方でも、コバルトをかけてる人、退院後カプセルで抗ガン剤を飲んでいる人とか、ガンのできた場所によって治療の仕方が違うみたいですわね。

和田 薬もいろんな種類があるから。

横山 症状によっても違うし、担当の先生の考え方もありますね。私は、自分で「必要がない」と判断しました。

司会 入院中の抗ガン剤は副作用がなかった?

横山 ええ。「あなたのようにスムーズにいった人は少ないですよ」とは言われたんですけど、私よりずっと先をいく方が同じ病室にいらして、いろいろ教えてくださったんです。

和田 病気の先輩がいたわけですか。

横山 そうです。

このごろ検査技術が発達していますか

ら、自覚症状なしで来てらっしゃる方が結構多いんですね。私が入院したときも、友だちが「私もどこかへ行って検査してこよう」って、検査を受けたら子宮頸ガンで、「早期発見で、あんたのおかげだわ」と言っていました。

和田 私がガミガミ言って、あなたが胃の検査を受けたことがあったじゃない。

司会 あれは和田さんに言われたから受けたんじゃないくて、本当に胃が痛かったから受けたの。私、検査も手術もしないでガンになったら、すぐ死んじゃう……。とか言って、駄目な人間なんだけど。

倉持 実際になっちゃうとね、なかなかそうはいかないみたいですよ。

うちのママがそうだったの。昔、胃カメラを飲んで、昔の胃カメラってすごく太くて、地獄の苦しみだったでしょ。手術も昔は痛かった。この五年ぐらい前から麻酔がすごくよくなって、以前よりずっと痛くなくなってきましたけど。

最後は、「いくら死ぬんでもこのままじゃ死ねない。ナントカしてもらわない」と言うくらい、通過障害で苦しんだ。

食べ物を飲み下せないんです。「やっぱり、このまんまじゃ死ねない」って、なるみたいですよ、人間て。

和田 そりゃ、そうだ。

横山 昔、私は帝王切開をしたんですけど、「痛い」って言うと、「さっき痛み止めの注射をしたから、あと何時間ガマンしなさい」って感じだったんです。

今は、脊髄に細いチューブを入れて自動的に痛み止めが入りますから、全然痛くない。

倉持 でも、早期発見もいいけれど、いろいろ考えはじめると、何かノイローゼになりそうですね。

胃だって、内側はカメラで見えるけれども、見えない外側はどうなのか。脾臓はどうか、子宮の検診はあっても卵巣の検診はないじゃないか、とか……。

付け届け

倉持 話は全然違いますけど、入院するとお礼にお金を渡すところがありますですよ。なさいます？

損保年金のごあんない

私達のこれから先は
自助努力ばかり強いられそうな予感です。
今からでも間に合うつなぎ年金は
6年積んで5年で戻る、その名も
「東京海上^{ロクゴ}65プラン」です。
積立部分の運用利回りは3.75%です。
詳しくは、お問い合わせ下さい。



■ 親切・丁寧・シツコクない、わいふ指定代理店杉本保険事務所です ☎ 03-3260-4771

和田 快気祝いっていうことで、(夫が)退院するときに少しお礼をあげてきた。

倉持 いろんな医者に会ったけど、一人だけ突き返してきた人がいました。最後のホスピス病棟で、「これをあげるから人よりよくしてくれ、って感じがして僕は嫌なんだ。賄賂だと思う」って。初めてでしたね、そういう医者。

司会 でも最後に、すべてが済んだときに渡すんだったら賄賂じゃないんじゃないかしら？

和田 金額にもよるんじゃない？ 受け取るのが慣例になってる国立病院があるらしい、噂では。

林 私の知っているH工業の息子さんが心臓の手術をするとき——もう二十年近く前の話です——「あなた、いくら包むの？」って聞いたたら、「三十万、包む」って。

和田 今の金額だったら、五倍じゃきかないわね。

司会 二百万ぐらいの感じね。

和田 戦前は健康保険がなかったんで、貧乏人は医者にかかれなかったんですよ。医者は、貧乏人に対してはあまり金を取らな



和田副編集長

いで診療して、金持ちからうんと取る。社会的地位があってお金を持っている人は相応な金額を出すというような慣習があったんで、その名残でみんなが金持ちの真似をやりだした。で、こんなことになったんじゃないかと思うんですがね。

林 田舎の場合は、お野菜なんか持って行って、それで終わり。盆暮に、お金ができたときに精算する。

今、個人の病院経営って大変なんですってね。主人はよく病院を変わるんですけど、いま通っているところは「赤髭先生」的で、銀行の取引先でも最悪なんですっ

て、経営状態が。主人は「経営をやり直したほうがいいんじゃないか。僕みたいな者からは一年に五十万とか百万とか入会金を取って、そのかわり、いつでも自由に診てもらえる。そういう制度に変えたほうがいいんじゃないか」と言っていました。

和田 なんか、そういうの会員制で始まってるみたいですよ。

司会 最後に、本当にいいお医者さまとの出会いとか、あるいは非常に不愉快な思いをしたとか、おありになれば聞かせていただきたいんだけど。

これ、やっぱり、医療技術が大規模化していくと、医者個人の善し悪しよりもむしろ病院の、組織の問題が浮上してくるのかね。

医者役割

和田 うちの亭主が、ここんとこ五カ月も入院してたんだけど、最初にかかった内科の先生がすごくいい方で、その人が病果を見つけてくれた。非常によかった。ところが外科に移ったら、三十代と思われる医者

がグループでやったんだけど、どうもはっきりしなかったんです。

ただ診断は教授も加わって大勢でやりますから、それが間違っていたとは思わなかったけれども、検査結果を読み取る力があつたのかなかったのか、いまだにわからない。だって、お腹を切ってみたら、最初の予想と二度とも違ったわけですよ。

林 うちの亭主もそういう経験があります。「お腹が痛い」というので盲腸じゃないかと、K病院へ入院したんです。執刀した若い外科医が、翌日ガーゼに包んで持ってきた盲腸を見たら、ヒラメのお刺身みたいにきれいで全然化膿していませんですよ。あれは完全にミスよね。お腹を切るときも横に切らないで、縦に切っちゃって、長い間跡が残っていました。

まあ、体力のある若い先生じゃないと、夜の急患の執刀なんか無理なのかも知れませんけど。

倉持 祖母の人工肛門の手術のときの話ですけど、左につけるのに右にも切った傷があるんですよ。

町の小さな病院で、夜七時ごろ、母や叔

母が「これは何だ？」と事情を聞きに行ったら、「こんな時間に呼びに来て、何だ！ 医者だって人間なんだから、疲れているときは寝たいのに！」って、怒った。右側は「ガンが転移しているんじゃないかと思って切ってみた」って言うんですよ。

みんなは、「あれは絶対に失敗だね」って。訴えもしなかったけど、医者から手術費用の請求もなかったです。

和田 やっぱり、医者も当たり外れよ。

倉持 さっきのT大病院ですけど、母が再発したときに、「そういう人を入れると、手術できる患者さんが待たされるんですよ」と、こういう言い方をされて、非常にショックだった。

母の命と、これから初めて手術を受ける人の命が天秤にかけられてる感じがした。

最後は脅し文句じゃないけど、いつでもよそを紹介してあげるからこれ以上食い下がるなって感じで、土壇場で切られちゃう。

和田 そういう病院なんですね、役割が。

倉持 だけど私は、治らない病気に對して医者がどう向き合ってくれるか、そこに一番関心がある。人間だから、死への恐怖が

あったりして、やっぱし嫌なことからは逃げ出したいと思うんですよ。でも、患者にそれが見えるのが一番酷だと思う。告知をするにしても、患者と互角にやっていたりだけの度胸のすわった医者がほしい。

和田 いや、難しいですよねえ、それに応える医者なんて。いったい、心のケアが医者の役目かどうかとも難しい。昔だったら、その役目は宗教家でしょう。

司会 どう向き合っていくか、どんな言葉を使うか、ということに対する教育が全然ないですね。



田中編集長

倉持 彼らの仕事は治すだけじゃないんですよ。だって、現に治らない病気があるんですから。

人間破壊につながる危険性

司会 そろそろ時間なので、みなさん、言い残したことを。

横山 お医者さんも世間が思うほどいい職業じゃないと思いました。五月の連休のときに若い先生は、車の上にサーフボードを乗っけて、海へ行く用意をして、一生懸命働いていらした。自分でも、「もう少しいい生活ができるかと思ったらアテが外れた」って。

和田 “わいふ”の投稿にあったじゃないですか。誕生日のお祝いをしているときや、遊園地ででも、どこでもポケベルが鳴って呼び出される医者話。

横山 お医者さんは、帰宅後はお風呂へ入って全部洗い流してからじゃないと赤ちゃんを抱けないだろうと思います。感染の危険もあるし、いろんな病気がありますからね。世間のお嬢さんたちは懂れるけ

ど、医者と暮らすって、そんないいことじゃないですよ。

林 大変だと思います。それでも命を救う使命感に燃えていらっしゃる先生というのは、私は尊敬しますね。だけど、自分の子どもや身内がそういう職業に就くのは気の毒というか、避けたい。

倉持 中国では文化大革命のころ、学生は農村で三年間暮らす義務があつて、そこで推薦を受けないと医大の受験資格がもらえなかった。日本は、頭がいいと医者になってもさせようかとか、エリートの上昇に医者がある。すごく脆弱って感じがする。

人間と向き合う仕事というのは、もっと自分を太くするようないろんな体験が必要だけど、今はそういう場がないでしょ。病院へ入っちゃうと、家庭生活も犠牲にして働く。もっと自分の人間性を取り戻してほしい。

和田 とにかく今の世の中は、医者ばかりでなく、どんな職業でも専門化していつているんですよ。医療でも高度な技術が開発されて、いろいろ助かるんだけれど、そのかわり全体をトータルにみるような医療は

失われていく。非常に難しい時代なんですね。

司会 でも、医者は命に向き合う商売なんだから、いかに専門化しようとも、倉持さんのおっしゃったような原点はおさえなきゃいけない。やっぱり、すべての医者にそれを望みたい。

ただ医者って、一度なってしまうと忙しさもさることながら、「先生」と呼ばれる職業になるわけですから、たいいていバカになっちゃう。非常に人間的なお医者も少数いらっしゃるけれども、老人ホームの入居者で、手に負えないのは医者と大学教授だっていうじゃない。スゴイんだって、ワガママで。

やっぱりね、医学教育の最初のスタートラインで、学校の教師もそうだけれど、「あなたの職業は、とんでもない人間破壊をするかも知れませんが」ってのを、教えるべきなのよ。いいことばっかりすると思っちゃいけない。そういう視野がなきゃ駄目。

まとめ・富前 和

(次回の時事放談のお知らせは、一四九ページをごらんください)

マイジョブ・マイホビー

犬のように働け？

就職活動

大阪府●ひかり

去年私は、一歳と二歳の子ども達を保育園に預けて、働きに出る決心をした。

上の子が一歳三カ月の時に下の子が生ま

れ、それから一月もしないうちに、大阪への引っ越しが決まった。大阪では親しく行きてできる友人もなく、夫は家に寝て帰るだけ、一日中大人と口を利くこともほとんどない。子どものミルクやおむつ、食事の世話、寝かしつけ等の育児や家事に追い立てられ、息つく間もなく毎日が終わる。本はおろか新聞さえ読む時間のない生活のなかでは、自分を見失いそうな気がして私はひどく焦っていた。

もともと専業主婦になるつもりは毛頭なく、仕事と家庭に半々のウエイトを置く暮らしを望んで結婚したので、「こんなはずじゃなかった」という思いを拭えない。

幼い子どもを、保育園に預けることは是非については大いに迷った。また子供二人分の保育料はかなり高額になり、私が働いたとしてもその収入は家計にプラスにはならない。それでも社会に出たい、二十四時間子どもの世話に追われて窒息しそうな状況を変えたい、という気持ちはどうしても捨てられず、どこかで不都合が生じたら無理をしないでやめればよいから、とりあえず頑張ってみよう、と決断した。

幸い、子ども達は預け始めてひと月もしないうちに保育園にすっかりなじみ、部屋の前まで連れていけば私の手を振りきって中へ駆け込んでいくようになった。私は胸をなで下ろし、就職活動を始めた。

それまで私は、就職活動というものを本格的にしたことがなかった。大学を卒業後も大手企業に勤めようとはしなかったし、一社、求人広告等を見て応募すると、すぐに採用がきまったので、何社も面接に回る、という経験がなかった。

ところが今回は、まるで勝手が違った。まず年齢制限にひっかかる。つぎに子どもの保育園の時間と、通勤にかかる時間等を考慮すると、勤務可能な時間帯や勤務地が限られてくる。したがって自分の希望の職種など、とても選ぶ余地はなかった。応募可能な会社すべてに職種を問わず履歴書を書き送り、わずかに一、二の社から面接通知を受けたただけだった。この段階で、私はかなりの挫折感を味わった。

最終的に、ある一社から採用の通知を受けた時はほっとした。応募しては拒絶される、ということの繰り返しに疲れていた

し、保育園に子どもを預けるためには、預け始めてからひと月以内に仕事を決める必要があり、その期限がもう間近に迫っていたからだ。

女ばかりの会社

就職が決まったのは、小さなコンピュータのサポート会社だった。私と一、二歳しか年の違わない女性が経営しており、しかも彼女は三カ月前に子どもを産んだばかりだった。「小さな子どもを育てながら仕事



をしていくのは、本当に大変です。うちでは何日も徹夜が続くこともあるし、子どもが『お母さん、おしごとやめて!』と泣いたりすることもあります。相当の覚悟が必要です、やれますか」

最終面接の時、自らが七歳の子供がいるという副社長がそう尋ねた。私は自信をもって、「大丈夫です」と答えた。私はコンピュータについては全くの素人で、何もかも一から勉強しなくてはならない。したがって給料もとても安い。最初は経済的自

立など到底無理だろう。しかし自分の能力とやる気には結構自信を持っていた、近い将来、会社にとってなくてはならない戦力になれるだろうと思っていた。

しかし働き始めると、毎日が挫折の連続だった。

口のききかたが悪い、まるで主婦だ、ここは家庭じゃなくて会社なんだということがわかっていない、と二十歳の社員に怒鳴られる。電話の応対、事務処理の仕方、コンピュータの操作、ありとあらゆることで怒られてばかりだった。女性ばかりの会社だったせい、皆、歯に衣着せぬもの言い方をする。男性以上に乱暴かもしれない。そういう雰囲気になじめずに、入社して半月で、私と同期入社の人たちが半分くらい辞めていった。

けれど私は踏ん張った。まるで、おまえなんかもう辞めろ、と言われんばかりの毎日だったけれど、その言い方はともかく、内容についてもっともだと思われるものについては、必ず克服してみせると誓ったのだ。無能呼ばわりされて、そのまま辞めるのはプライドが許さなかった。

一回りも年下の女性から皮肉をたっぷり言われることよりも、名前を呼び捨てにして怒鳴られることよりも、「こんなこともまともにできない自分」が実にショックだった。

元々抱いていた自信が全く根拠のないものだったのか、それとも家事と育児に追われていた三年ほどの間に、自分の頭が急速に老化してしまったのか。そんなはずはない、自分は言われるほど馬鹿ではないはずだ、と強く思った。

夜も仕事のことを夢に見て、体重も三キロほど落ちたけれど、入社して一月半ほどすると、怒鳴られる回数はぐんと減った。そしてただの雑用から解放され、専門的な仕事を与えられるようになった。いつの間にか、小さなチームを組んで行なう仕事、事実上の責任者になっていた。

残業とホ力弁

それから、また次の試練だった。まず子供が頻繁に病気になる。責任のない、誰にでもできる雑務をしていたころは、割合気楽に休むことができた。社長も

副社長も子供がいるから、一、二歳の子供は保育園に入れると、どんなに頻繁に熱を出すか、ということをよく知っていて、休めばよい、と言ってくれた。しかし責任が増えてくると、そうはいかない。私が休むことで仕事が滞るようになると、子供を連れて出社するように言われた。小さな子供は熱があっても、よほどの重症でないかぎりおとなしく寝ていたりはいしない。会社に連れていっても、私や他の社員の仕事の邪魔をするし、元々体調が悪いのでぐずってばかりいる。仕事はいつこうにはかどらない。それに、病気の子供を、タバコの煙の立ちこめるオフィスに連れていって、機嫌をとるためににお菓子ばかり食べさせる、というのは、母親としていやなことだった。そして、仕事の量と責任がぐんと増えて、それに伴うプレッシャーも相当なものになった。小さな企業が生き残るためにはやむを得ないことなのだろうが、設備投資と人件費を最小限に押さえて、コストダウンをはかるため、そのしわ寄せは、どうしても、一人一人の過重労働となって現われる。

自費出版は “わいふ”へどうぞ！

“わいふ”編集部では自費出版の制作をしています。本をお出しになりたい方はぜひご利用ください。

自分史、回想録、旅行記、童話、詩集、歌集、句集、同人雑誌、絵本、コミックまで、何でも作れます。

費用はモノによりいろいろ違いますが、市価よりは確実に安いです。ご事情を伺いご相談に応じますので、ぜひお問い合わせください。イラストも用意できますし、お書きになれる方のために、聞き書きのまとめもいたします。

人生の記念にご計画なさってはいかがでしょうか。

私のような素人に近いパートにまで、中間管理職のような仕事が回ってくる。

若い女性社員ばかりの会社なのに、皆、連日、九時、十時まで働く。いつも誰かが、過労のため体調を崩して休んでいた。

社長は生後四、五カ月の赤ちゃんを、コピー用紙の空き箱に入れて足下に置き、夜通し仕事をしていた。社用で朝から出張しなければならぬときは、子供を一人、オフィスに置き去りにしていく。出社した誰かが面倒をみるだろう、というわけだ。夕食はいつも外食かほか弁で、赤ちゃんにも離乳食ではなく、ほか弁を食べさせてい

た。

副社長は帰宅時間が夜の十時をまわり、小学生の一人娘が、電気もつけないで一人待っている、という日が続き、とうとう娘を実家に預けっぱなしにしてしまった。

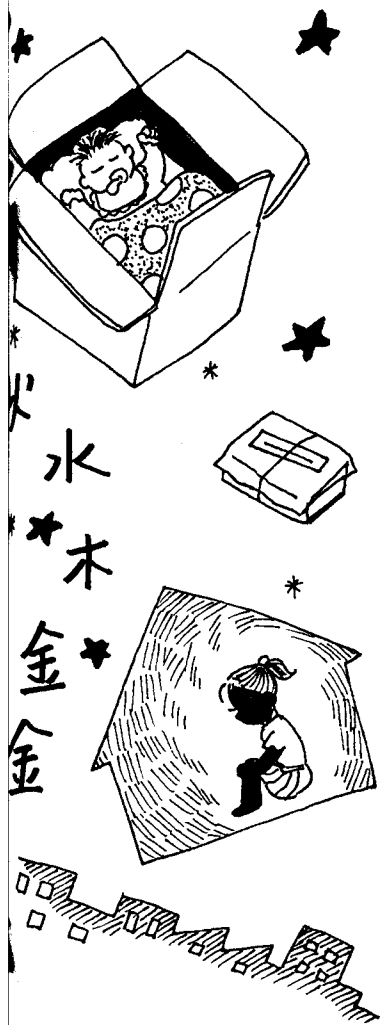
私も、土曜の休みは返上して働かなければならなくなった。五時にいったん子供を迎えに行って、帰宅して夕食を作り、食べさせ、お風呂に入れて寝かしつけ、翌日の用意をととのえてから、夫の帰りを待って夜中にもう一度出社する、といったことも度重なった。それでもノルマをこなしきれず、一度ならず怒鳴られた。

「旦那や子供は放っておいても、毎日徹夜してでも、仕事の納期は守るんや」

そう言われたとき、私にはできない、と思った。

どんな分野の仕事でも、きつと社長や副社長のように、がむしゃらに突き進む時期があつて初めて、一人前になれるのだろうと思う。女ばかりで立ち上げて五年足らずの会社を、簡単にはつぶれない、安定した会社として軌道に乗せるには、あんな風にわき目もふらずに働く時期が必要なのだろう。

しかし私は、この仕事にそこまでの情熱





を燃やすことはできないと思った。もともと、「やりたい仕事」として始めたのではなく、「応募可能な中では、おもしろそうな仕事」として、始めたにすぎない。経済的自立の達成を目指してはいたが、毎日睡眠三時間で、夫や子供に不自由な思いをさせ、気兼ねをしながら、やり抜くほどの気持ちは持てなかった。家族や心のゆとりを犠牲にしてまで、続けるほどの意義は見いだせなかった。

とりあえず、当座の仕事を一通り完成させたところで、私は退職した。春に入社してから、七カ月後だった。その二カ月後に

は、同期入社した人達が皆、辞めてしまった。

やっぱり挫折感か

辞めた面々が一度だけ集まったとき、あの社長や副社長のような生き方は、自分たちはしたくない、ということでは若い皆の意見は一致した。だがあの壁を乗り越えられなかった、という挫折感が、私にはどうしてもつきまとう。もうすこし頑張れたかもしれないと、ときどき思うのだ。社会に通用する能力なり技術なりを身につけるには、他のすべてを犠牲にしても没頭する一時期、というものが必要なのだ。ただ、そ

うすべき対象はこの仕事ではない、と感じて辞めたのだが、「では他の何ならそれができるか」と言う声が、皮肉めいて胸にこだまする。そして結婚前の若い時期に、一番がむしゃらになれる状況の整っていた頃に、それをしなかったこと、自分の足場を作っておかなかったことが悔やまれる。

だからといって、これから先をあきらめて暮らすなど到底できない。精神的自立、生活的自立、経済的自立の達成のため、次なる道を模索している毎日だ。「私だって、やればできるんだ」といった言い訳を、これ以上しないために。

片側顔面痙攣 と つきあった日々

千葉県印旛郡
あつこ
山田淳子 (43歳)

異常な感じ

平成三年秋。

顔の左半分が自分の意志と関係なく、動くことに気づく。どうしたんだろう。また、いつもの寝不足かな？ 疲れているのかな、と考えようとした。

そのころ、かかわっていたグループで非常にストレスを感じる状態にあった私は、原因は当然そこにあるんだろうと思っていた。会議の場所にいく途中、足首から下だけに蕁麻疹が決まって出た時期だった。そして会議中ずっと……。不思議に会議が終わると症状は消えていた。

そんな状態だったから、一時的なただの疲れだけで出る症状ではないのではないか、と思い始めたのは、だいがたってからである。

いろんな医者に出会うたびに聞いてみた。みんな「疲れているんじゃない」と判で押したような診断。薬も出してくれない。

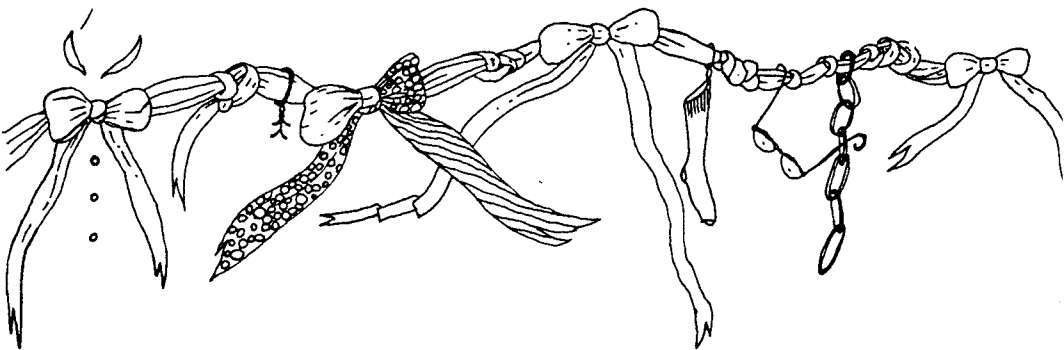
しかし、症状はどんどんひどくなる。だんだん人前に出るのが億劫になりだした。どう言い訳していいのかもわからない。自分でも理解できていないのに。そのころ、PTAなどで会議にすることが多く、ハンカチをあてたりして隠すのに苦心していた。会議のあとは決まって頭痛に悩まされ、家に帰っても横になって一眠りしないと台所に立てないほどの激痛におそわれるようになっていった。

平成五年二月。人間ドックを受診する。

それでも、顔のことを訴えるが、相手にしてもらえない。

平成五年四月。

あまりの頭痛から、脳の異常を心配した友人が「頼むから行ってくれ」といつてある病院を紹介してくれた。脳神経外科など敷居が高いと思いつながらおそるおそる受診。いただいた薬で、一週間後の再診のときにはうそのように頭が軽く



なった。そこで、私にとっては恒例になっていた、顔のことを話題にして、「ここでは診ていただけますか？ どこに行けばいいんでしょう？」と尋ねてみる。すると、「ああ、ここに専門の先生がおられますよ」の返事。耳を疑った。やっとたどりついた、話の通じるところへ。
次の受診日の待ち遠しかったこと。

専門医にめぐり合う

そしてK先生との対面。

病氣について書かれたプリントを手にして説明を受けた。その間、長年のもやが晴れていく思いで半ばウキウキさせていた私。

が、治療のところで「目が点」になってしまった。そこにはたった一言（開頭手術）としか書かれていない。

「とにかく診断をはっきりさせましょう」とのこと、予想をたてていくつかの検査日程を予定に入れた。

そして、すべての検査の結果が出て――。

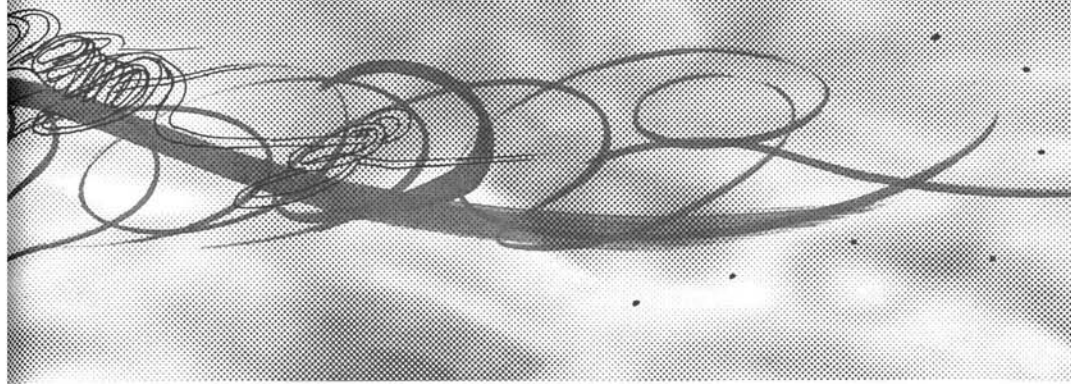
診断は「片側顔面痙攣」。

私はこわごわながらも、即、手術することを決心した。それほど、この症状と付き合うことが苦痛となっていたから。このことによって閉じこもりとは思わないまでも、自分らしく生きることの障害であり、それをとり除く方法がありながら手をうたないことなど考えられなかった。

私のようにわけがわからずにこの症状とつきあっている人が多いらしいので参考までに少し触れてみる。

◆その症状というのは……。

顔の片側だけ、私の場合は左だったが右の人もあるらしい。四六時中、眠って



いるときも関係なく二十四時間勝手に動くのである。はじめは目の周りからだった。だから寝不足だろうと思ひ込んでしまったのだが。寝不足や疲れの場合の目の周りの痙攣は片側に限らず両側に症状が出るそうである。

そして、これは目の周囲だけではなく、頬の筋肉から、ひどくなると口元までひきつれる。普通の顔をしているつもりでも、目が全開していない。

四十〜六十歳代の女性に多く、その七割が左側に症状が出ることが多い。

また、当時ひどかった頭痛は、このことが直接原因というわけではなく二次的に起こったもの。つまり、人と接するときに大変な神経を使うことから起こるらしい。

◆原因は……。

脳の中の顔面神経が脳幹から出たところで何らかの形で血管が神経を圧迫して、意志と関係なく顔の筋肉を動かす。

◆治療は……。

開頭手術によって、圧迫している血管を神経から離す。

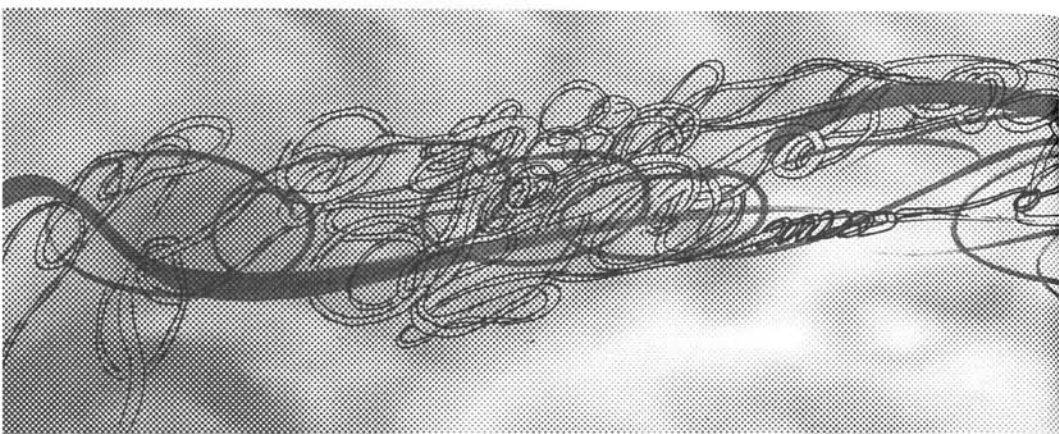
一回目の手術

生まれてはじめての手術が脳外科手術というところでもないことを決意した私にとって、自分の心構えより、周囲の人々の心模様は大変興味深いものがあった。

開頭するという非日常的な事態に対して、ひたすらオロオロする人、直前までやめるよう説得にあたる人、自分の嘆きを手あたり次第訴える人。

そして、手術。

怖さより、原因がわかって、それがとり除かれる喜びのほうが勝っていた。が、術後も症状は消えない。だいが軽くなった気はしたが、完全に消えたわけではなかった。神経の回復期間が大体三カ月ということで様子をみることになる。



しかし、三カ月たっても六カ月たってもあまり変わらず。もちろん、術前に全く改善しない人も何パーセントかいることは聞いていた。その点、私の場合は全快こそしなかったが、軽快に入ると思う。

また、圧迫していた血管が太い動脈だったということもあって弾力が強くて、離しても戻る力が強いということも聞いていた。

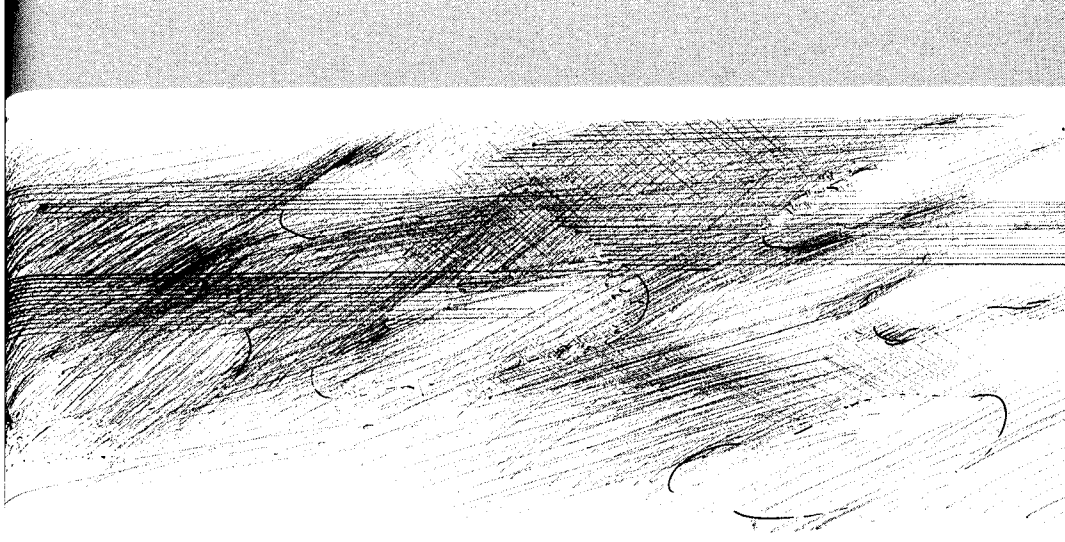
六カ月過ぎたところから、二回目の手術の話が出てきた。その翌年つまり平成六年は息子が受験生ということもあって予定に入れなかった。受験生だからといって私が何をするということでもないのだが、一回目の手術後ひどい頭痛で頭が上からなくて一カ月間寝て暮らし、友人たちに夕食を運んでもらう、ということをしたので、手術の日を確保すればいいというものではなかった。

少しずつ、ほんの少しずつ症状の出方がひどくなっていった。といっても以前ほどではない。以前は、人から見えていても声をかけるのをはばかりれるほどだったらしい。しかし、一回目の手術の後のほうが声をかけられることが多くなった。

目が片方つぶっているように見えることがあるので「目、どうしたの？」が一番多い。頬がピクピク動くので、神経質と思われるのが一番つらかった。実際、ピクピクによって相当神経質になっていたとは思うが。

二回目で成功

そして、今年六月に二回目の手術を実施。二回目は自分でも怖い。脳外科の先生の腕は信じているものの、まわりから言われるまでもなく、どんな事故が起こらないとも限らない。現在、直接命にかかわるほどでもなく、「もういいじゃない」とも言われた。一番反対していたのは夫。本人ではなく、一番身近にいる者の恐怖とでもいおうか。もう勘弁してくれということだったらしい。



しかし、「私の人生、これではやっぱりいや」と説得して二回目にはぞんだ。
結果は――。

直後から全快。まったく出なくなった。

退院してからも、一回目のような頭痛に悩まされることもなく、かえて今まで以上かと思える元気さでこの夏過ごしている。といっても仕事を休み、久し振りの専業主婦でいるからかも知れない。

この病気は脳外科では比較的ポピュラーなものらしいが、医師でも知っている人が少なく、脳外科にたどりつくまで、四、五年かかるそうである。その間、眼科や耳鼻科などで原因がわからぬまま、通院しているケースが多いと聞く。それからすると、私は本当にラッキーだったと思う。ただ、脳外科にたどりついて理解していない場合もあると聞く。理解している先生から、この病気のことを分かっている近くの先生を紹介してもらうのが近道なようである。夫の友人が同じような症状で大きな大学病院の脳外科を受診したそうだが、いろんな検査をしても元々この病気について理解していなかったようで、「疲れ」としてそのまま帰されてしまった。

手術に踏みきれない人も当然いる。

また、脳外科の場合一回目の手術は無理をしないで、二回目で治療をめざすということもあるようだ。

入院中のこと、周辺で支えてくれた家族、友人のネットワークの頼もしさなど、書ききれないことはまたの機会に譲りたい。

感謝をこめて。

周囲の理解を得られないまま、悩める同じ症状の方に少しでもお役にたてればと思う。

おすすめの1冊

青春の長い道

満蒙開拓青少年義勇軍の名のもとに

福井秀雄 著

栃木県宇都宮市 大兼孝子



縁があって仕事でこの本の校正をし、一足先に読ませていただきました。明るい温かい本でした。たまたま春のオウム

の騒ぎの最中で、私自身、同じ人間であることに自信をなくしたような暗さをひきずっていたとき、この本を読み進むことで元気づけられました。

「わいふ」に連載中の「シベリアの青春」の原作です。

伝えられる苛酷な体験の中でも損なわれない著者の明るさ、決して失われない素朴な人間関係の温もり。それは著者の意図とは全く関係がなかったかもしれないが、私にとってはオウムの闇にも対

抗できる人間性の証明として、大きな力となりました。

温められた心に著者の経験が素直に入ってきます。義勇軍、開拓団、関東軍、抑留、飢、満州、シベリア、モンゴル、孤児、引き揚げ、アムール河、ナホトカ、舞鶴。そういう言葉が私の中から感情をまよって浮かんでくるようになりました。他の本を読んでもういぶん理解できるようになったのです。

「青春の長い道」は、普通の子の話から始まり、普通の人に戻って終わります（その間の青春時代こそが長い戦争に重なる）。そこが私にとってはわかりやす

かったのです。中学生と高校生の我が子を物差しにしながら、「この子が義勇軍に入るのか」「この歳で軍靴をはき古兵殿の世話をしたか」と思うと、戦争が切り取られた時間の中のできごとではなくなってきます。帰国後の社会復帰の厳しさも改めて示された現実でした。

連載を批判するものではありませんが、抜粋と本一冊とでは、切花と鉢植くらいの違いがあります。できれば単行本も読むと、なお感じるところは多いでしょう。気がつけば義勇軍出身の方だってたくさんいるんですよ。

教育史料出版会 二〇〇〇円

見張り塔からずっと

重松 清 著

自分たちのすむ家を手に入れる。当たり前のようなことが、いつからこの日本では必要以上に大変になってしまったのだろうか。それにかかわる悲哀と鬱屈を通奏低音にして三編の物語が展開されていく。

東京郊外のニュータウン、パブルによる価格の下落が住人たちの間にもたらす波紋を描いた「カラス」。子供を失くした夫婦の「扉を開けて」。そして「陽だまりの猫」。

二十歳のみどりさんが夫からいつも言われているのが「わからないんだよ、おまえには」。赤ん坊も、そして小さいながら持ち家もあって、「たぶん」幸せな

千葉県柏市 河野道子（33歳）

んだらうとぼんやり思いながらも本当の答えはわからない。妻としても嫁としても認めてもらえない、そんな彼女が土壇場で一大決心をするのだが……。

小説というより、まるで投稿文でも読んでいるかのようなリアリティがある。特に乳幼児とその若い母親の生態に関しては。男性にしては非常に稀な特質だと思う。作者は私と同年、やはり幼児の親だと知って、なるほど日常生活の何気ないディテールを作品に生かしているのかと納得した。

三人のヒロインたちは、自分の家（とその周辺）の外には意識を及ばさない。徒党を組んで獲物を探し、死者の思い出



に沈潜し、マンガでも読むように自分の人生を傍観する。彼女たちがもう少し自覚した女だったなら、結末も違ったものになったのではなからうか。そして作者が女性であったなら……。とりわけへみどりさんへの「人生最大の賭け」の結果は異なっていたことだろう。

現実の女たちはもっとしたたかだ。でも物語の中の友美も佐和子もみどりも、ひょっとしたら近所の奥さんであり、私やあなたのもう一つの姿なのかも知れない。

角川書店 一四〇〇円

農文協健康双書

もつと自由に母乳育児

マニュアルより赤ちゃんとの「対話」を

山西みな子 著

東京都町田市 松井くみこ

母乳の大切さが見直されてきている。

「初乳は必ず飲ませましょう」とか、「母乳の子は風邪をひきにくい」などなど。粉ミルクが当たり前だった時代の揺り返しのなかも知れないが、少し過敏になっ
てしまっているような気がする。

私も一人目を出産し、退院日の前日になっても母乳が出なかった時は、初めての子育ての心細さもあってパニック状態になってしまった。赤ちゃんがうまく飲んでくれない、よくぐずるなど、子育て中は、お母さんを追いつめてしまうようなことが次から次と起こるものだ。

育児書や専門家のアドバイスに、どうもしっくりこないな、と思っている人におすすめのがこの本。子育てにも個性

があること、赤ちゃんや自分の体に心地

よいやり方に、もつと自信を持ていいことに気づかされ、すつと気が楽になる。

サブタイトルにあるように、赤ちゃんが教えてくれることを見逃さないことが、まず大切だという。赤ちゃんの飲み方でわかるおっぱいの状態や、母親の食生活が赤ちゃんの動き方にどのように影響するかなど、詳しく説明してある。リラックスして、体が本当に欲しがっているものをよく観察して摂る、というのは、育児中ならずとも生活の基本にあることであろう。

今、二人目を母乳で育てているが、ちゃんと出て、飲んでくれることがあったり前のように感じて、子供の反応など見



過ごしていたことが多い。また、ちょっといいかげんになっていた我が家の食生活を見直すきっかけにもなった。日本の伝統的な食生活をすすめているのだが、夫は「三十歳を過ぎたら和食覚」を提唱しているので、強い味方を得たみたいだ。

母乳育児を続ける上で、よくある母子のトラブルの対処方法や、周囲と意見が違ふ時の折り合いのつけ方などものっており、経験から生まれた手ごたえが感じられる。「我が家なりの子育て」でいいのよ、と背中をポンとたたいてくれるような本。行き詰まった時は試してみる価値がある一冊だ。

農山漁村文化協会 一三〇〇円

えいごゆめおいびとたち

英語夢追い人たち 2

語学喫茶物語



COME AND SEE MY FRIENDS AND I!

兵庫県川西市

タケ タニ
竹谷 セツ

誇り高いアメリカ人

「アメリカン」には、日本人ばかりでなく、外国人も多く訪れた。国籍はさまざまで、一人一人につきない思い出がある。みな客という立場で来るので、語学を習うのとは違う付き合いができる。その中でも一人を選ぶとすれば、今でも付き合いが続いているダニーという事になるうか。

ダニーは栗色の縮れ毛頭をした三十代のアメリカ人だ。「アメリカン」にダニーが来始めたのは、寂しかったからだろう。「アメリカン」仲間が自宅で開くパーティーにもよく出席した。ダニーは、いつも悲しそうな顔をしていた。冗談を言っても、口の端を歪めるだけで笑わなかった。

ダニーはアメリカで留学生として来ていた日本女性に出会い、結婚した。若い日の二人を話すダニーは、純白なしあわせがあったことを思い出すかのようだ。「他の女性にちらっと目が行ったとして

も、僕は首をねじまげ、彼女だけを愛した」

ダニーはそこそこ、歯の技工士として自分の仕事場を構え、二人の助手を使っていたが、細かい仕事で目を痛めた。その後、大手の運送会社に勤め、マネージャーに昇進した。一方、奥さんはアメリカ社会に適応できず、日本に帰りがった。ダニーは職を捨て、日本に一緒に来た。ところが日本ではアメリカナイズされた言動が企業に受け入れられず、彼女はまたアメリカに帰りがった。おまけに、自分の夫がただの英語教師に過ぎない事に不満を持った。ダニーは英語を教えるという仕事がおもしろくなり、また収入にも満足し始めていたところだった。

「君だけ帰って六カ月間、様子を見てごらん。その間、仕送りしてあげるから。もし向こうで調子がよかったら、僕も後から行くよ」

と、自分は残った。三カ月後、彼女は突然ダニーに離縁状を送ってきた。その後、彼女はアルコール中毒になり、やり

直すためにオーストラリアへ渡り、恋人もできた。

「彼女は僕にコレクトコールで、電話して来る。その代金が三百ドルにもなった事がある。」

去年、彼女は精神的におかしくなつて、僕にオーストラリアに来るように言ってきた。それで自分の精神状態をぐちぐち言うから、いやになって、それ以外の事、たとえば天気の話なんか話そうよと言ったんだ。彼女は僕の事を父親だと思っているが、僕は父親でなく夫だ。それ以来、彼女との縁は切った」

帰国した彼女は電話をかけてきたが、ダニーの決心は変わらない。

ダニーは農場を経営する、豊かとは言えないロシア系の家族に育った。

「父も母も死んだし、僕はまったく一人だ」

「淋しいでしょう?」

「淋しいって? とんでもない。自由を楽しんでよ」

そう言いながら、夏と冬には必ずアメリカに帰り、親戚めぐりをする。ダニー

が帰国するのは、アメリカ人としての自分を取り戻すのが必要だからであるように思われる。日本に長くいると、日本文化に同化されそうになる自分が怖いに違いない。

ダニーは、実に知識が豊富だ。経済、政治、その他何でも……。それも日米の考え方の違いを、はっきりつかんでいる。優秀な英語教師としてサラリーマンを教えるのには、そうでなくては務まらないのだろう。

日本人の生き方に付き合いながら、アメリカ人としての価値観とプライドを維持していくというのが、ダニーの葛藤を生みだし、自虐的になるというのも、わかる気がする。

「日本で生き延びることはただひとつ。日本女性と結婚することさ。ぼくみたい、独身で、八年も生き延びてる奴は、少ないよ」

「日本に来る外人たちは、一、二年で幻滅して、出ていくよ。残っているのは、僕みたいに、馬鹿なやつばかりさ」

日本の悪口ばかり言いながら、なぜ長

くいるのか、聞いてみた事がある。

「そうだなあ、まず、教えることが好きなんだ。アメリカに帰ったら、教える仕事はない」

英語が世界共通語になっている事で、英語を母国語とする人たちにとって、日本は天国なのだ。

ダニーも昼間は専門学校で教え、夜は企業でサラリーマンを相手に教えている。時間が許せば、個人レッスンもある。生活をできるかぎり切り詰めているのは、アメリカに帰った時のために貯金しているのだろう。

けれど、ダニーが日本に居残っているのは、生活のためだけでないようにも思われる。

「こんなふうには、ここでは日本の悪口ばかり言っているが、アメリカでは日本の弁護をしているんだよ」

ダニーと私は口を開けば、お互いのアメリカ的なところ、日本的なところのつきあいばかりしているが、感情的なげんかにはならない。

ダニーを知って、私は文化が人間に及

ぼす恐ろしさを知った気がする。ダニーは、日本人と一度は結婚した事によって、長く日本にいる事によって、日本の文化が人格の内側に入り込んでしまったのだ。日本の悪口を言うのは、日本に対する愛着の裏返しのように思われる。この事実は私にもいえて、長く英語をやっていると、英語の文化が自分に溶け込んでしまったのを感じる。

皮肉っぽい言葉で対応するダニーの男っぽい見かけの内側には、やさしく、まじめな人柄が隠されている。夜のビルのエレベーターで痴漢に遭った女性の現場に居合わせ、警察に付いていってあげたらしい。

「警察は、事件のことより、外人の僕の身元を尋問するんだ。日本人はレイプなんかは、ひた隠しにして、通りかかった人なんかも見ても見ぬふりをする」と、憤慨する。

何かと言えば、日本人は金のことしか考えないなどと人種差別に近い発言をするダニーであるが、その顔を見れば、とても優しい目をして笑っている。



「英字新聞を読む会」中央が講師のダニー、右手前が私

夢さんの結婚

四月から夢さんは阪大生となった。英語と論文の試験にパスして法学部の三年として学士入学したそうである。このニュースを聞いて、やられたという感じだった。

「弁護士にでもなるつもりなの、それとも外交官？」

と聞いても笑って答えてくれない。

「将来は女性学をやりたいわ」

「じゃあ、大学教授にでもなりたいわけ？」

「まあ、年とって、ビルの清掃をしたくないことは確かよ。好きな事をして生きていこう

と思ったら努力がいるわ」

その手は皿洗いのせいか荒れている。ほんの少しの時間があれば、カウンタに座り、その荒れた手で辞書をめくる。

学生の男の子が夢さんについて、こんな風に表現した。

「夢さんが来たら、みんなを元気にさせてくれる。夢さんは光り輝いてる人なんだ」

開店したころは朝十時から店を開けていた夢さんは、しばらくすると午後二時からにずらし、とうとう、土曜をのぞいて五時半からにしてしまった。昼間はほとんど客がいないので無理なのだが、開けているときにも、通訳の仕事や大学の試験とかで、バイトの女の子をやとうことも多くなった。

私は週に一回は、朝からせっせと掃除や洗濯を済まし、子供たちの夕食をテーブルに置いて、夕方、家を出た。家路に急ぐ人の波とは反対方向の電車に乗るのは、うしろめたい気がする。けれど昼間、子供の学校行事に出る以外には、ほとんど人と話すチャンスがない私にとっ

て、一週間に一回の「アメリカン」行きは唯一の気晴らしだった。

「アメリカン」へ向かう途中、夢さんに後ろから声をかけられる。

「ハロー、セツ」

と、道の真ん中でも自然に英語である。

夢さんは白いレースのミニスカートの黒い襟ぐりの広く開いたTシャツだ。

「あなたはあいかわらず、いつも海岸にいるよね。こんなかつこうで阪大に通っているわけ？」

夢さんは何を思い出したのか笑い出す。

「阪大であだなをつけられたの。ミス、ビーチってね」

さすが！私も阪大生も感じることは同じであることが証明された。この姿で構内をかっぱしているとなれば、彼女は有名にちがいない。ポニーテールに襟ぐりの広いTシャツ、ミニスカートで、地味でまじめな阪大生と教室にすわり、法律の講義を受けている姿が目につかぶ。

「ボーイフレンドできた？」

「助教授にすてきな人がいるわ、結婚し



てるけど」

夢さんは阪大に入った年、今年こそ結婚すると言っていた。その年も暮れ、また一年が過ぎ、私は夢さんに聞く。

「また今年も終わろうとしているけど、まだ結婚しないの？」

「二人、金持ちのアメリカ人を見つけたわ。でも私に結婚を申し込む人はびったりこないし、いいと思う人は、向こうがだめだし」

「夢さんほどの人でも断られることなんであるの？」

「そりゃあそうよ。人間て不思議なもので、テレパシーが働く。相手から好きだと思われると好きになるし、嫌いだと思うと、二人の間に目に見えない壁ができるのよ。みんなに一〇〇パーセント親切にする事は疲れるわ。私は七〇パーセントの人はひきつけられるけど、どうしても嫌いだという人も出てくる。人間は、まわりに集まる人全部に自分を好きにさせる事は不可能よ。まあ、そんなときは気にしないことよ」

へー、夢さんでも自分に惹きつけられ

る人が七割か。私だったらどのくらいだろうと考えてしまう。

「別に結婚しなくても、適当にボーイフレンドがあったら、いいわよね」

夢さんの生き方をもっと探ろうと誘い水をかけてみる。

「そうね、結婚に幻想なんて抱いてないわ。でもセックスはなくても生きられるけど、愛がなくては生きられないことは確かね」

なるほど、いいこと言うなあ！

ある日、夢さんが私のところにカップを持ってきてすわる。おや、これはめずらしい。何か話したいことがあるのかな？ 実はあとになってみればこの予感であたっていた。夢さんはこの時、もう重大決定をしていた。でもそんなことおくびにも出さないで、あたりさわりのない話のように装う。

「もうすぐ引越すことにしたの。今は母親が洗濯してくれるし、食事だって用意してくれる。楽だけど、一度、自分一人で何もかも全部やってみたい。大変かもしれないけど、試してみたいのよ」

まだ本当に言いたいことを言い終えないように、夢さんはめずらしくうじうじとそこにすわっていた。

夢さんの顔はいつもびかびか光って、三十過ぎには見えなかった。けれど今こうして背を丸めて話している顔を近くで見ると、目の下にこじわがあり、やっぱり年相応に見えた。「引越すのに、荷物を減らしたいから洋服をバーゲンしようと思うんだけど」

「洋服じゃなくてボーイフレンドの一人を買いたいわ」

自分でもドキッとするような冗談が自然に口をついて出た。すると夢さんも乗ってきて、目の前の学生を指さし、

「彼は三千円よ」

私はその若者の顔をのぞきこんだ。

「ずいぶんあんた安いのね」

彼は無表情に黙って、別の席に移ってしまった。我ながらずいぶん、立派な中年女の会話ができるようになったものだと感心する。

ミヨコと連れだって夢さんの家に服を買いに行くことになった。ミヨコは「ア

メリカン」の主と呼ばれている。「アメリカン」に通うために、親の家を出て、勤めに通い出し、アパートを借りたのである。毎晩、必ず「アメリカン」に寄り、ミルクを飲む。

「あした、夢さんの家に行くの、服を買いに」

なにげなく常連の医者に話した。もう五十を過ぎているおだやかな人物だった。

「僕も行くよ。あしたは休診日なんだ」

どうも本氣らしい。知らなかった。こ

のおじさんも夢さんファンだったとは。夢さんのことは何でも知りたい一人なんだ。

「だって夢さんのお古なんか、いらないでしょう？」

「娘に買うよ」

とうとう彼もついてくることになった。

夢さんの家は婦人洋品店だった。鉄筋三階建ての一階が店で、二階が両親の住まいで、三階を夢さんが使っている。トイレとキッチンもついていて独立しながら

「でも、三階に行くのに必ずご両親の住んでいるところを通り抜けなければいけない設計になっている。」

「私たち三人は日本語で話しながら行っただけで、当然のように夢さんにも日本語で話しかけた。ところが夢さんから返っ

「阪大の卒業式はどうだった？」
「学士入学なので、二年で卒業なのである。」

「着物を注文してたけど間に合わなくて、スーツで出たの。そしたらみんな華やかな着物姿で、私はとてもみじめだっ



てきたのは、英語だったので私たちの会話も英語にきりかわってしまった。おまけにラジオからもFEN放送の英語ニュースが流れてきた。あいかわらず英語漬けの夢さんだった。

「シュークリームを持ってきて、夢さんはテーブルに置いた。」

「それは着物のせいじゃなくて、年齢の差よ」

「私は毒づいた。それに構わず夢さんは着物を取り出してきた。」

「ほら、やっと出来てきたのよ、見て」
それは、薄緑色にブルーやオレンジで

桜の花がちった、美しい着物だった。まるで二十歳の女の子が着るような華やかなものだった。

「父が卒業と結婚のお祝いにくれたの」「結婚？」

「私たちは同じ叫びをあげた。引越しいとは聞いていたが、結婚とは匂わせもしなかった。」

「今までにこにこして私たちの話を聞いているだけだった医者も、驚きの叫びをあげた。落胆も隠し切れてはいなかった。」

「どんな人？」

「宮本君よ。貿易会社に勤めてるの」

「夢さんはご主人となる人をくんと呼んだ。」

「ああ、知ってる、知ってる」と、ミヨコが高い声をあげた。

「無料英会話教室に最初のころ、よく来ていた人ですよ。みんなでどこか行く時、電車の中で通路をはさんだ座席に座った二人が、見つめあっているのに気づいて、変だなあ、と思ってた」

「夢さんは苦笑した。」

宮本君は二十七だというから夢さんより八歳も年下である。

「いいなあ、八歳も若い人をつかまえられるなんて」

私は心底うらやましくなった。自分より若い男と結婚したいと思うのは、男だけでなく、実は女も同様だ。それが出来るのは夢さんに人を引きつける力があるからだろう。女だって実力さえあれば、いくらだって若い男が寄ってくる。

「宮本くんて『アメリカン』に来ていたの？ 会ったことあるかしら？」

「『アメリカン』に来て、ほとんど誰ともしやべらないで、本を読んでいるから気がつかなかったんじゃない？ 変人よ」

「そりゃあそうよ、夢さんの婚約者なら」またミヨコに毒づかれて、

「どうせ私はとても変わっているわ」

歌うように言いながら、夢さんは台所に立っていった。

無料英会話教室といえは、店を始めてすぐだから、もう五、六年もたつはずだ。そんなに長く夢さんに付き合っている

た人がいたのか。でもなんだか私はほっとしていた。夢さんは金持ちのアメリカ人にもひっかからず、所帯持ちの阪大助教授にもかかわらないで、普通のサラリーマンと静かな恋愛を育てていたんだ。もっとも相手が八歳も年下というところだけ、いかにも夢さんらしい。

私たちについて来た初老の医者、合があるので帰ると言い出した。夢さんの婚約者の話など聞きたくなかったのかもしれない。地下鉄の駅まで送っていた夢さんは陽気に帰ってきた。

「改札口でさよならのキスをしてきたわ。唇にしようと思ったら、断わられたから、ほっぺでがまんしたけど」

「まあ、改札口で？ 人が見ていたでしょ」

温厚な医者がとまどいながらも、喜んでいる様子が目に見えるようだった。

私たちはいよいよ夢さんの服を選びはじめた。壁面いっぱいにつくりつけになった洋服ダンスに服がきちんと整理されていた。私たちはそれをひっかきまわし、あれもこれもと身につけてみた。夢

さんの洋服を着ると、まるで夢さんになれるような気がする。

ひとしきりの騒ぎが終わって落ち着いた時、夢さんは切り出した。

「私、東京に引越すのよ。宮本君が転勤になってね」

ミヨコと私は同じ質問をした。

「じゃあ『アメリカン』は、どうなるの？」

「買い手を探しているんだけど。セツ、どう、買わない？」

これだったんだ、夢さんが珍しく私の側に来て、話したそうにしていた事は。でも私には家族もあるし、夜は塾をしているから、「アメリカン」に毎日、通う事など、とても出来そうになかった。

その話を聞いて、楽しかった気分が一変してしまった。「アメリカン」は、どうなるんだろうと心配だった。

その後、買い手が見つからず、夢さんは店をアルバイトの女の子たちに任せたまま、東京に行ってしまった。

——つづく——

(文中の人物はすべて仮名です)

(写真提供・筆者)

情報コーナー



女性だけのサークル

「STATION」

世代や自分を取り巻く環境を越えて、遊びを通じてのネットワークを広げてみませんか？

大阪を中心に神奈川、岡山、

兵庫に支部があり、メンバーは十八歳から七十六歳まで、未婚既婚、子どものいる人いない人、子育て中の人、手の離れた人とさまざまです。隔月刊で情報満載の会報も発行しています。

何か始めたい人、自分探しをしている人、八十円切手同封でお便りください。入会金は二百円、年会費、千四百円。



▼千561大阪府豊中市浜一―一八

―一五 荒井香織

☎&FAX〇六―三三六―七三九四

ポリオの女性の会

会員募集

私は、神戸に住むポリオの後遺症に悩む四十歳の主婦です。

この五月に「ポリオの女性の会」を発足させ、新聞にメンバー募集の記事を掲載してもらい、阪神間で四十名もの人と知り合うことができました。

通信も発行し、くつや補装具、筋力トレーニングの方法などの情報交換もできます。同じ障害を持つ女同士、精神面でも支え合っていきませんか。ご連絡ください。

▼千654神戸市須磨区多井畑東町二二―一五 柴田多恵

☎〇七八―七九六―〇七五七

文章講座を

開きます

「わいふは、いつも読んでくれるばかり。書こう!」と思いはするのだけれど、原稿用紙って遠く感じてしまふ。そんなことありませんか？

そこで思いきって、田中編集

長、和田副編集長に講師をお願いして、文章講座を開催することにしました。もう一度自分の気持ちを文字にしていこうと、学びなおしてみませんか。

▼日時 十一月八日(水)、十

五日(水) 九時三十分―十一

時三十分全二回

▼場所 寺嶋文化会館(柏駅徒歩四分)

▼会費 一講座につき二千元

▼お問い合わせ

▼千277千葉県柏市あけぼの三一―一五九―三〇七 鈴木博子

☎〇四七一―四七一―三三八八

子連れママ・

メッセージウォーク'95

赤ちゃんが生まれたとたん、不慣れた家事・育児の毎日に孤軍奮闘しているお母さんたち。でも、そんな苦勞を働けばかりのお父さんたちはまったく知らないのではないのでしょうか。

そんなお母さんたちの存在をアピールし、子育てに対する社会的な支援を求めるべく、平日の街へ繰り出します。参加してみませんか。どなたでも歓迎です。ご連絡ください。

▼開催日時 十月十二日(木)

午前十一時 日比谷公園集合

▼参加費 無料

▼お問い合わせ

▼千185東京都国分寺市本町二―一―一五 クリエイティブ・ムマザーズ内 子連れママ・メッセージウォーク事務局

☎〇四三三—三—四四三七
FAX 〇四三三—三—四四六七

夫在宅ストレスの方

参加してみませんか

夫在宅ストレスの方(定年後あるいは自営業の夫で、二人だけの時間が長すぎるためのストレスを抱えた方)の話し合い情報交換のグループを毎月第一水曜日午後、吉祥寺で開いています。十月四日、十一月一日、十二月六日です。入会金千円、参加費千円です。

通信も発行しています。B5判、四ページ、隔月お届けしています。希望者には見本紙をお送りします。年会費は送料込み三千円です。

清水女性問題塾 フェミニストセラピー あい 清水博子

▼〒167東京都杉並区荻窪三—四五一—二

☎〇三—三三九八—四三五四

三歳児神話を

打ち砕こう！

「わいふ」にもたびたび載る三歳児神話についての講演会を企画しました。お近くの方、どうぞご出席ください。託児も準備しています。

▼十一月十八日(土) 十時—十二時

▼場所 名古屋市勤労婦人センターにて

▼講師 中島美幸さん(ファイティ・ファイティ共同編集発行人)

▼参加料 五百円

▼連絡先 村瀬まで
☎〇五二—二〇三—四五四〇

私のPR

「きんもくせい」の香る

「ころ」を自費出版

きんもくせいの香る朝、母は

ホスピス病棟から旅立っていきました。末期ガンの告知、六度の入院退院を繰り返しながらも、至福の笑顔を残していったくれた母。

その母の生き様、怒り、涙、笑顔、そして、体温計さえ挟めないほどに痩せた体、無残な傷口に至るまでも見てしまった私。誰でも一生に一度くらいは、こんな「書きたい」情熱につき動かされる時が来るのでしょうか。

死を前にした母との日々があまりに眩しくて、とうとう一冊の本にしてしまったのです。

▼頒価 一五〇〇円

▼〒270千葉県松戸市幸合七八八倉持和子

☎〇四七三—四一—二〇二

「子どもの側から

学校みれば」を出版

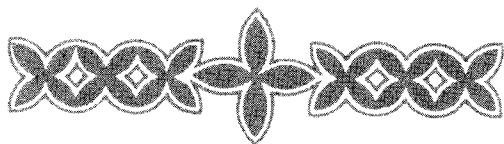
学校で起こったことを親に話す子は驚くほど少ない。そんな中で私の子ども達は、学校での出来事を細大もらず話してくれた。そこから知り得た数々の事件と、それらにかかわった私の体験を一冊の本にまとめた。

今の学校のあり方に疑問を！我が子の学校生活にもっと関心を！と、私はこの本の中で訴えている。我が子を教師に殴り殺されては、遅いのですよ、と。ぜひ一読を。森 ひろ子

▼定価 一五〇〇円

▼お問い合わせ 駒草出版(株)
▼〒170東京都豊島区南大塚二—一七—一〇 ☎&FAX 〇三—五九七六—二九九三





フリースペース



体罰について

京都市左京区 村井 尚子（32歳）

体罰とは何だろうか。教師や親といった権威を持つものが、弱者（多くの場合は子ども）に対して暴力的行為を行なうことによって「言うことを聞かせる」ことだそう
だ。

私には教師から体罰を受けた経験があり、直接事件を思い出すことは少なくとも、いまだに消えない深いこころの傷を抱えている。

ここで、あえて思い出しくもないあの出来事を文章化しようと思ったのは、他の人々に一緒に体罰について考えていただきたいということと同時に、その時の母の行動に敬意を表し、自分も子どもを持つ身として、我が子を守るための勇気を確認したかったからである。

小学校三年生の時の担任は、美術専攻の三十歳くらいの教師でS田といった。体罰

大好き教師で、生徒が吐られるような行為をしでかすのにやにやしながら次々と体罰を考案し、実行していた。

そろばんの上に正座させられるということも実際にあった。またコンスタントに行なわれていたのは、教科書や宿題を忘れてきた生徒を後ろに立たせる罰だった。それ
もただ立たせるのではなく、直立不動、教科書を両手で持ち、腕は九十度に前に掲げさせられた。その授業が終わるまでの四十五分間身動きすることは許されず、度々大きな定規で角度を計っては、下に下がってきていると言って怒鳴った。

「禁足」も毎日のように言い渡された。その日悪いことをした子どもは、放課後家に帰ってから一歩も外へ出てはならないのだ。戦時中の軍隊も顔負けではと思うが、相手はわずか八歳の子どもである。S田は明らかに授業そっちのけで、体罰を楽しんでいた。

私はといえば、元々優等生の部類に入っていたし、そんな恐ろしい体罰は絶対いやだったので、忘れ物はおろか、吐られそうなことも絶対にしなかった。

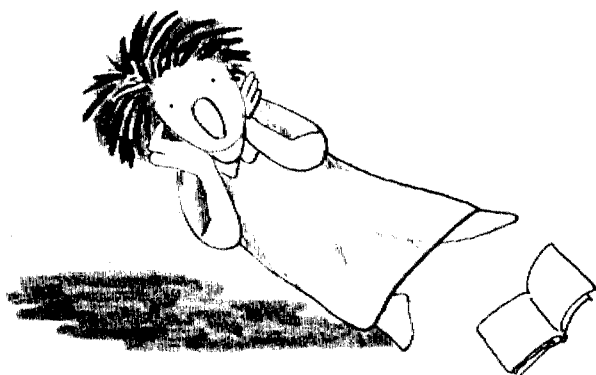
しかし、事件は起きた。

二学期にはいつてしばらくしたころ、私は「国語の宿題を出しなさい」という命令に愕然とした。宿題があったなんて知らなかったのだ。結局、いつもより多い七人が後ろに立たされた。そして「君が「宿題が出されたことを知りませんでした」と弁明した。七人の多くは前日の給食当番で、明らかに宿題は私たちが席を外した時に出されたものだったのだ。

しかしS田は、それを絶対に認めず、うそを言っていると激怒した。その日は、九十度立ちを一日中させられ、禁足の上、家で本人と母親の反省文を書いてくるように言われた。私は「私は宿題があることを知らなかったのだ、やってきませんでした」という趣旨のことを書き、母も私の意見を尊重することを書いてくれた。

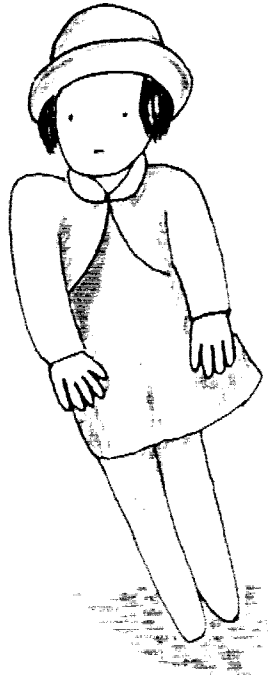
もちろん、この反省文はS田の逆鱗に触れた。九十度立ち、反省文はその後も続き、嘘をついたことを「認めた」者は、次々と許されていった。

最後に残ったのは私一人。一週間目に、教壇の上に立たされ「これ以上意地を張る



とどうなるかわかっているか」という問いにも自分を曲げなかった私は、怒りを抑えられなくなったS田に平手で側頭部を強打され、教壇の上にくずれて一瞬意識を失った。自分に過失のないことには謝らないというのは、人間として最低限のプライドだと今でも私は思うのだが、教師という權威の前には、生徒の人権ははかなくも弱い。その日早速、母が校長室に抗議に行き、「S田をやめさせなければ娘は転校させる」ことを告げた。校長は学年末まで我慢して欲しいと話し、実際、S田は翌春には転校になった。

しかし、事件から三学期の終わりまで、私はS田に徹底的に無視され、当てられないこともなければ、指導を受けることもなかった。それでも登校拒否にならずに学校へ毎日行けたのは、そのころ登校拒否という意志表示があるということを知らず（マスコミで取り上げられることはなかった）耐えるしかなかったこと、母が全面的に私を信頼し、励ましてくれたおかげである。余談であるが、S田が学校を離れる前に、それまで無視していた私のところに、にこ



にこした顔でやってきた。美術科出身であるS田が、私の祖父が画家だということを噂にきいて、詳しいことを知りたいというのである。突然、「なおこちゃんのおじいさまは」というような気持ちの悪い表現を使って強い者に媚びる、この男の本性を九歳の私は悟った。

それ以来、私は教師というものが全く信用できなくなった。相変わらず勉強は出来ないほうではなかったが、教師は授業をす

る人という認識しか持てなかったし、今に至るまで尊敬できる教師を一人も持たないのは、あの事件が尾を引いているにちがいない。

「体罰を受けたことによって目が覚めた」「体罰は必要悪だ」といったように、体罰を肯定的に論じる人がいる。しかし、十把ひとからげに論じるのはやめて欲しい。現にここに二度と癒えないほどのこころの傷を負った者がいる。

私が思うに、体罰には二種類ある。一つは愛情に裏打ちされたもので、教師と生徒の心の通いあいがあった初めて成り立つ。教師は決して感情的にならず、したがって、身体もこころも傷つくことはない体罰である。このような体罰をしばしば懐かしく思い出す人ものではないだろうか。

もう一つは怒りによって為される体罰で、教師が行為に及ぶとき、相手の顔は見えておらず、見えているのは自分の情動だけである。相手のためを思った体罰ではなく、自分のためになす暴力行為である。この場合、体罰を受けた者は、身体にもこころにも傷を負う。

言うまでもなく、絶対に行なってはならないのは後者の体罰で、私が受けた体罰もこれに当てはまるだろう。前者の体罰は、家庭や学校といった教育の場では、完全に否定は出来ないものである。

教師になる人には、自分の情動をコントロールして相手のことを考えられる人を選んで欲しい。そのほうがペーパーテストの点数よりも、よほど大切だと思うのだが……。

そして、子育てに関わっている母親として、自分の感情で子どもに手をあげることは絶対あってはならないと思う。また、子どもが危機的状況にある時には、絶対的に子どもを信頼して、子どもを守るためには手段を選ばない母親でありたいと思う。

冤罪

奈良県奈良市 田中 慶子（49歳）

松本サリン事件で犯人扱いされた、第一通報者の河野さんに対する疑惑がようやく晴れた。オウム真理教の犯行とわかったからである。

なぜこのような「冤罪」が生じたかいろいろ検証されているが、この事件の一連の報道を見てみると規模は比較にならないにしても、その一つ一つが九年前に私が体験したちよっとした出来事と、まるで相似形のようにことごとく重なった。

九年前、我が家の裏の家にかって来た夜中二時のいたずら電話の声が、私の声に似ていたという理由で、裏の主婦は私が電話をかけたと決めつけた。

その家には数カ月前から飼いだ犬が毎朝、明け方四時に鳴くと同時に無言電話がかかっていて、その主婦が必死になって電話の主を「誰だか知らない？」とみんなに聞いて回っていた。そんな時にかかった夜中二時の電話である。そしてその電話を私と決めてかかった上に、毎日かかっている朝四時の無言電話も、近所中にかかっていたいたずら電話も、全部私の仕業と決めつけた。

やっていないことをやったと言われた河野さんの事件と、私の体験を重ねると「冤罪の構図」が見えたような気がした。

人はどんなにおかしな理屈に合わない話でも、一方的な話を真に受けるものである。

河野さんの所有する薬品ではサリンが合成できないとわかってからも、相変わらず彼を犯人扱いした報道が続いた。警察の発

わいふ文章講座のすすめ

公民館、女性センター、社会教育課などのご依頼で、しばしば「わいふ文章講座」を開いています。

編集長田中、副編集長和田、わいふから巣立ったライター達を講師とし、五回から十回までのコースがあります。東京から遠いところ（大阪、新潟など）になると、田中か和田が一人で行って一回だけの講座ですが、初めて書く人にも分かるように、原稿用紙の使い方から自分史、インタビュー記事などのまとめ方までご説明しています。お住まいの地域で開きたい方は、お電話をください。資料をさし上げますので、それを持って公民館、教育委員会の社会教育課などに開講を頼んでみてくださいれば、引き受けてくれるところも多いと思います。

表をマスコミが無批判に受け入れたのだから。

今では私の潔白を信じている友人が言うのに、当時私についての噂はそのまま信用し、私をとて怖い人だと思つたらしい。「その話、おかしいとは思わなかった？」と含きくと、思わなかったというのである。私との付き合いが私がここへ引越して来て以来、その時点で二年あったにも拘わらず。悪いスキャンダラスな噂は、そのまま信用するものらしい。

人は大勢には逆らわない。

河野さんの時でも、マスコミ関係者で河野さん犯人説には疑問を持った人がいたそうだが、大きな声にはならなかった。私の場合でも、初めははっきり私の潔白を言っていた人も、顔の広い近所の姉妹どうしの主婦二人が、私が不審電話の主だと言いつつと何も言わなくなった。

●●●

いじめの張本人は当時者よりも第三者という気がする。

河野さんの時でも警察は断言していないのにマスコミが「サリンができたのは」

調査の失敗か」と、憶測したことが新聞には断定として載つたという。またタクシ運転手の証言として、河野さんらしき客が「核よりすごいものがある」と言つたという報道をテレビのワイドショーで見た。河野さんをいじめたのは、マスコミとその報道を真に受けた一般人ではないだろうか。私の場合も、裏の主婦が私を犯人だと言っている時点ではいじめではなかったと思うが、姉妹主婦二人が私が犯人だと触れ回り、そのために私に同情的だった者も、私との関わりを否定したり避け出してからはいじめの模相を呈して来た。河野さんの事件でもテレビは興味本位の番組を連日流した。私のことも「みんなが集まったら田中さんの話になって、結構楽しませてもらったわ」と無邪気に私に言う人もいた。

●●●

一旦犯人と決め付けられると修正は効かず、何を言っても何をしても犯人であることの根拠にされる。

河野さんのインタビューでの答え方があまりに落ち着き払っていたため、彼が犯人だと確信したと言う私の友人が二人もい

た。無実だつたらもっと強く抗議したはずだと言うのである。何て無茶な理屈だ。

私は逆に、インタビューでの答え方で彼は知性品性ともに高いという印象を受けた。そして確かな証拠がない上に彼のこの態度を見て、彼が犯人ではないという確信を強くした。しかしこの友人達のことは、私は自分のことで思い当たるふしがあった。裏の主婦に、

「明け方の無言電話は）田中さん？」と直接言われたが呑気な私は、

「いいえ」

と普通に言っただけだった。彼女は私の答え方で、私が犯人だという確信を強くしたのだろう。犯人でなかったらもっと怒るはずだと彼女は思い、私の穏やかな答え方で、私が犯人であるという確信を一層強めただろうということが、今になって友人達のことばでわかった。また夜中二時に電話がかかったというその日の朝に、そんなことなど何も知らない私は裏の主婦におみやげを持って行った。彼女に紹介してもらったホテルで食事をして来たからである。おみやげを持って行った理由は当然わかって

いるはずなのに、彼女は、「私が」様子を探りに来た」

と人に言っていたらしい。

●●●

人はとにかく犯人をはやく特定したいものらしい。非難攻撃の対象がはっきりすると心理的に落ち着くのだろう。

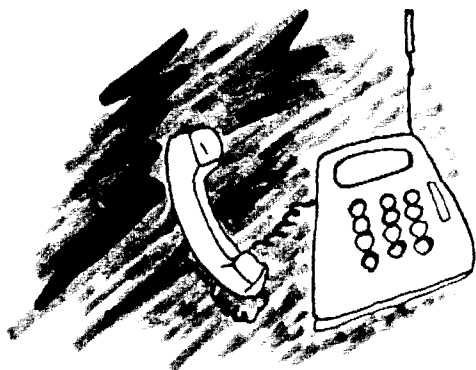
河野さんは犯人ではないと思うという私の意見を、友人たちは認めなかった。一旦彼が犯人と目されると、代わりの犯人が出て来ない限り、そのまま犯人でないと承知できないような彼女らの心理が見て取れた。日本国中みんなそうだったのではないだろうか。裏の主婦も私を不審電話の主だと決めてから、攻撃の対象がはっきりしたこと、それまでの不安定な精神状態から脱して楽になったのではないだろうか。

怯えるということは何と辛いことだろう。

私は人の声が怖かった。女性の声が怖かった。家の中いるところからも人の声が入って来た。逃げる場所がなかった。スーパールに行くとき人の視線が怖かった。みんなが私を見ているような気がした。私は

何もしていないのに。姉妹主婦二人がかなり広い範囲に噂を広めたと聞いていた。

それでも私は身の危険を感じることは全くなかったが、河野さん宅には昨年七、八



月だけでも無言電話、厭がらせ電話が百件以上もあったという。脅迫状も舞い込んだというし、世の中には気遣いじみた人間もいるからその恐怖は計り知れない。それも

全く身に覚えのないことでそうなるのだから。

●●●

確かな証拠もないのに自分の憶測だけでどうして犯人と決め付け、相手を罵倒することができののだろうか。

河野さん所有の薬品ではサリンが合成できないとわかってからも、警察は彼を犯人に仕立てようとし、

「死んだ人に申し訳ないと思わないのか」

と決め付けた言い方をし、自分を強要したという。私の場合も裏の主婦は、近所中にかかっているいたずら電話もみな私だと決め付け、

「みんな迷惑している!」

「私は白黒はつきりさせんと気がすめへん性質やねん!」

「四十代主婦のノイローゼや!」

と罵詈雑言を浴びせ、夜中の二時の電話に關してだけ弁明に行った私は、あまりにも意外な事の展開に啞然となってしまった。

河野さんに対する警察の尋問は私以上にすさまじいものだっただろう。相手が国家権力であるだけに、またあまりにも大きく理

不尽な運命の回転に、彼の恐怖、絶望はいかばかりだったろう。もともと河野さんは立派で、絶望しなかったさうだ。

一旦ついたイメージは簡単には拭い切れない。

河野さんが全くの無実と報道されてから、そのことは認めるにしても、彼の暗い感じがいやだという友人がいる。私にしても、不審電話の主ではなかったとわかってからも、そのイメージが払拭されていないのではないかと感じる事がしばしばあった。一旦ついた色は決して元の白には戻らない。



一般の人に比べ客観的に物事を見、論理的思考のできる人たちだと思っていたマスコミ関係者が、そういう思考習慣のない私の近所の、非論理的で印象が先行する人たちと大して違わないことに、私は少なからずショックを受けた。誤報の原因は人権意識が希薄であったことと、事実重視というジャーナリズムの基本が守られなかったことであると、関西大学の高木教授が朝日新聞で指摘している。

噂をまともに信用し、私を避けた人たち

に対してよりも、私の潔白がわかっていながら微妙な動きをした人たちに対してのほうが、私の気持ちは複雑である。

弱い者がさらに怯えるのを見て愉しむかのような言動をした人もいた。疑いの目を自分からそらすために、具体的に自分以外の名前を挙げる人もいた。生命、生活がかかっているわけでもないのに、自分の誇りを捨てる痛みも感じないまま、強い者におもねる人もいた。以前、姉妹主婦二人にいわれたと言って私の前で泣いた人が、この時は二人に同調した。一方自分は姉妹主婦とは親しいにも拘わらず、同調しないで私の潔白を、二人に対して言い続けてくれた人もいた。他にも、一貫して私の潔白を信じ態度を変えない人たちに、私は励まされ支えられた。

私は自分が疑われたのは私にそのイメージがあったのだらうかと思い、自分のあらゆる言動、性格を総点検し、すべてを反省した。しかしだいたいぶ経ってから気づいたのだが、我が家は犬の鳴き声の被害を一番に受ける位置にある。裏の主婦は毎朝四時の無言電話がかかっている時点で、私を疑っ

ていたのだらう。

冤罪的性格という点で河野さんと私の事件は似ているとは言っても、規模がこれだけ違えば異質のものになってくる。私は私の気の持ちようで解決できるし、最後の手段として引越してしまえばそれまでだ。河野さんの場合はまかり間違えば犯罪人となり、人生が大きく狂う。逃げようがない。私のほうは即座の応酬、切り返しの苦手な私の対応のまずさということが言える。最初に私が、自分の潔白を言うだけでなく私にも覚悟があるという言い方で一喝していれば、それで解決したと思う。河野さんは対応の仕様もなく不可抗力だったのだらう。冤罪ではないが松本サリン事件の被害者として、河野さんの妻は今悲惨な状態にある。これは生涯終わることがない。

「人の醜さをいろいろ見ました」と言う河野さんのことは、

「大勢の人にいじめられ、大勢の人に助けられた一年でした」

という彼のことはとともに、私の体験に照らして心の底にずしんと落ちた。

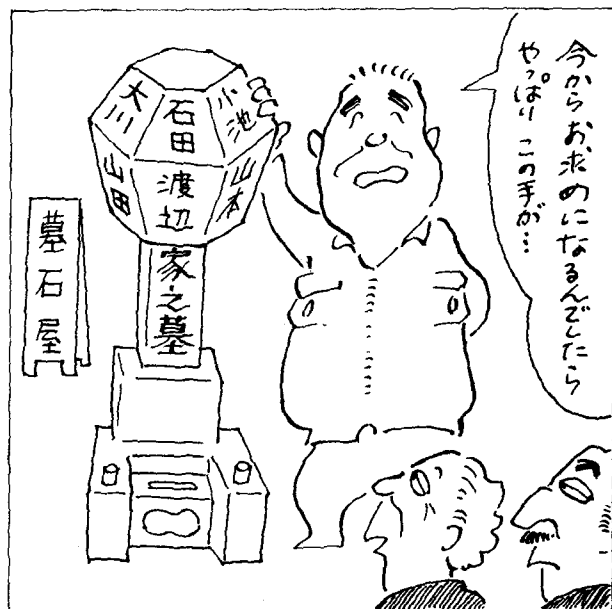
(え・田沼千恵)



平成
おたまたま
ジョ

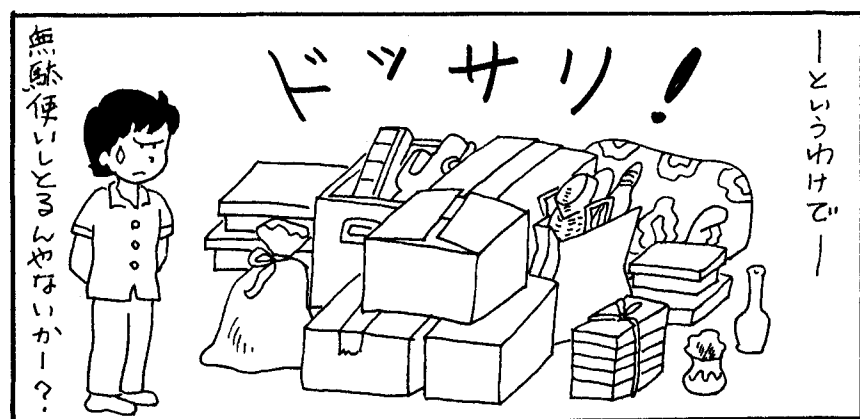
(22)

夫婦別姓時代の
甘幕開け



痛快! 一触

栗田 ^{シンケ} 光









Femme

ファミリテイク

Politique

編集室より

科学の進歩が招く未来

田中喜美子

●人類の偉大な功績であり、進歩の源と
思われていた科学の発達が、実はその反
面に予想のできない災厄を隠しもって
いた、ということを私たちに痛切に教えて
くれたのは「核」でした。

しかしそれと同じほど、いやあるいは
もっと深くおそろしいかたちで人間の自
然を破壊していく危険な科学が存在して
います。バイオテクノロジーや医学の世
界での技術の進歩です。

●生殖技術がそのひとつ。自然の行為で
は妊娠にくいカップルが、配偶者間の
人工受精で妊娠が可能になる。そこま
では誰でも容認できると思います。

しかしアメリカでも、フランスでも、
非配偶者間の人工受精、さらに第三者の
卵子や精子を使つての受精卵づくり、あ
るいは第三者の子宮を使つての出産など
が一般的に行なわれています。

●その結果が何をもちたらすか——おそろ
しいことに、この問題は「追跡調査」が
不可能なのです。生殖技術の結果がどん
な悲劇を生んでいるとしても、それは、
完全に闇から闇へ葬られてしまうのです。
当事者は絶対にその結果について語りま
せん。せいぜい、貸し腹をした女性や赤
ちゃんを渡すのを嫌がつて訴訟が起こつ
た、というぐらいです。しかし自分の
ルーツを知らない子どもは成人後のこと、

自分以外の卵子、あるいは精子で誕生した子どもにたいしての「親」の感情などは、ついぞ耳にすることがありません。すべては沈黙のうちに葬られています。

●次の国会で法案の審議が予定されているものに、臓器移植に関する法案があります。脳死状態になった人から臓器を取り出して移植すれば、もっと多くの人が助かる、日本も外国なみに——ということで立法化が企てられているのです。

法案の問題点はふたつあります。ひとつは、「脳死」となった人間を「死体」と決め付けようとしていること。他のひとつは、当人の意志が不明のとき、遺族が生前の死者の意志を「なんとなく」して臓器の提供を行なうことができるということ。●このうち考えれば考えるほどこわくなってくるのは、「脳死」は「死体」である、と決め付けようとしている点です。

脳死状態になった人間の体は、死んではいけません。脳が死ねば、人間がやがて死ぬことは確実であるにしても、脳以外の肉体ははっきり、生きています。脳死体から赤ちゃんが生まれることがあるの

をみても明らかです。その肉体を、是非でも「死体」と決め付けようとする、それはどうしてなのでしょう。

●死体は、モノです。モノならば、それに対してあらゆる操作を行なうことが可能です。科学はレスピレーターどころか、もっと精緻な技術を発明して「死体」を生かしつつけることができるでしょう。そのとき「死体」はどんな実験の対象となるか。考えると身の毛がよだちます。

●あるものを「手に入れたい」という人がいる。ならばその欲望は満足させるべきだ。関係者のすべてが納得しているなら、悪いことは何もない……技術に奉仕する人たちはいつもそう言います。原子力も、それを手に入れたい、という人間の意志から作られ、そして「善い」と考えられる目的のために使われたのです。●次の国会で、臓器移植法案が審議されようとしています。多くの議員たちは、この法案にはほとんど無関心です。しかも私たちの未来は、彼らの動きによって大きく左右されてしまうのです。政治ほど大切なものはない、と私は思います。



ピンポイントニュース



折畳み傘がいい

東京都品川区●菊池裕子(47歳)

雨の日の満員電車で濡れた傘を巻いてくれない人が多い。特に長い傘は柄を腕にかけると先端が三十センチくらい飛び出し、人の足をついたり、靴や足

元が濡れて困る。

座席で本を読む時など、傘を滑らせて床へ倒した経験は、誰でも一回はあるだろう。隣の人の濡れた傘でヒザが冷えて困ったこともある。

雨上がりの忘れ物は引き取り手がなく、使い捨ての時代に拍車をかけている。ゴミ問題も考えて「忘れ傘」を減らす努力が必要だ。

今私が使用している折畳み傘の重さは、たったの一六〇グラム、長さは二〇センチのコンパクト型。濡れても二〇〇グラム程度なので軽量である。バッグに入るから、人に迷惑をかけることもない。

色柄や形もファッションの一部だが、これからも「日本一軽い傘」を探し続けようと思っている。ビニール袋に入れて自分のバッグにしまえる、折畳み傘をお勧めしたい。

私もひとこと

胡瓜

東京都新宿区 太田和枝

数年前から、干葉に小さな畑地を買って花や野菜を育てている。といっても素人がたまに行つての農作業だから、失敗の連続で収穫は殆どなし。ところが先日久しぶりに行ってみたら、雑草にまじつて何と、三〇センチ余りの巨大な胡瓜が五本もぶら下がっていた。こんな大きいのは初めて見たので、さては突然変異の新種では?と慌てて苗屋に聞いたら、胡瓜は放っておけばみんなそのくらい大きくなりますよ、と笑われてしまった。

ある待合室

東京都 T・M

病院の待合室で順番を待っていた時のことです。後ろのほうで老夫婦らしき人の話し声がきこえます。「あんたは自分が具合悪いときはすぐに大騒ぎして、病院だ医者だとなわしに世話をやかせるけど、私が倒れたらあんた、面倒をみてくれますか?……相手のご主人は黙ったままです。日ごろ私が夫に対して抱いている不満もこの人と全く同じなので、おもわず振り向いて、「そう、その通りですよ」と声をかけそうになりました。

シリーズ老後の暮らし ③

お年寄りが安全に暮らすために

定価 一五〇〇円

老いても我が家で暮らしたい——それがお年寄りの自然な気持ちです。でもお年寄りだけの暮らしには、危険がいっぱい。



急病、火事、水の事故、交通事故——どんなとき、どんな危険があるのか？ どうしたら危険を防げるのか？ いざというときに備えて、財産の管理は？ 保険は？ 困ったときの相談窓口など——。

すぐに役立つ情報が満載されているこの一冊で、安心を手に入れてください!! 老親と離れて暮らす子どもたちにもおすすすめです。

注文はお電話で

わいふ編集部＋太田差恵子
☎〇三—三二六〇—四七七一

今秋発刊予定

安くはいれる 有料老人ホーム (仮題)

わいふ編集部 編 ミネルヴァ書房 刊

ある人が「子供の世話にはなりたくないし、なれないと思うので、老人ホームに入らなう。60万円くらい」と言うのです。「どうして60万円？」と聞くと、「知り合いの重役夫人が、旦那が死んだら入った。60万円。あんな奥様が入るのですもの、私なんか入るほかありませんわ」

60万円です。有料老人ホームに入れた重役夫人。これは賢い人です。有料老人ホームには何千万、い

や、億ションまでありますが、60万円です。入れたのはケアハウスというものに違いありません。現在厚生省が奨励して、続々各地に建ちつづつあります。自由契約、収入制限なし、もちろん個室。そんなところを利用して、お金は外国旅行など楽しむために使うのも、堅実な考え方です。安く入れる自由契約ホームを網羅した、この本の情報をあなたもご活用ください。

私もひとこと

タイトル・住所・氏名

本文

投稿してみたいけど、長いのはチョツと
という方のために新コーナーができました。
暮らしの中でふと感じたこと、伝えたいで
きごとなど、どんなさきやかなことでも結

構です。あなたの声をお待ちしています。

このコーナーの投稿には、右の原稿用紙をご利用ください。

●タイトル、住所、氏名は一行めに。もし、

二十字を超える場合には罫目にこだわらず
小さい字で、住所、氏名は他のコラムを参
照してください。

●二行めから本文、全体で九行一八〇字。

女たちの情報紙

ふえみん

f e m i n

婦 人 民 主 新 聞

WOMEN'S DEMOCRATIC JOURNAL

ご希望があれば見本紙を送ります。

申し込み先 婦人民主クラブ 週刊1ヵ月 750円(送料込)。

東京都渋谷区神宮前3-31-18 電話03(3402)3244, 3238

大阪市北区中崎西3-1-5 電話06(371)2429

ふえみん・おんな・はたらき・がっこう
 アジア・たべもの・せつけん・げんぱつ

父母と子の立場から教育・学校を考える

母と子 十月号

五〇〇円・千七百六円
 (見本誌(旧号)進呈)

今月の視点

学校図書館の司書

母と子

二月臨時増刊

いじめの迷宮

一〇三〇円
 千八百四円

私の意見

いじめ、いじめられる体験者、その母親や教師などからの
 手記、意見16通。

「いじめ」という迷宮 佐々木 光明

追いつめられる子どもと必要なこと

いじめの再生産システム 前田 功

娘をいじめで自殺させられたことによって、いじめら
 れている親からのメッセージ

いじめとわが国の社会文化構造 福田 雅章

いじめ事件への弁護士の間わり 児玉 勇二

いじめ事件裁判の見方 山岸 秀

裁判所の判断と教育の論理

資料 いじめ自殺への社会的対応

新聞報道で読む岡山県総社市での事件とその後

お申し込みは書店か母と子社へ

〒203 東久留米市中央町五-四八
 ☎〇四二四-七四一九一二五

母と子社

要介護になったときが心配

高齢になったときの心配のひとつに介護の問題があります。

厚生省の調査では、二〇二五年の日本の予想総人口一億二五八〇万人のうち六十五歳以上の予想人口は三三四万人、総人口の二五・八％にあたります。

そのうち要介護老人の総数は五二〇万人、六十五歳以上人口の四％にあたります。これらはあくまでも予想の数字ですが、四％の方が何らかの介護が必要ということになります。

寝たきりの老人の出現率は八十歳以上になると五・六％になり、高齢になるほど寝たきりになる可能性が高くなります。

しかし脳卒中などの脳血管性疾患で倒れ、寝たきりの状態になったときは、介護が長期になると言われていますが、山形大学の調査によりますと、最期の病臥は二週間未満の人が四六％、大半は一カ月未満でした。一年以上介護が必要だったのは八％で、高齢による最期の介護は、それほど長

期にはならないようです。

介護型の有料老人ホームの平均入居年数はだいたい三年くらいだといわれています。

老人ホームは大きく分けて二つの種類があります。入居するとき、自分の身の回りのことができる人が入居する健康型と、介護が必要な人が入居する介護型です。

この二つのタイプの老人ホームは、ハード面もソフト面も根本的に違いがあります。いずれくわしく解説しますが、介護が必要になったとき、どう住み替えるかを、はじめから考えておかねばなりません。

終身ケアのついているホームでない、入居しても安心感が持てない、と一般には思われているようですが、住み替えのシステムをうまく使っていけば必ずしもそうではありません。ただそのためにはホームの種類を選ぶ必要があります。これからだんだん、選び方のコツをお伝えしていきます。

担当 水落

わいわいがやがや

老人とオシメ

神奈川県大和市●浅田節子（63歳）

クタクタになって、九州（宮崎）から神奈川の我が家にとどり着いた。

八十五歳の母がチョツとした風邪が引きがねになり、寝たきり老人になったので、その介護から帰ってきたわけである。

母は一步も歩けないのに、手は自由に動く。それがいけないのだ。

恥ずかしいが、明治生れの母は、未だに「おこし」をしていて、パンツをはいたことがない。

それが急にオシメの生活となったから大変！「キモチワルイ」を連発して、オシメを自分で取ってしまう。

運の悪いことに、その後に必ず、ウンチをしているのだ。布団はビニールがしきつめてあるからいいとして、タオルケット、

ネマキ、それに腰から下、足に

いたるまで、ウンチだらけ……

そのサマを最初に発見した時は、どうしよう——と、ただ立ちつくす私であった。

そうだ、オシメカバーのマジックテープのところに安全ピンで止めよう——と思いつき、

これだ安心と思っていると、案だったのはたったの一日だけ。

二日目にもう、オシメカバーを両手で下におろして、まるでパンツをぬぐようにして、またウンチである。

病院生活から現在は自宅介護となり、三人姉妹で力を合せて、とにかく交替で介護に当たっている。

母の姿を見て、もし私もこのようになつたら、どうしよう——と不安はつのるばかり。だけれだって好きこんで、オシメの生活になるわけではない。自然の力には、どうすることもで

きない。

数日したらまた飛行機で母のもとへ向かうが、ルス中は定年の夫が「主夫」をやってくれるのでありがたい。長寿時代の今——私のように苦しんでいる人も多いのだと、自分にムチ打ってただ母を守るのみである。

黄色いふうせん

千葉県市川市●近藤美子

三十歳を超え数年たったころ、アメリカに住む学生時代からの友人の嬉しい便りが届いた。「私もついに母になるのよ」

彼女のはずんだ笑顔を思い浮かべながら、私は「妊娠とお産」の本や雑誌を送った。私も妊娠中にその手の本や雑誌を暗記するほど読んでいたので、つい送ってしまったのだ。

しかし、それから何週間か

たったある日、思いもかけない悲しいできごとが起こった。

「駄目になっちゃったの。病院に着いたときには手遅れだったの」

あんなに喜んでいたのに!!
すでに一人の子持ちだった私は、
なぐさめの言葉を見つけることができない。口がさけても一般的に言われているように「次の子があるじゃない」なんて言えないし、言いたくない。

どうしていいかわからず、しばらく手紙を書くこともできないでいると、彼女から「最後のおわかれ」をしたという便りが届いた。

アメリカには、精神的・肉体的なダメージを受けた人々が集まって、お互いをはげまし合うグループが多い。子供を失った同じような境遇の人々が集まって子供におわかれをするのだという。

女の子を失った親はピンクのふうせん。

男の子を失った親はブルーのふうせん。

性別がまだ分からない子を失った親はイエローのふうせん。

それぞれのふうせんを一齐に空に放つ。私の友は黄色いふうせんを空高くかかげ手を離した。高く高く高く、だんだん小さく小さくなってフツと見えなくなるその時まで黄色い点を目で追った。そして完全に目の前から消えてしまったその瞬間、彼女は小さな命とお別れをし、新たな一日を歩み出したのだ。

今では四歳になる養子と共に楽しい毎日を送っている友は、それでもいつか自分の子供を生まみ育てるという夢を持っている。四十歳まであと二年弱。まだまだ夢だけは大きく持っていたと思う。

ハンカチの木

東京都新宿区●時尾松子

「ハンカチの木って知ってる? その花が咲いたんですって、見に行きましょうよ」と友達が誘いにきた。日本に二本しかない珍しい木で、その一本が小石川の植物園にあると、NHKの深夜放送で聞いたのだそうだ。めずらしものの好きの私は、予定の仕事を放り出して、いそいそと彼女に同行した。

植物園に着くと入口の案内所の前で、年配の人たちが何人も口々に「ハンカチの木はどこですか」と尋ねている。係員はもううんざりという顔つきで、黙って目の前の案内板を指さしたまま。みんな目的は同じらしい。放送の反響の大きいのにすっかり感心しながら、私達も後をぞろぞろとついていった。「赤ひげ」の小説で有名な小石

川養生所跡を曲がった辺りの、薄暗い木立の中にその木はひっそりと立っていたが、お目当ての花は一つも咲いていなかった。

よくよく聞いてみると、東京での花期は四月末ごろで、深夜放送のアナウンサーは、日光の植物園にあるもう一本の、ハンカチの木の開花を話題にしたということがわかった。今はもう五月の末である。「うつらうつらしながら聞いていたもので……」と友達はすっかりしよげこんでしまったが、とすると、今日来たこの大勢のがっかりさん達も、みんなうつらうつらの早とちり組と、私みたいな調子のいいやじ馬連、というわけだ。

来年の楽しみが一つふえたとおもえばいいのよ、と慰めあいながら広い園内を散策したが、花菖蒲がみごとに咲いているのに出会い、すっかりご機嫌で帰ってきた。

次号投稿募集

●特集テーマ投稿

二五七号の特集テーマは、「ああ、マンション暮らし！」です。

都会の生活で一戸建て庭つき、という居住空間を確保するのは至難のわざになってきています。そこでどうしてもマンション暮らし、ということになるのですが、集合住宅での暮らしは歴史の浅いこともあって、思わぬトラブルが発生することがあり、逆に、新しい私たちのコミュニティがつくれる動きも少しずつあるようです。

あなたの体験したマンション暮らしの楽しかった体験、大変な思いをしたトラブルなどをお寄せください。

四千字前後。締め切り十月二十五日。

●二五八号特集テーマ原稿

来年二月一日に発送される号ですが、編集作業が年末年始にかかるため、募集テーマを今号でお知らせし、早めにお送りいただきたいと思います。

テーマは「不況と家計」です。今時の大晦日は借金取りが押しかけるわけではない

が、不況で少ないボーナスから、住宅ローンをこすり引かれて、痛い痛い思いをなさる方もあるのでは？

不況下の家計を支えるため、仕事に就いた方、あべこべに失業した方、うんと節約して乗り切ろうという方、借金をした方、不況ゆえのさまざまな家計状況、その対策など体験談をお寄せください。不況を逆手にとって儲けた話でも結構。

締め切り十二月十五日必着！

●二五七号の時事放談のテーマは、「北京会議ごぼれ話」です。

北京の女性会議には何と五千人以上の日本女性が参加したと言われています。わいふの読者のなかにも参加なさった方はいらっしゃるのではないかと思います。

公式的レポートは各地で出されると思いますので、次回の座談会では、あまり公式の席上では言えないような面白いご体験を、ホンネのところで語っていただけたらと思います。

日時は十月十六日(月)二時より。

場所は「わいふ」分室で。十月十三日までに、電話で編集部にお申し込みください。

ご要望がしばしばあるので、原稿の添削をすることになりました。添削して欲しい方は、左記の要領でお送りください。

●添削のみ希望の方は、原稿の最初に「添削のみ希望」と赤字で書くこと。

●「わいふ」に投稿して、さらに添削希望の方は「投稿、添削も希望」と原稿の最初に赤字で書くこと。

●投稿して、ボツになった場合のみ添削して欲しい方は、「ボツのときは添削希望」と、原稿の最初に赤字で書くこと。

添削料は四百字詰原稿用紙一枚につき(ワープロ原稿は20字×20行で打つこと)二千円いただきます。返送の際振替用紙を入れて、返送料共にご請求します。

誤字、仮名違い、文法、文脈などの誤りを止したうえ、編集長か副編集長が講評をいたします。

編集長の著書「書きたい女たちへ」も、基礎を勉強したい方にはおすすめてです。ご注文ください。

わいふ 投稿規定

●定期購読者はどなたでも(男性でも)投稿できます。原稿には住所(郵便番号、都道府県名から)、氏名、会員番号を明記のこ
と。誌上匿名・ペンネーム可。

次のコラムを設けています。

●エッセイスト・クラブ
(二六〇〇字まで)

びたりとキマった文章、豊かな内容を持
った随筆をお寄せください。

●ズバリ一言(二六〇〇字まで)

オピニオン、評論、改善策の提案などの
欄。政治、事件、芸術から身近の商品、
サービス、その他細かいことまで何でも遠

慮なく言うてください。ただしなるべくあ
なた独自の考えを。

●マイジヨブ・マイホビー
(二六〇〇字まで)

本格的な職業生活から、パート、アルバ
イト、内職までの仕事について、また楽し
み、生きがいとしての趣味について、いず
れにせよあなたの活動報告をお待ちしま
す。

●家族と私(二六〇〇字まで)

一つ屋根の下にいる夫や子供はもとよ
り、別居している親(舅・姑も含み)、成
人して離れた子供、他人の始まりといわれ
る兄弟姉妹など、とにかく「身内」とあな
たの関係レポートをどうぞ。

●おさない子を育てる
(二六〇〇字まで)

子育てではやはり、女性にとっての最大の
関心事です。おかない子はいかいいい、だけ
ど子育てはホントにしんどい!
現実のなかから、あなたと子供のありの
ままの関係を浮きぼりにしてください。

●大人になりかかった子供たち
(二六〇〇字まで)

反抗期、思春期、青年期の子供と親の関
係についてお書きください。大きくなった
子供の問題は、これまであまり言い立てら
れなかったと思いますが、若いお母さんに
も将来の参考になるはず。体験談をお待ち
します。

●忘れ得ぬ人々(二六〇〇字まで)

印象の深かった人の姿を描写してくださ
い。想い出の中にある人、現在関わってい
る人どちらでもけっこうです。いやな奴、
すばらしい人、奇人変人、あなたの詳しい
観察を。

●フリースペース(二六〇〇字まで)

どんなテーマでも書けます。思想・信条
にかかわらず、一〇〇パーセント言論の自
由のある「わいふ」ならではのコラム。

●わいわいがやがや(八〇〇字まで)

誰でも気軽に書けるコラム。

●サブレシーブ(八〇〇字まで)

本誌の投稿や記事についての反響をお載
せします。感想、反論、何でもどうぞ。

●ピンポイントニュース

(四〇〇字まで)

ねえみなさん聞いて聞いてーと言いたいほんのちょっとした話のページ。こうやったら簡単に天井の掃除ができた、でもよし、安い旅館をうまく見付けた、でもよし。安い買い物、すてきな商品、何でもみなさんの役に立つごくごく小さいニュースを集めたいのです。

●おすすめの一冊(八〇〇字まで)

書評のコラム。女性問題にかぎらず、視野の広い読書体験を。

●情報コーナー(四〇〇字まで)

お知らせ、募集、お願い、探しもの、交換、相談、何でも。なるべく短く、要点をまとめてください。

コラム以外の投稿募集

●特集テーマ原稿

毎回テーマを設定して募集しています。

●特別寄稿

ルポルタージュ、自伝史、伝記、旅行記、その他の体験記、評論、小説、どんなジャンルのものでもけっこうです。枚数も

自由。本誌に適當と思われるものは掲載します。長編なら連載になります。

本誌には合わないが、価値ありと思われるものは、出版社に紹介、推薦します。

●カット・イラスト・写真・コミックも募集しています。ご自分の投稿にイラストや写真が用意できる方は、あわせてお送りください。

注意

●投稿は一人一篇に限ります。

●ただし次のコラムへのご投稿とは違ってかまいません。サブプレシプ・ピンポイントニュース・情報コーナー。

●投稿は原稿用紙に。本誌はタテ組みです。ヨコ書きはご遠慮ください(書き直すことになるので)。

●ワープロ打ち原稿は、字詰め二十字、二行を一枚に、行間をあまり詰めないよう、また禁則処理をしないで打ってください。

●ファックスでの投稿は受け付けません。

●投稿は多少添削することがありますのでご了承ください。

●締め切りは原則として偶数月の二十五日

(当日必着)。それ以後に着いたものは次号まわしとなります。規定枚数はきっちりではなくともよく、長くても内容がよければお載せします。

●他誌との二重投稿はお断わりします。

●原稿はお返しできませんので、必要な方はコピーをとってからお送りください。

●匿名、ペンネームは原稿の最初に。住所、本名は、そのすぐあとに併記してください。

また整理の都合上、住所には郵便番号を付記し、本名には会員番号(本誌送付封筒の宛名の下と、振替用紙にあります)を付記してください。

●ペンネームをいくつも使い分けるのは、ご遠慮ください。居住地もとくに理由がなければ記載したのでよろしく。ただし匿名・ペンネームは原則として自由であり、書くことの自由を守るためであれば、むしろ積極的に評価します。濫用は困る、ということです。

●年齢をお書きそえになりたい方は、名前の下に算用数字で。

●おたよりで掲載ご希望でない場合は、必ず私信とお断わりください。

編集だより

●心配で心配でならなかった投稿の数、今回はぐっと持ち直して一〇三通。編集部は大喜びです。特集投稿も多く十編、掲載は四編にとどめました。が他のものも迫力満点で、ずいぶん選択に迷いました。

●「私もひとこと」という新しいコラムをつくりました。ごく気楽に短いものを書いていただくためのコラムです。一四四ページにそのための原稿用紙をつけました。活用なさってください。

●この度「シリーズ老後の暮らし」その③として、「お年寄りが安全に暮らすために」という手引書をつくりました。

高齢の方ご自身ばかりでなく、親御さんと離れて暮らしていらっしゃる子世代の方この一冊で安全と安心を手にとってください。

いま、「介護保険」のことが言われていますが、役に立つ「保険」のことも書いてあります。注文は編集部へ。一五〇〇円です。

●連載中の「シベリアの青春」福井秀雄著の原作「青春の長い道」満蒙開拓青少年

義勇軍の名のもとに——が一冊の本となりました。わずか十四歳の少年が「義勇軍」の名のもとに駆り出されて辛酸をなめる、豊かな現代の生活からは思いもつかない記録です。「わいふ」でも扱っていますので、ご注文ください。二〇〇〇円です。

●暮れの原稿締め切りを十日早めました。十一月十五日が締め切りです。

●どうしたら投稿がボツにならないか、みなさんいろいろ考えをめぐらせていらっしやるらしい。要は、投稿内容に、どれだけの迫力ある人生の真実が描かれているかです。文章の上手下手、思想信条は問題ではありません。かといって、人の驚く体験を持っているばかりが能ではないのです。

日常のさりげないヒトコマにも、書く人の感受性によってキラリと光る発見があるものです。そういうものも大切にしていきたい、と思っています。どうぞよろしく！

編集長の田中が月二回、日本教育会館で教育相談をやっています。子育てについて疑問のある方、お電話ください。03-5740404まで

□購読申込は……ハガキか電話でどうぞ。

すぐ本に振替用紙を添えてお送りしますので、折り返しご送金ください。バックナンバーのご注文も同様。

WIFE・256

(隔月刊)

1995年11月1日発行

編集・わいふ編集部

定価550円(本体533円)

(年間購読料送料共4500円)

印刷・平河工業社

発行所・樹グループわいふ

東京都新宿区矢来町115

東海神楽坂マンション406

〒162 TEL (03)3260-4771・4773

郵便振替00150-3-110430

加入者名 わいふ編集部

□購読中止は……必ずお申し出ください。

送金をお忘れになる方が多いので、誌代が切れても引き続き送本しています。お申し出がないとお送りしてしまうので、ぜひハガキか電話を。

最新刊

野遊びウツキングガイド
大海・浮き・野遊びの道具を持って野に行こう! その地の食材と調理法を工夫して、そこで食べる楽しさ満載。●カラー多 ●1600円

いなかに移り住むということ
寺田瑛子著「何十年も離れていた家に帰って来たような気がする。」
1ターン熟年夫婦の新鮮ぶるさと探しと驚きを描く。 ●1700円



うおつか流

生活リストラ術

1人1月9千円の食生活で一躍話題の魚柄氏が、今度は東京目黒区に住んで2人1月12万円(家賃込み)の生活術を大公開! 豊かで楽しいリストラ術の本! ●1300円

うおつか流

リストラ元祖の好評書! ●各1300円

清貧の食卓

●からたによれば地球に
よい・楽しいリストラ術

台所リストラ術

●1人1月9千円・実用的
な台所・食卓のリストラ術

写真・イラストで
よくわかる!



入門基本応用へと、イラスト・写真でよくわかる! ネイチヤーズ あけびを編む クラフト

谷川栄子著 あけびを中心に26種の植物のつるの採集方法、つるの特徴と作品作りまでを初心者でもわかるように解説。親子で楽しめます。●カラー写真24頁付 ●2600円

■アウトドアを楽しむ本
野山の薬草
自分での健康茶
つくろう健康茶
薬湯・身近な野草
で健康風呂

野草の奥つけ方と園への図鑑
伊勢谷自然友の会編 ●1350円
季節に合わせた採集法・利用法
孝記に合わせた採集法・利用法
大母 淳著 ●1700円
野草木の採取・加工法のコツ
大母 淳著 ●2300円

●生き活き人生シンプルライフ! 魚柄仁之助第三作

●いそがし母さん便利本!



ひとりでも食べつきり上手

「これならなんでも食べられる」

多くの材料を買ってもムダにしないでおいしく食べる知恵、調理法が似た陣出などの応用、少量料理ならではの多彩な実用書!

●手抜きで楽しい自炊 ●隠さない・食べきれない料理術 ●形を分ける料理術 ●海藻・乾物などの元気のモトを食卓へ他は充実本 ●便利な素材別索引付 / 大活字 カラー口絵 イラスト豊富 ●1400円

ひとりでも安心料理

坂本廣子著 ●炎のない調理のすずめ 電化製品を使いこなして昔ながらの懐かしい味を、一人でも安全に簡単に作る手引書。 ●1300円

医食同源世界の銅料理

能宗久美子著 ●同じ素材で和洋中を楽しむ 北から熱帯の銅まで76種。民間療法、薬膳、ハーブ療法銅まで。 巻頭カラー24頁 ●1400円

素材の持ち味を生かし切る料理集! 簡素な食事の本 ●四季の味、いつもの味

千葉道子著
●1500円



シンプル(簡単)でおしゃれ(素敵) 銅器とちがう、洗練された簡素なおしゃれな食事の基本と応用百六十のレシピ / ●農文協の好評ウツキングブック

だしの本 ●千葉道子著 ●毎日のだしから濃縮だしまで ●1300円
時短料理の本 ●段取りスムーズ、仕上がりピタリ! ●1500円
自然流「乾物」読本 ●津村磨子著 ●読んで楽しい実用乾物百科 ●1600円
旬を食べる ●藤井平司著 ●4つの四季と野菜の四季 ●1240円

日本型企業社会と女性労働

労務管理と家族対策の相互連関

藤井治枝著 かつて国際的に注目を集めた日本の経営の普遍性の変貌が余儀なくされる中、日本独特の女性労働問題を明治から今日まで、実証的に解明する。

◎シリーズ〈女・あすに生きる〉⑦ 予価三〇〇〇円

近日常

家族・ジェンダー・企業社会

ジェンダー・アプローチ

木本喜美子著 現代日本における企業社会と家族の関連を解明するための方法的考察―ジェンダー・アプローチを中心とし、日本の現状を分析する。 予価三五〇〇円

近日常

女・老いにのぞむ

樋口恵子監修

第13回女性による高齢社会シンポジウムの記録

《老いの視点から家族を問い直す》

高齢社会をよくする女性の会編 老いの住まい方、老人性痴ほう等、身近で深刻な問題を語りあう。 二〇〇〇円

発達心理学とフェミニズム

柏木恵子／高橋恵子編著 心理学が読み解いてきたものは何であったのか。ベニス羨望も母子愛着論も知能の研究も単に時代の産物でしかなかった。男と女の比較が産み出してきたものを清算する。

二八〇〇円

シリーズ〈女・あすに生きる〉

A5判美装カバー

① 私の「女性学」講義【三訂版】

ジェンダーと制度

小松満貴子著 トータルな人間観察の新しい方法を模索する「女性学」。 二八〇〇円

② 図表でみる女の現在

男女共生への指標

フォーラム女性の生活と展望編 空前の図表数四六〇点でみる女の現在。 二八〇〇円

③ マネー&マリッジ

貨幣をめぐる制度と家族

J・パール著 室住真麻子他訳 「財布」を解明する。 二八〇〇円

④ 日本の家族を考える

女・男・家族のゆくえ

吉武輝子編 福島瑞穂他著 「私」が望む家族のかたちを女たちが語る。 一八〇〇円

⑤ 学んでみたい女性学

フェミニズムと女性の生活

中田照子/J・サンボンマツ他著 女性をめぐる現在に焦点をあてる。 二〇〇〇円

⑥ 法律でみる女性の現在

ライフサイクルと法

高橋保著 女性に関する重要法律を家庭生活、社会生活の両面から網羅。 三五〇〇円



ミネルヴァ書房

〒607 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 宅配可・価格は税込み。
TEL075-581-0296 FAX075-581-0589 振替01020-0-8076